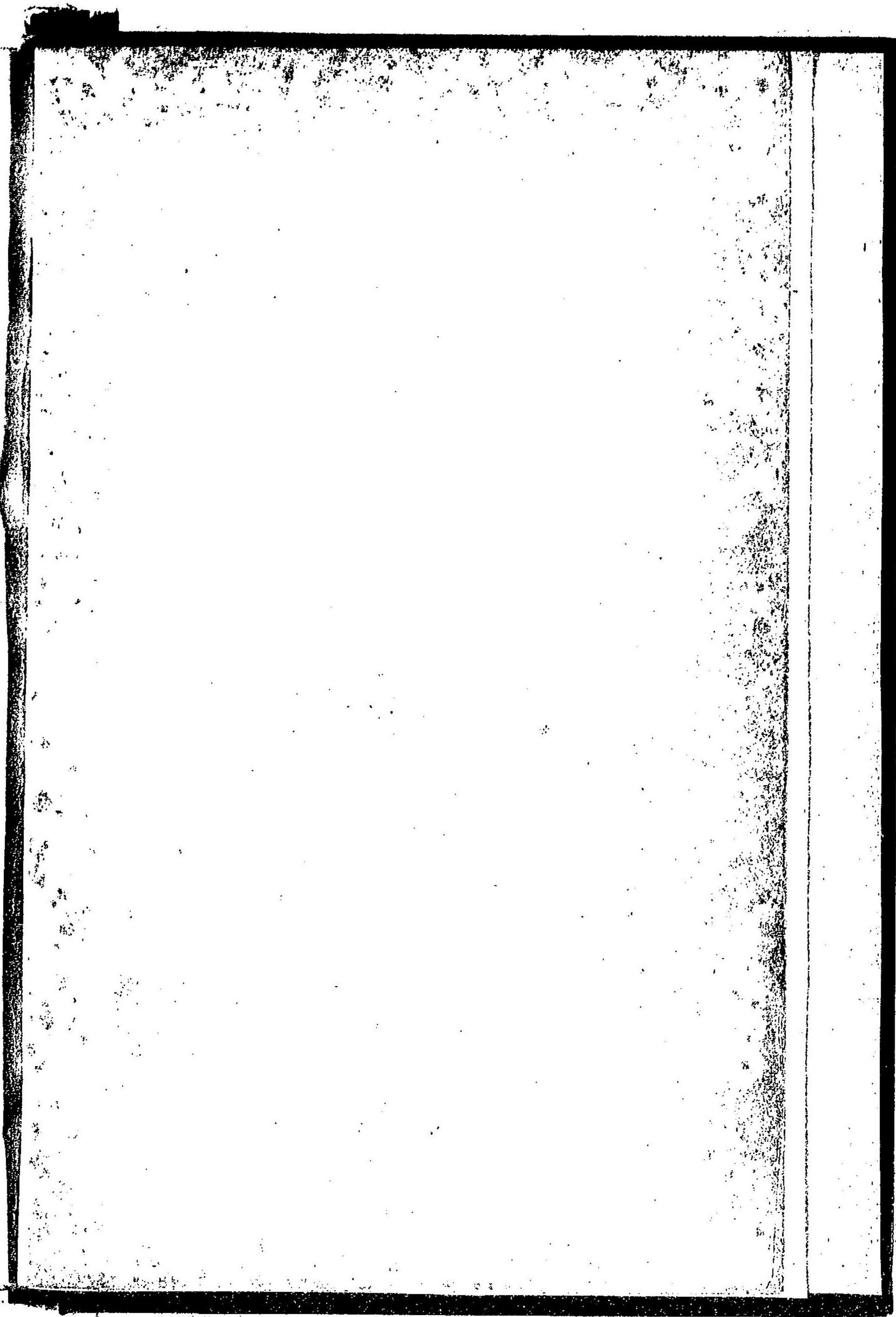


宋
學子
概
論





斯篇所論雖有未精處其於
濠洛一泓討源究委脈絡分明
瞭如指掌學問深敏雜中能者
此著其立志之篤而用功之勤可
以想見也

甲午晚夏

島田重禮委評

宋學概論序

哲學者。思想之學也。思想發達乎。哲學必興。思想衰退乎。哲學必廢。哲學之興廢。可以卜國民思想之如何也。考之支那史。哲學興者。前後二回。當周之末。百家之學。鬱然競起。與希臘之文化。東西頡頏。而有孔孟卓出其間。立言正大。行道端嚴。始開東洋幾千歲之道統。是第一回也。自漢至唐。哲學萎微不振。降至趙宋。周濂溪著太極圖說。鑿天人之秘。哲學於是乎復興。張橫渠及二程子紹往聖啓來哲。斯道粲然復明于世。朱子出于其後。學問淹博。總合先輩所說。而成一家之學。猶商羯羅阿闍梨於印度。是第二回也。我邦近來哲學勃興。將取各種思想。集而成大焉。實可悅之徵也。然而好新厭舊。浮動輕舉。流行之逐。取捨之誤。則邦人之通弊。可不矯乎。西洋哲學。雖則英之蘇邊薩獨之哈特曼。無人不耳之。如東洋古書。捨而不顧。或至用以爲貼壁之紙。甚哉漢學之衰也。讀孔孟之書者。則尙或

有之。至修宋學者。則寥寥如曉天之星。然以余觀之。宋學亦一種之哲學也。雖時有不合于真理者。而又非無所西人未道破。苟有志于哲學者。豈不講窮焉而可乎哉。屬者小柳司氣太君著宋學概論。以示于余。余讀之。凡關哲學者。蒐獵綜叙。簡而得要。備而不煩。歷々可以徵宋代思想之發達也。及印刷成。書所思于卷端。以爲序。

明治甲午之夏竹醉日巽軒井上哲撰

自序

余修儒學數年之頃耳。學識謏陋。何敢厚顏著書。以汚大方之觀哉。宜勵精以期他日之大成也。雖然。又竊思大凡氣運之變。非一朝而然。其來必有因焉。天將雨。必先雲於學術之變遷。亦猶如是。古我先王採禹域之學術。以潤色國家之教化。堯舜之道。洙泗之統。在日東精華之邦。燦然具備。管江之兩家。以宿儒任獻替之職。赫々功勳。長照汗青。當斯時。雖有儒教。未有儒學者也。其後至德川氏。以不世出之睿知。知馬上不可治天下。於是金革未熄。注心墳籍。林道春受業於藤惺窩。以參帷幄。一代之大典。茲定焉。洛閩之學術。茲起焉。豈啻我朝之叔孫通而已哉。其後中江氏之於姚江。伊藤氏父子之於古學。物氏之於古文辭。雖醇駁互出。優劣不均。學識超卓。震耀後世。若夫至白石之經濟。與山陽之文章。亦一代之傑也。三百年之間。扶植綱紀。人以勇健。國以富強。當斯時。雖有儒學。未有儒教。

哲學者也明治中興百度更革規倣歐米法律制度以至文學宗教滔然雜入使我國人左顧右視不暇採擇其喜新奇好雄誕者以東洋之學爲無可觀者以東洋之教爲無可聽者一唱百和邪說暴行荼毒天下甚於洪水猛然矣動輒曰儒學者空疎之學也夫空疎者果何謂乎謂其迂濶于事情乎然儒教之所論修身齊家措之於日用彙倫之間余未能見其柄鑿也稱夫迂濶于事情者亦日用而不識之者也或曰支那之文明一進而長止其國勢日萎靡其文物月凋衰然證之史乘漢唐之於陶虞其文明之進步在數等之上而明清之於漢唐亦在數等之上雖時非無消長否泰其進步豈可容疑乎且亦宇內畫域者頗多而保存其國體能亘數千年之久者實有我國與支那耳夫今之希臘羅馬非古之希臘羅馬今之埃及印度非古之埃及印度然而今之支那則四千年前之支那而雖以忽必烈之英略愛親覺羅氏之雄圖一入于彼土則亦不能不從其

故俗其文明之根可謂深且遠矣凋衰萎靡之說余不知其可也或曰儒者之所教虛禮空文消耗元氣不尠少若如此言陳涉吳廣何由而得攘臂於大澤乎且試觀德川時代之青衿雖有蠱暴誇大之弊比之近日之輕薄學徒其優劣果如何耶由是觀之儒學非空疎之學也支那之文明非萎靡凋衰也儒者之所教非消耗元氣者也雖然支那之學術招此譏者蓋亦有故也譬之斯學猶亂麻忍耐治之者始得正其緒其研究之艱易與泰西之學術不可全日而語也世人之詆譏無忌憚者猶在門牆之外論宮室之醜美歟是以今之有志者就支那學術之中取類于近世之所謂哲學者而假其名蓋欲倣泰西學術之分類以資世人之研究也於是儒學再變而儒教哲學之名始起焉然則謂之儒教謂之儒學將謂之儒教哲學唯由其時勢之變遷而異其稱呼耳至其所基依然不出堯舜之道洙泗之統也頃日余繙宋代諸儒之書多會意者即沿流溯源敘述

自序

六

其大旨雖略而未詳庶幾使亂麻得正其緒以知儒教哲學之美於世歟
嗚呼余悲托空名于文筆徒向世人而說儒教哲學之名也頗切儒豈好
用哲學之稱哉抑亦不得止也何日得明堯舜之道以復洙泗之統乎夫
紛々群言於斯學何有序以述梗概云

明治廿七年六月下浣

柳々子 小柳司氣太識

凡例

第一此の書宋學概論の名ありと雖も朱子に關せしこと多き所以はその宋學の大成
者たるを以ての故なり朱子を知るは則ち宋學を知る所以なり

第二陸象山派は宋學中の一派をなす者なる故之を別論せざるべからず本書はたゞ
朱子と關係の點のみを論述す

第三世の宋學を稱する者皆周濂溪を以て其起點となす然るに本書之に先だつに邵
康節を以てしたるは序述の便によりたる者にして別に深意あるにあらず宋元
學案も亦是の如し

第四本書引用の文大抵その出處を明示す其他主として參考せし所の者宋元學案黃
黎洲著朱子年譜(王懋竑纂訂)宋史等なり

第五文公肖像及び塋墓の兩圖は朱子年譜(葉公回等版)によりて之を縮刷す

宋學概論目次

太師徽國文公真像

島田博士批評

井上博士序

自序

凡例

第一章

儒學とは何ぞや……………一

第二章

儒教學風の變更……………五

第三章

宋代儒學の特質……………一二

目次……………一

目次

第四章

宋代儒學の先驅……………

一八

第五章

邵康節……………

二二

第六章

周濂溪……………

三一

第七章

張橫渠……………

四一

第八章

程明道……………

四六

第九章

程伊川……………

五三

第十章

兩程子と朱子との過渡……………

五八

第十一章

朱子の傳……………

六二

第十二章

朱子の純正哲學……………

七五

第十三章

朱子の自然哲學……………

八一

第十四章

朱子の心理學及び倫理學(附政治論)……………

八六

第十五章

朱子の宗教論……………

九八

第十六章

朱子の學術研究法教育法及び諸經書に對する意見の概略(附釋老)……………

一〇二

第十七章

朱子と陸象山陳同甫及び呂東萊……………

一一二

目次

三

山

目次

第十八章

四

宋代儒學の批評……………

一二六

第十九章

朱子没後の宋學の景況……………

一三一

文公塋墓形勢圖……………

附 録

宋學の源因……………

一

清朝の學術……………

二五

清國現今の思想界……………

四三

東西思想の融和……………

八八

第二版自跋……………

宋 學 概 論

小柳 司 氣 太 著

第一章 儒教とは何ぞや

希臘の「アリストートル」は倫理學をして政治學の一部に屬せしめし如く亦印度の「マ
 ヌ」法典が宗教的臭味を帯びし如く古代は洋の東西を問はず分業の法未だ行はれざ
 るを以て諸學科の間精密なる區別生せず政治、宗教、道德の如きも盡く皆一範圍の中
 に混一せられたる者なり今日の儒教と稱する者も亦是れ支那古代の政治修身の方
 法を基礎として組織せられたる者にして最初より必ずしも學術として見らるべき
 儒教なる者あらざるなり書經、詩、書、禮、易、春秋、論語、孟子、荀子、韓非子、呂氏春秋、
 不遷、汝作司徒、敬敷五教在寬、周禮に曰く儒以六藝教人、是に由りて之を觀れば當時の
 儒教は教育と云ふ如き者にして儒者とは其事務を施行する所の官吏なり孟子は更
 に其起源を詳説して曰く當堯之時、天下猶未平、洪水橫流、汜濫於天下、草木暢茂、禽獸繁
 殖、五穀不登、禽獸逼人、獸蹄鳥跡之道、交於中國、堯獨憂之、舉舜而敷治焉、舜使益掌火、益烈

第一章 儒教とは何ぞや

山澤而焚之、禽獸逃匿、禹疏九河、滄濟深淪、而注諸海、決汝漢、排淮泗、而注之江、然後中國可得而食也、當是時也、禹八年於外、三過其門而不入、雖欲耕得乎、后稷教民稼穡、樹藝五穀、五穀熟而民人育、人之有道也、飽食煖衣、逸居而無教、則近於禽獸、聖人有憂之、使契爲司徒、教以人倫、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信、放勳曰、勞之來之、匡之直之、輔之翼之、使自得之、又從振德之、聖人之愛民如此、而暇耕乎、滕文公章句上、然らば則ち儒教と稱する者は是れ天下を治め一身を修むるの道を名づけたる者にして、堯舜之を創作し、禹湯文武周公之を承け以て孔子に至りたる者なり、是故に孔子も其相傳の修身治國の道を當時に實行して其民人社稷を安んせんと欲し、周遊以て七十君を干せしと雖も其言容れられざるに因り止むことを得ず、退て弟子と共に先王の古典遺文を刪述して之を後世に傳ふるに至れり、儒教の實行社會より分離して漸く抽象的に入りしは實に是時に始る是を以て中庸に孔子を贊して祖述堯舜、憲章文武と云ひ後人亦孔子を呼ぶに素王の名を以てす蓋し其徳ありと雖も其位を得ざるを云ふなり是れより後、政治と修身と二途に出で學術實行兩つながら相分れて儒教は益々純粹なる學術となり社會の實務と選庭を生ずるに至れり

是故に儒者の本色は寧ろ實際の社會に立ちて實務を處置する所の政事家と云ふべき者にして彼の閑窓に坐して天地の玄理を究め人生を達觀するの哲學者にあらずるなりされば儒者と現象社會との關係密接せるときは其議論觀察も多く實行的なりと雖も之に反して若其關係遠きときは甚だ抽象的の傾向を有す、論語の如きは曰く子罕言利與命與仁、(子罕)又曰く夫子文章可得而聞也、夫子之言性與天道不可得而聞也、(公冶長)又曰く性相近也、習相遠也、(陽貨)と季路鬼神の事を問へば則ち曰く未能事人、焉能事鬼、死生の理を問へば則ち曰く未知生、焉知死、(先進)然るに子思に至りては世運益々非にして其道行はれず是れを以て中庸の如きは性、道、教の三項によりて人性及び鬼神に論及し更に孟子に至りては或は性善を説き或は養氣を論じ盡心の章に於て盡其心者知其性也、知其性則知天矣、存其心、養其性、所以事天也、殞壽不貳、修身以俟之、所以立命盡心也、(萬章)の章に於ては桃應と人生稀れに遭遇すべき倫理の問題につきて強辨を試む之を孔門に比すれば頗る迂遠に涉りて亦、日常茶飯の事にあらず漢に至りて董仲舒天人の辨あり隋に至りて文中子の中説あり既に唐を経て宋に至れば其研究する所宇宙の廣大にあらずんは人心の精微にして實行的の儒教全く變じて

第一章 儒教とは何ぞや

四

學理研究となれり而して政治社會を顧みれば堯舜文武の道復行ふべくもあらざるなり是故に今日に至りても儒者に問ふに儒教は哲學なるかを以てすべし思ふに彼れ首肯せざるべし又問ふに宗教なるかを以てすべし彼れ愈之を拒むならん然らば何なるかと問はば必ず答へん儒は治國平天下の術を明らかにし修身齊家の道を講ずる者なり空理を争ふて實行を怠り卑近を棄て、高遠に馳するが如きは我徒にあらずと余故に問へらく儒者の本色は政事家にして哲學者にあらずと然りと雖も今日の儒教は既に昔日の儒教にあらずして純然たる學術的思辨を要すべき者なれば之を修むる人の如きも亦昔日の儒者と自から異ならざるを得ず充分なる分解力と總合力とを以て其空理と名づけ高遠と稱せらるゝ點をも之を推論辨明して以て儒教の發達と組織とを明らかにして其價値の如何を示めざるべからず

第二章 儒教學風の變更

儒教學風の變更を序述するに先だちて少しく支那の文明全般に關して評論を試みざるべからず何となれば兩者の間密接なる關係を有すればなり

机上地圖を披いて支那の文明を案するに其所と時とに關して三大變遷あるを見るべし其所の三大變遷とは何ぞや

第一文明の起源にして禹貢時代の青州冀州雍州兗州地方即ち今日の山東直隸山西陝西甘肅等の諸省を含む者なり之を北部と云ふ

第二黄河と揚子江との中間禹貢時代の徐州豫州梁州等にして今日の江蘇安徽河南湖北四川地方なり之を中部と稱す

第三禹貢時代は猶風氣未開なる土地にして古の吳越地方即ち揚子江以南一帶是れなり之を南部と稱す

支那の文明は此の地理的順序によりて北部より南方に普及したる者なり次に其時の三大變遷とは何ぞや

第一開國より春秋時代までにして北部の地方之に關す

第二章 儒教學風の變更

五

第二春秋時代より趙宋までにして中部の地方之に關す
第三趙宋より今日までにして南部の地方之に屬す

而して支那の學術も亦是の三大變遷と相應して其發達をなす儒教は第一の北部文明の產出物にして老莊及び釋氏の教理は第二の中部文明の花なり而して第三の南部地方の文明に至りて以上の三教互に統一融會せられて各自一箇の哲理を構成したるの時と云ふべし何となれば儒教の根本は堯舜三代の政治修身の道にして其來ること最も悠遠なり而して堯舜三代の地は皆支那の北部なり然るに周の中世春秋時代より中部の文明燦然として其光を放ち北部と相競ふに至れり其代表者として觀るべき者は楚國にして老子茲土に起りて儒教の外更に一哲學を開創し屈原宋玉等輩出して後世文學の標準と仰がれ政事上にも名君勇將ありて齊桓晉文の如きも天子の威を挾みて之に臨みしも其意を得ざることあり而して漢に至りて佛敎新入六朝隋唐の間其盛を極め道教も亦一たび魏晉に盛に二たび唐代に重視せらる緇五行の説も亦端を戰國の末に發して董仲舒劉向の徒之を前漢に信じ光武鄭玄等之を後漢に尊めり趙宋起りて南部の文明茲に始まり儒教學者中伊洛關閩の徒勃興

して從來の儒學を一變し之に加ふるに老佛の玄理を以てして一の哲學的組織を形成せり之を要するに第一文明の學術は實際的にして第二文明の學術は抽象的なり此の兩者を兼ねたる者は則ち第三文明の學術たり斯學術の變遷と共に政治上より觀察するも亦三大變遷を得其北部文明の終りは秦にして封建制度一變して郡縣となれるの時なり中部文明の終りは胡人始めて漢人を壓倒して支那全土を合一し元と稱する時代を造りしの時なり更に南部に至りては武陵桃源の夢覺めて五洲と交通を開らき香港上海百貨幅輳して帆船林立亦た昔日の觀にあらざるなり今更に一步を進めて儒敎の一派につきて之を考ふるに前述の時と所とに於ける變遷に應じて亦三轉あるを見る

第一創始時代是時に於て儒敎は政事との關係甚だ親密なるを以て未だ學術として成立せず僅かに孔子に至りて易詩書禮春秋を刪述し之を其門人に傳ふ

第二訓誥時代孔子既に歿して七十子の徒四方に散じ各其受けし所の者を其門人に授けて一經相傳をなしたり此の時代の學者の爲せし所は一字一句と雖も必ず古傳を重んじて其注釋の誤らざらんとを欲するなり漢唐の學者皆此の風なるを以て之

を漢學的研究法と稱す易に於ては田何施讐孟喜梁丘賀京房費直等の諸學者あり書經に於ては濟南の伏勝今文尙書を傳へ魯の恭王古文尙書を獲歐陽生大夏侯勝小夏侯建等の諸學者あり詩に於ては魯の申培齊の轅固生燕の韓嬰趙の毛萇あり禮に於ては魯の高堂生儀禮を傳へ戴德は^大戴禮戴聖は小戴禮禮記を編修し亦河間の獻王周禮を得たり春秋に於ては公羊穀梁左氏の三傳あり其他齊の胡毋生趙の董仲舒亦之に精通す後漢の鄭玄に至りて群經に汎濫して諸説を網羅す魏晉に至りて易を解するの王弼あり論語を註するの何晏あり左傳を釋するの杜預あり既にして司馬氏衰へ南北兩朝分立するに及び南朝は魏晉の後を承けて文學に秀で北朝は鄭玄盧植等の餘風に感染せられて經學流行し徐遵明劉炫劉焯の如き其自眉たり諸經の注釋と雖も南北の嗜好同からず南朝には王弼の周易孔安國の古文尙書杜預の左傳等行なはれ北朝には鄭玄の周易服虔の左傳を用ふ唯毛詩及び三禮に至ては南北共に鄭玄の註を奉ずと云ふ隋の文帝天下を一統し文中子の徒出でたりと雖も煬帝の荒淫遂に國祚を短ふし李唐其脈を承けて海内漸く安寧高祖太宗釋奠の禮を行ひて以て文學獎勵の端緒を開き且國子監を設け博士を置き以て天下の人材を教育す諸經の

註釋多くして教授に便ならざるを以て孔^動穎達顏師古司馬才章等に命し諸註の正しき者を撰拔し之を名づけて五經正義或は九經正義とも云ふとなし之を官學に立つ實に太宗貞觀十四年なり正義の取りし所の者は詩に於て毛萇鄭玄書に於て孔安國易に於て王弼三禮に於て鄭玄等にして蓋し南北兩學派を折衷したるものなり是に於て學者正義による者は世に用ひらるゝと雖も然らざる者は排斥せらるゝを以て皆古註を墨守して敢て新説を立つる者少なし且官吏の登用試験中詩文を加ひたるを以て經義の學術大に衰ふるに至れり

第三理學時代漢唐の繁瑣なる學術に反動して起りし者にして其説は儒教を文字の訓詁に求めずして直ちに其精神上より之を得んと欲し専ら義理を講ずるにあり宋の周邵之を開らししを以て是を宋學的研究法と稱す

是故に儒教は三時代を経て二種の研究法を得たり而して是の二種各々一得一失あり漢學的研究法は着實にして古義を失なふこと少なしと雖も其弊や固陋に流れ繁瑣に陥る宋學的研究法は儒教の眞理を胸中に融會して直ちに之を了得すると其利なれとも動もすれば空論妄駁に失して何の得る所なきに至る是故に儒教を研究し

第二章 儒教學風の變更

十

て其完全ならんことを望まば是の兩法を兼用せざるべからず然れども今儒教に對して哲學的思辨を爲さんとすれば漢學的研究法を棄て、寧ろ宋學的研究法によるを要す是れ前者は純粹なる文學として重んずべき點多しと雖も哲學の如き義理を研究するの學に至りては宋學によること可なるが故なり

宋以後王陽明の學派起りて程朱に反抗したりと雖も是れ當さに宋學派に屬すべき者なり而して近來清代の考證學は亦漢學の一派にして宋學の義理研究に反對して起りし者なり是故に考證家の大家戴東原は曰く經以載道所以明道者辭也所以成辭者字也學者當由字以通其辭由辭以通其道某自十七才時有志聞道謂非求之六經孔孟不得非從事於字義制度名物無由以通其語言爲之數十年灼然知古今治亂之源在是宋儒譏訓詁之學而輕語言文字是猶度江河而棄舟楫也與段玉裁書是の反動は恰も西洋に於て「カント」以後「ヒフテ」「ヘルバルト」「ヘーゲル」等輩出して互に研究論難したりと雖も確乎たる結果に到達すること能はず更に首を回らして「カント」哲學を考察し知識論に注意したると一般の狀況なるべきか
本章の論を明らかたせんがために左の表を作る

支那文明

南部	中部	北部	所	時	一般學術	儒教
五自 今趙 代宋	至自 趙春 宋秋	至自 春開 秋國			三教混合	理學(宋學)
					道家釋氏	訓詁(漢學)
					備	創始

第三章 宋代儒學の特質

然らば則ち儒教は宋に至りて一大變遷をなしたりと云ふべし其實際社會より離れて純然たる抽象的思辨を用ひしは是時なり其單に日用切實の學たるに止らず天地の本體鬼神幽冥の玄理人性の秘奧に論及せしも是時なり道統の名目起りて其歴史的發展を明らかにしたるも亦是時なり以下少こしく宋代儒學の特質を述べん

宋代の儒學に於て吾人の注目すべき者三あり第一儒教中に於て哲學的思想を生ぜしこと第二儒教中に於て種々なる學說起りしこと第三政治社會と學術世界との上に紛争並び行はれしこと是れなり

第一儒教中に於て哲學的思想新興せしこと前章既に之を述べたり

第二漢唐時代に於て訓詁諸家の生ぜし如く宋代の儒學者は其義理上につきて一致せざることあれば互に辨難攻撃を試む宋陸の争の如き其著名なる者なり

第三宋代に於ては政治上の權力を假りて以て學術上の反對派に復讐せんと欲すること行はる恰かも明の臺閣と東林派との紛争の如し然れども明の時は猶正邪賢不肖の間に起りたるの傾向ありしと雖も宋は然らず賢人君子の間にすら反目疾視す

るに至る洛黨川黨朔黨の如き是れなり洛黨は程頤之を率ゐて朱光庭賈易等其羽翼となり川黨は蘇軾を以て其領袖となして呂陶等此に附隨し朔黨は劉摯王巖叟劉安世等の統轄する所たり之を始めにしては元祐之を終りにしては慶元互に其反對黨と朝野に相攻撃せりかゝる兆候は最初より存せし者と見へ歐陽修は朋黨論を述べて之を諷し以て君子の眞朋と小人の僞朋とを明らかにせり然るに歐陽公は狄青を攻め唐介は文彦博を駁撃し程頤と蘇軾とは相争ふ是等の人々は皆當世の賢人君子を以て目せられたる者にあらずや新法問題の如きは政治上の争なりと雖も一方より之を見るときは亦學術の相違より起りし者なり何となれば王安石が其新經義及び周官より得たる新智識を實施せんと欲したるに由ればなり古人宋代黨禍の盛なるを評して是れ全く宋人の公明正直を貴ぶこと其度に過ぎ自ら守ること甚だ堅く敢て少しも人に寛假せざるか故なりと夫れ或は然らん

何故に宋代に於て同一の儒教中異説を生じて紛々たること是の如きに至りしか吾人の觀る所に由れば其原因二あり宋代の衰運及び佛教の勢力是れなり

第一宋代の衰運余熟らく支那に於ける哲學文學の興廢を察するに常に其國家の

隆替と相前後するを知る儒教を集大成せし孔子の時代は周道既に衰へて亂臣賊子其類を繼ぎし時にあらずや老莊申韓其他諸子百家の鬱然として起りしは是れ諸侯攻代して列國呑噬の時にあらずや楊雄の大玄法言向劉父子の校書は外戚權を擅にして卯金刀の光芒將に隠れんとするの時にあらずや五胡八王之亂南北割據の時に當りて先には建安の七子ありて其英華を吐き後には潘陸陶謝徐瘦の徒ありて其奇麗を極む唐業中葉にして衰運に傾くの時に當りて李杜跡を尋ぎて蹶起し或は大雅の久しく絶へたるを嘆じ或は花に向つて憂國の涙を濺ぐ宋代に於ても亦然り邵雍天津橋上に徜徉して杜鵑の聲を聴きしより以來内治外交共に紊亂して國家の危殆積漸の上に坐するか如し然るに純理研究の旺盛なること前古宋に比する者なし朱子曰く商鞅論人不可多學爲士人廢了耕戰此無道之言然以今觀之士人千人萬人不知理會甚底事其所謂遊手語類一百八千人萬人の語その如何に哲學の流行するかを問したり時偶まゝ春なりしかは雍勸むるに天門街の賞花を以てす伊川辭して曰く平生より竹つて賞花の爲めに貴重なる光陰を費せしことなし雍曰く吾儕の花を

觀る自ら常人と異なり吾儕は是によりて以て造化の妙を探らんと欲す賞花何ぞ不可ならんやと伊川之に従ふ(易學辨惑)されば太宰純が聖學問答に周濂溪を嘲けり彼は蓮花を愛する時だに理窟を附して之を爲せりと云ひし如く實に一草一花の微物と雖も精神的に之を觀察し其疑はしき點あるときは互に質疑問答を極めて止む針頭に於て幾何の天使が立ち得べきかの問題がスコラステック哲學の流行時代に於て議論せられたる如く當時鴻儒群弟子の學術觀察専ら空漠たる抽象的の者なれば其異説を生じたるも亦怪しむに足らざるべし然らは何故に國家衰滅の傾向あるときは文學哲學の流行を生ずるか蓋し有道廉潔の士人其言其計盡く世に容れられず其聞見する所往々自家胸中の悲惨を増さるるなし是故に優美沈痛なる文學高尚幽玄なる哲學によりて其滿腔の不平を發洩し以て自ら慰めんと欲するに由るなるべし亦一方に於ては學術偏盛の弊元氣の萎靡を致して遂に衰運を惹起する事もあるべし之を他に徴するに「ソクラテス」「プラトーン」「アリストートル」等の出でしは希臘人の道徳元氣既に腐敗し來りたるの時なり又我國平安朝文學の最盛は將に大權武門に移らんとするの時なり余故に謂もへらく宋朝の衰運は其哲學的思想を盛ならし

めたりと

第二佛教の勢力、佛教の公然支那に入りたるは後漢の明帝蔡暗等をして西域より佛教四十二章經及び釋迦の像、沙門迦葉摩騰、竺法蘭を求めしめて白馬寺を立てしにありその後益盛大に赴ひき漢魏兩晉の際、曇柯迦羅、道安、慧遠、鳩摩羅什等輩出し或は戒律を立て或は佛經を翻譯し南北朝の間干戈倥偬の時と雖も愈其勢力を振るひ小乘にありては毗曇、成實、大乘にありては三論、涅槃、實行を旨とするの地論、觀想を基とするの禪宗、他力によりて成佛を求むるの淨土宗、跡を尋ぎて興起し更に隋唐に至りて眞諦、智者、玄奘、不空等出で、天台、華嚴、法相、眞宗（天台宗）を開らく然れども當時俗人にして佛教を信する者は多く因果應報の說に止まり門外の學者の研究も亦深く其說を極めざるなり韓退之の原道及び諫佛骨表を讀まばその如何に佛教を觀るの淺薄なるかを知るに足るべし然るに宋代の學者は之に反して佛教を學術として研究し更に儒教に復歸したる者なるを以て知らずく之に感染せられ其和合すべき者は和合し其撞着すべき者は撞着して各々一旗幟を學海に際つるに至れり

以上の二源因は是れ歴史的事實にして此に加ふるに人間思想發達の順序即ち粗大

より緻密に赴き卑近より高尚に入るの心理的作用亦宋代學術の勃興に與かりて大なる力ありたること疑を容るべからざる者なり

第四章 宋代儒學の先驅

山雨欲來風滿樓とかや宋代學術の勃興異説の紛争も亦是れ漸を以て成れる者にして一朝一夕に始まるに非ざるなり唐の中世に當り陸淳、啖助、趙匡と共に三傳を駁してより漢儒相傳の經義始めて批評家の筆頭に上り韓退之起りて佛法を駁撃し儒佛の争端茲に萌し柳子厚出で、封建論を述べて史學上の面目を一新したり趙宋に至り泰山の孫明復及び安定の胡瑗並び立ちて一代學術の源泉を發掘す就中孫明復の春秋尊王發微十二篇は後を陸淳に尋ぎて大に新義を發す是を以て楊安國の輩之を駁撃すること大甚だし明復春秋を總論して曰く孔子之作春秋也、以天下無王而作也、非爲隱公而作也、然則春秋之始于隱公者非他、以平王之所終也(發微二)又儒學者の空く漢唐訓詁の弊竇に陥りて義理研究を知らざるを慨嘆して曰く國家踵隋唐之制、專以詞賦取人、故天下之士皆致力於聲病對偶之間、探索聖賢之闕奧者百無一二、而非挺然特出不徇世俗之士、孰克舍彼而取此(與范天章書)又儒學者の舊註を墨守して新見を立てざるを譏り、曰く專守王弼、韓康伯之說、而求于大易、吾未見其能盡于大易也、專守左氏公羊、穀梁、杜衍、何范氏之說、而求于春秋、吾未見其能盡于春秋也、專守毛萇、鄭康成之說、而

求于詩、吾未見其能盡于詩也、專守孔氏之說、而求于書、吾未見其能盡于書也、(同上)是れ實に新經學勃興の導火線にして其勢、ルーテルが一千五百十七年九十五ヶ條の辨難を以て當時の羅馬法皇を攻撃し其敎の腐敗を痛嘆せしに似たりと謂ふべし尋ぎて歐陽修あり韓吏部の後を承けて本論を作り以て佛法に抗敵し亦易の繫辭は孔子の作にあらざるを主張す其説の要略に曰く河圖洛書を以て易の基礎なりとせば易は天作なり又伏羲の天文地理を俯察して以て之を作りし者となせば易は人造なり又著によりて生じたる者となせば天作にもあらず將た人造にもあらざるなり同一の易にして是の三説の相異あり豈叢脞殺亂にあらずやと之を童子問に述べて曰く繫辭非聖人之作乎、曰何獨繫辭焉、文言說卦而下皆非聖人之作、而衆說淆亂亦非一人之言也(歐陽文忠公全集卷七十八)更に之を或問に辨すらく文言中の元者善之長、亨者嘉之會、利者義之和、貞者事之幹なる語は左傳襄公九年にありて穆姜の言なり後十有五年にして孔子生れたることなれば孔子の言にあらざること明らかなり且子曰の二字あれば孔子の自作にあらざること知るべし云々(全集卷十八)又蘇老泉あり柳子厚の後を襲ひ其炬の如き眼光を以て歴史の考究を試み易は聖人

人民をして其道を尊ばしめんが爲めに設けたる者なり禮は聖人其權を以て民心を統一せんが爲めに制したる者なりと稍く進化の理法によりて社會の發達することを論辨せり

又司馬溫公あり孟子の説に疑を挟み疑孟を著はして其告子と論性の一段及び其虛病を以て齊王に見へざることその他數十條を論難し且潛虛と稱する書を著はす其言頗ふる老氏に類す曰く萬物皆祖于虛生于氣氣以成體體以受性性以辨名名以立行行以俟命云々

又蘇轍ありて老と儒とを合一せんと欲す其老子辨に曰く孔子以仁義禮樂治天下老子絶而棄之或者以爲不同易曰形而上者謂之道形而下者謂之器孔子之慮後世也深故示人以器而晦其道使中人以下守其器不爲道之所眩以不失爲君子而中人自是上達也老子則不然志于明道而急于開人心故示人以道而薄于器以爲學者惟器之知則道隱矣故絶仁義禮樂以明道天道不可言可言者皆其似者也達者因似以緘其真而昧者執似以陷于僞(中略)二聖人者皆不得已也全于此必略于彼矣

又王安石あり周官新義及び三經新義を著はし之を學官に立て天下の士を試みた

其他齊魯には士建中劉顔ありて泰山を輔け浙西には吳存仁ありて安定に應じ章望之黃晦は閩中に起り楊適杜順は浙東に出づ横渠の先驅となりし者は關中の申顔候可にして范正獻公の爲めに道を開きしは宇文止なり

然れとも之を要するに此の時代は懷疑と批評との潮流相奔りて構成的學風を生せず其論争する所も多く六經につきて云々せし者にして性命の源頭に論及せし者寥々として少なし然るに今や此の構造的學風を生じ性命の源頭に論及するの時は來れり儒教が一大變革を爲すの時は來れり支那哲學史中沒すべからざる偉人忘るべからざる卓説油然として起り四千年間の文明に一大裝飾を加ふるの時は來れり此の大革新の率先者は誰ぞ曰く邵康節曰く周濂溪之に次きて其學術を擴張したる者は誰ぞ張橫渠程明道程伊川之を大成したる者は誰ぞ朱晦庵其人なり以下將に彼等の哲學を講述せんと欲す

第五章 邵康節

邵雍(真宗大中祥符四年生神宗熙寧十年孟秋卒海六十七)字是堯夫康節先生と稱す學を李挺之に受く而して挺之の學は陳搏種放穆修相傳の易理にして其源流最も遠しと云ふ始め邵雍母を亡ひて蘇門山百源の上に閉居し布衣蔬食奉養を父に盡くせしときに當り李挺之來り訪ふて曰く徒らに古人の遺書によりて道を求むべからず須らく之を物理の上に乗むべしと他日又語りて曰く物理の學も其學たること疑なし然れども更に性命の學なる者あり須らく之を攻究すべしと雍再拜して其門に入らんことを請ふ挺之先づ授くるに陸淳の春秋を以てし終に易學を授く雍これによりて以て刻苦勵精遂に先天の數理を發明して古往今來を推歩し皇極經世書十二篇を著はして天地の消長萬物の變遷を説明す

康節は數理を以て天地を觀察したること猶易の如し思へらく十二辰一日をなし三十日一月をなし十二月一年をなし三十年一世をなし十二世一運をなし三十運一會をなし十二會一元をなす是故に一元は十二萬九千六百年なり天地は斯一元によりて一變遷をなすこと猶佛家の劫に於けるが如し萬物は是の時間的順序により加一

倍法に従つて發達す加一倍法とは何ぞや易の所謂太極生兩儀兩儀生四象四象生八卦の類を云ふ以上康節哲學の大要なり此の先天の數理を應用したる者は則ち皇極經世書なり其一篇より三篇までは天地人を論じ四篇より十篇までは天人の關係を辨じ以下十二篇までは動植飛走の事に係る

天地は二種の活動力に由りて發達したる者なり即ち動によりて天を生じ靜によりて地を成す動變じて陰陽となり滯變じて剛柔となる天の體なる日月星辰は陰陽により地の體なる水火土石は剛柔による、日月星辰あるを以て寒暑晝夜の變天に生じ水火土石あるを以て雨風露雷の化地に起る、暑寒晝夜は事物の性情形體を感し雨風露雷は事物の走飛草木に應ず、性情形體と走飛草木と相合して以て動植の感應をなす蓋し性情形體は天に基づき、飛走草木は地に本づく、動物は天にして植物は地なり天地感應して萬理茲に生ず、何となれば走飛草木は暑寒晝夜に感じて其性情形體を變じ性情形體は雨風露雷に應じて其走飛草木を化す如此にして性情形體の走飛草木は色聲氣味に適し走飛草木の性情形體は耳目口鼻に適す今物には色聲氣味あり人には耳目口鼻あり是を以て人は萬物を總轄して以て其靈となることを得るなり

人之所以能靈千萬物者、謂其目能收萬物之色、耳能收萬物之聲、鼻能收萬物之氣、口能收萬物之味、辨色氣味者萬物之體也、耳目口鼻者人之用也、體無定用、惟變是用、用無定體、惟化是體、體用交而人物之道于是乎備矣、(觀物內篇一)人の萬物の靈たること此の如し然れども人も物も亦天地も皆一體より分出したる者なるを以て分離すべからざる者なり其差違ある所は人能く萬物を兼ねると雖も萬物の各個人を兼ねること能はざるなり而して人の最も傑出したるを聖と云ふ聖の聖たる所以は其能く人を兼ねるを以てなり曰く然則人亦物也、聖亦人也、有一物之物、有百物之物、有千物之物、有萬物之物、有億物之物、有兆物之物、生一々之物、當兆物之物者豈非人乎、有一人之人、有十人之人、有百人之人、有千人之人、有萬人之人、有億人之人、有兆人之人、生一々之人、當兆人之人者豈非聖乎、是知人也、物之至者也、聖也、者人之至者也、(同上)聖人既に人を兼ね然らば則ち其物を兼ねること論理上明白なることなり何となれば人既に物を兼ねればなり然れども聖人、人物の差は其性質にあらずして其數量にあるを以て數多の物合するときは人と均しく更に數多の人合するときは聖と同じ是故に物假令ひ微なりと雖も人と聖との間に生ずる比較に従つて其數を増すときは亦聖人と一體たることを

得、聖人の聖たる所以は是の數多の萬物(人をも含む)を自己の一身に含有して之を統一し以て彼等と同體となり彼我の間經界を畫せざるにあり自己と云ふ差別界の觀念を脱して萬物一體の平等界に入るにあり曰く夫鑑之所以能爲明者、謂其不隱萬物之形也、雖然鑑之能不隱萬物之形、未若水之能一萬物之形也、雖然水之能一萬物之形、又未若聖人之能一萬物之情也、聖人之所以能一萬物之情者、謂其聖人之能反觀也、所以之謂反觀者、不以我觀物也、不以我觀物者、以物觀物之謂也、既能以物觀物、又安有我於其間哉、是知我亦人也、人亦我也、我與人皆物也、(觀物內篇十二)莊周の天地一指也萬物一馬也と相似たりと謂ふべし以上康節が天地人の辨なり

昊天は陰陽を春夏秋冬の四府に寓して互に消長を爲し以て萬物を統へ聖人之に應じて禮樂を易書詩春秋の四書に托して互に汚隆により以て民を統ふ而して四府は四書と共に生長收藏を爲して生長收藏は意言象數、仁禮義智、性情形體、聖賢才術の屬性を有す之を先王の遺文に徴するに意言象數は易の理、仁禮義智は書の言、性情形體は詩の根、聖賢才術は春秋の事なり之を心と云ひ用と云ふ更に之を歴史上の事實に證するに易は皇帝王伯に由り書は虞夏商周に應じ詩は文武周公に關して春秋は秦

晉齊楚に係る之を體或は迹と稱す心迹體用相合すれば則ち聖人たるを得然れども此に注意すべきことあり康節が組織せる意見は同中異あり異中同あり異同甲乙相乘じて以て準下する者なり之を例するに水火土石の四大ありと雖も水にも亦四大を有し火にも亦四大を有するが如く其分離せられたる四大の各自にも亦四大ありて敢て究極する所なし是故に易書詩春秋は皇帝王伯に由ると雖も更に其各書につきて皇帝王伯に由る者あるなり皇帝王伯は聖人の時にして易書詩春秋は聖人の經たり時に消長あり之を否泰と云ひ經に因革あり之を損益と稱す聖人に至りて否泰と消長とを知る曰く否泰盡而體用分損益盡而心迹判體與用分心與迹判聖人之事業于是備矣觀物內篇五康節は是の否泰消長の理によりて先天の數を應用して唐堯甲辰の年より後周顯德六年己未に至たる迄の歴史を觀察し其國家の隆替興亡する所以は一定の理法ありて然らしむるを論ず曰く三皇春也五帝夏也三王秋也五伯冬也七國冬之餘例也漢王而不足晉伯而有餘三國伯之雄者也十六國伯之叢者也南五代伯之借乘者也北五代伯之傳舍也隋晉之子也唐漢之弟也隋季諸郡之伯江漢之餘波也唐季諸鎮之伯日月之餘光也後五代之伯日未出之星也觀物內篇十是れ豈ヘーゲル

が歴史哲學の意見と類似する者にあらずやヘーゲルは以爲へらく絶對的理想は亞細亞希臘羅馬日耳曼の順序により太古より近代に至りて次第に發達開展して遂に其完全に達する者なりと唯ヘーゲルの意は次第に盛運に向ふものとなし之に反して康節は益衰代の來ることを言ふのみにして其考察に至りては兩者略ぼ一致すと云ふと雖も不可なかるべし苟くも此理を以て推すときは千萬年と雖も猶一晝夜の如しショーペンハッセルの所謂時は繼續なりと云へる如く過去現在未來も其間一の畦界なく常に「今」今と推し移ること流水の晝夜を舍てざるに似たり曰く夫古今在天地之間猶旦暮也以今觀今則謂之今矣以後觀今則今亦謂之古矣以今觀古則謂之古矣以古自觀則古亦謂之今矣是故古亦未必爲古今亦未必爲今皆自我而觀之也安知千古之前萬古之後其不自我而觀之也觀物內篇五更に世界の治世少なくて亂世多きかを説明して曰く何故治世少而亂世多邪君子少而小人多邪曰豈不知陽一而陰二邪と蓋し康節の意は一定の理法ありて治亂興廢必ず此に依らざるべからず人力奈何ともすること能はざるとの意なり以上天人の關係を論じたる者にして以下二篇は動植飛走の事に關する者なりと雖も其必要少なきを以て之を略す

康節又漁樵問答を作りて哲學上の觀察を述べ又無名公傳を以て自己の生涯を寫す曰く夫無名者不可得而名也凡物有形則可器可器斯可名然則斯人無體乎曰有體有體而無迹者也斯人無用乎曰有用有用而無心者也夫有迹有心者斯可得而知也無心無迹者雖鬼神不可得而知不可得而名况於人乎故其詩曰思慮未起鬼神無知不由乎我更山乎誰能造萬物者天地也能造天地者太極也太極者其可得而名乎可得而知乎故強名之曰太極太極者其無名之謂乎故爲之贊曰借爾面貌假爾形體弄九餘暇是れ老子の道可道非常道名可名非常名無名天地之始有名萬物之母第一章及び視之不見名曰夷聽之不可名復歸於無物是謂無狀之狀無物之象是謂忽恍隨之不見其後迎之不見其首執古之道以御今之有能知古始是謂道紀第十四章の意に相合一すと云ふべし康節又詩を賦して以て其哲學を示めすこれ古來支那に於て多く有らざる所の者にして宋代の理學によりて生せられたる一新體なり其五六を左に摘録す

皇極經世一元吟

天地如蓋軫覆載何高極日月如磨蟻往來無休息上下之歲年其數難究測且以一元言其

理尙可識一十有二萬九千餘六百中間三千年迄今之陳迹治亂與興廢著見于方策吾能一貫之皆如身所歷

觀物詩

地以靜而方天以動而圓既正方圓形還明動植權靜久必成淵動極遂成然潤則水體具然則火用全水體以器受火用以薪傳體庄天地後用起天地先

龍門道中

物理人情自可明何嘗感々向平生卷舒在我有成算用舍隨時無定名滿日雲山俱是樂一毫榮辱不須驚候門見說深如海三十餘年掉臂行

極論

下有黃泉上有天人人許住百來年還知虛過死萬遍却似不曾生一般要識明珠須巨海如求良玉必名山先能了盡世間事然後方言出世間

首尾吟

堯夫非是愛吟詩詩是堯夫可愛時寶鑑造形難隱髮鸚刀迎刃豈容絲風埃若不來侵路塵土何由上得衣欲論誠明是難事堯夫非是愛吟詩

堯夫非是愛吟詩詩是堯夫不強時事到強爲須涉跡人能知止是先機面前自有好田地天下豈無平路岐省力事多人不做堯夫非是愛吟詩

堯夫非是愛吟詩詩是堯夫喜老時明着衣冠爲士子高談仁義作男兒敢於世上明開眼肯向人間浪皺眉六十七年無事客堯夫非是愛吟詩

月到梧桐上吟

月到梧桐上風來楊柳邊院深人復靜此景共誰言

清夜吟

月到天心處風來水面時一般清意味料得少人知

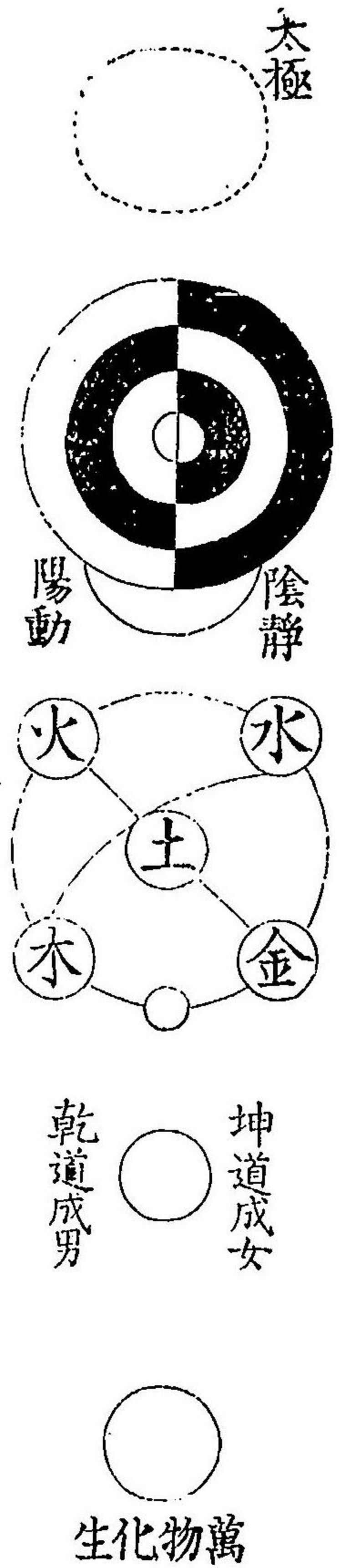
嗚呼彼れが天津にありて三更天地靜なるの夜裂帛一聲の杜宇を聞きて以て地氣の南するを知り或は横渠兩程子等と共に天清よく風暖なるの口川上に臨んで其易學の玄妙を談論し或は一几の食卓に付きての疑問に對する時すら其理を極論して以て六合の外に至り彼等をして咨嗟贊嘆措く能はざらしめたる所以の者豈偶然ならんや其子伯溫及び王天悅張岨等其家學を繼ぐといふ

第六章 周濂溪

邵康節の數を以て其哲學の大綱となせるに相對し同時に起り更に理を以て其世界觀を組織し儒教哲學の上一新路を開きたる者を周濂溪となす康節は「ピタゴラス」の如し「ピタゴラス」の哲學によれば宇宙に絶對的の一と稱する完全の數あり總別奇偶此より出で、萬物即ち生ず之に反して濂溪は「アナキザラス」が以前の器械的觀察に反働し「スース」と稱する者即ち意匠を有したる睿智に由りて萬有の出でたる者となすの説に似たり

周惇頤（前宗天禧六年生神宗熙寧六年六月七日卒嘉祐五十七）字は茂叔濂溪と號す博學力行にして甚だ高節あり嘗つて洪洲分寧縣の主簿となり獄事を決斷して令名あり然れども當世に意なきを以て閑居道を樂む臆前の草を除せずして曰く與自家意志一般と黃庭堅其人品を評すらく其人品甚高竹中瀟灑如光風霽月と此の十四字彼の如何なる人たるかを窺ふに足る其著はす所太極圖太極圖說及び通書四十篇あり天地人及び萬物發達の玄理を明らかにす

太極圖とは何ぞや



是の圖を説明したる者は太極圖說なり曰無極而太極、太極動而生陽、動極而靜、靜而生陰、靜極復動、一動一靜、互爲其根、分陰分陽、兩儀立焉、五行一陰陽也、陰陽一太極也、太極本無極也、五行之生、各一其性、無極之真、二五之精、妙合而凝、乾道成男、坤道成女、二氣交感、化生萬物、萬物生々、而變化無究焉、人也、得其秀而最靈、既生矣、神發知知、五性感動而善惡分、萬事出矣、聖人定人以中正仁義、而主靜立人極焉、故聖人與天地合其德、日月合其明、四時合其序、鬼神合其吉凶、君子修之吉、小人悖之凶、故曰、立天之道曰陰與陽、立地之道曰柔與剛、立人之道曰仁與義、又曰、原始終故知死生之說、大哉易斯其至矣、と僅々たる二百二十有八字、遂に伊洛關閩の源となり、又宋代學者中の一大爭點となるに至れり、以上の説によりて、濂溪哲學の要を略言せんに、元來天地に先立ちて絶對にして自存せる者あり、

り觀るべからず、聞くべからず、觸るべからず、然れども秩然たる條理の其内に包含せらるゝあり、故に之を稱して太極と云ふ二種の活動力ありて之に附屬す曰く、動曰く、靜、太極是によりて以て陰陽の二氣を生ず、二氣分れて木火土金水の五行となる、是故に五行陰陽太極本是れ一體たり、五行の精粹集合して人類を生ず、人類は五行によりて以て仁義禮智信の五性を得るが故に、萬物の靈たるを得るなり、然れども其五性を動かして外物に應ずるに當りてや、其行爲に善惡の區別を生ずるに至る之を律して以て正に復歸せしめんが爲めに、聖人中正仁義の道を立て、靜を主とすることを教ふ何となれば、靜にして外に觸れざるときは其五性中に全くして惡に陥らざればなり、老子の所謂五色令人目盲、五音令人耳聾、五味令人口爽、馳騁田獵令人心發狂、難得之貨令人行妨、是以聖人爲腹不爲目、故去彼取之、第十二章の意なり、苟も此の道に入るときは天地と一體となることを得、と後來洛學の現象世界の本體に關するの説は無極而太極より來り、天地人及び萬物の開展せる所以の説は一動一靜一陰一陽より來り、人性に氣質本然の二種あるの説は五性感動而善惡分、萬事出矣より來り、敬を以て修身の第一義となすの説は聖人定人以中正仁義而主靜より來る。

通書四十篇は太極圖説に於ける理論を實際に人世に應用せしめんが爲に著はされたる者の如し濂溪思へらく人間修身の眞諦は中正仁義にあり之を名づけて誠と云ふ聖人唯之を失なはざらんことを勗む人間精神の本然は天地の太極と同一にして純粹至善なる者なり天地の萬物を化生する所以精神の萬理を藏して秩然紊れざる所以の者は皆斯誠に由らずんばあらず曰く誠者聖人之本、大哉乾元、萬物資始、誠之源也、乾道變化、各正其性命、誠斯立焉、純粹至善者也、故曰一陰一陽之謂道、繼之者善、成之者性也、元享誠之通、利貞誠之復、大哉易也、性命之源乎、誠上第一、人性其未だ外物と接せずして寂然として動かざるときは純粹至善なりと雖もその己に發して事に處するに當りてや善惡の生ずるを免れず故に君子は意を此の際に注ぎて戒慎是れ怠らざるなり曰く君子慎動慎動第五又曰く誠無爲、幾善惡、性焉安之、之謂聖、復焉執焉、之謂賢、發微不可見、充周不可究、之謂神、誠幾德第三然らば則ち如何して其本然の性を全ふすべき乎他なし無欲にして恬淡虛無外誘を拒絶して常に心を靜に安んずるに在り曰く聖可學乎、曰可、曰有要乎、曰有、請問焉、曰一爲要、一者無欲也、無欲則靜、虛動直、靜虛則明、々則通、動直則公、公則傳、明通公傳庶矣乎聖學第二十

以上康節濂溪二子の哲學組織を観るに皆易學を以て其基となすこと同一なりと雖ども其觀察點の異なる所あり即ち康節は數より之を求め濂溪は理より之を明らかにせんと欲するなり然るに洛學を稱するに當りて世多く周子を稱して邵子を除き程朱二子も之を重んずること濂溪の如くならず朱子の伊洛淵源錄を著はすに臨んで之を其傳中に加へざる所以の者邵康節亦有些少似他老子、問淵源錄中何故有康節傳、曰書坊自增耳、朱子語類卷六十は何ぞや是れ畢竟宋學一代の氣運の然らしむる所にして即ち義理性命の學其重きを得ると且、又、兩程子等の濂溪が教を受けしとに因らずんばあらず然れども邵子の學の一代に大なる勢力を興へしこと豈必ずしも濂溪に劣れりとすることを得んや況んや此の二子の學術の基つく所傳説によれば皆陳搏より來りし者となすをや朱子の如きは百方其然らざる所以を辨護して曰く今人多疑濂溪之學出於希夷、某曰濂溪書具存如太極圖、希夷如何有此説、と然れとも近來考證家の説によれば太極圖の周子に始まりしにあらざるを知る夫れ或は然らん何となれば大凡一定説の生ずるは大輪小輪の木理年を経るに従ひて一片、又、一片相積重して遂に雲を凌ぐの老樹を成すが如く以前多少の臆説假定ありて先づ之を助成

せざるべからず何の根據核仁もなく一人忽然として之を嚙契すること思想發達の規則にあらざるなり老子の説も一朝にして老子に始まるにあらず其書によれば古來より既に彼に類似したる理論ありし者の如し是故に濂溪に師ありとて敢て其名譽を毀損するに足らざるなり孔子の聖すら猶禮を老聃に問ひしにあらずや

今、康節及び濂溪が學術の開祖として稱せらるゝ所の陳搏の傳を案するに亳州真源の人にして字を圖南と云ふ聰明穎悟人に過ぐ華山に隱居す宋太祖の時來朝して希夷先生の號を與へらる其著はす所指玄筌及び寓言釣潭集等あり搏其學を種放に傳ふ放字は明逸洛陽の人にして七歳の頃より文を能くし終南山に隱居す宋の太宗之を召せども辭して應せず放其學を穆修に傳ふ修字は伯長鄆州汝陽の生にして真宗の頃の人なり性極めて剛介なるを以て世に容れられず柳開に尋ぎて古文を唱導す其著述する所詩書序記誌等の數十篇あり伯長其學を李挺之及び濂溪に傳へ挺之は之を邵雍に授けたること前述の如し然らば即ち二子の新學の一朝一夕にして生じたる者にあらざるを知るべし

今、二子が學理の源泉たる易經につきて一言せしめよ抑、易は支那に於ける哲學的觀

察の最古なるものにして四千年間の哲學者の考思せる所、此範圍の外に出づる者殆んど皆無と云ふも可なり其理多岐にして且、玄妙一朝にして之を究はむべからずと雖も今暫く其組織を概言せんに乾坤即ち陰陽の二儀を其思想の起點として續釋したる所の二元的思辨と云ふも可なるべし何を以てかゝる思想を得しかは今日之を明白に知ること能はざれども多分自然の現象と人類生殖の作用とを結合して之を對比類推し抽象的に八卦の數を假りて之を述べたる者なるべきか蓋し如是反對の二元を立つるは人類が哲學的考察をなすにつき免るべからざるものと見へ各國の哲學神話等に於て多く之を見ることを得、此の書一たび成りしより以後儒教中かゝる哲學的組織の書出でざりしが幾んど千五百年を経て再び康節及び濂溪の二子によりて祖述せられたり然らば是時は儒教が其最初に復歸したる者と謂ふべし而して更に之を上代に比較するにこの後、宋學中諸說の勃興は詩書易春秋既に成りて老莊申韓等の唱導せられたる時と相對し宋學以後清に至りて考證學の起りたるは漢唐訓詁學の戰國以後に生したるに似たりと謂ふべし同一の傾向を有する事實の循環豈亦、奇ならずや

余は既に宋代儒教哲學の創唱者二人の學說を講述せり將に進んで其繼續者たる張程の事に入らんと欲す然れども是に先だちて支那人上代の哲學的思想を概括して之を略言するも無益の業にあらざるべし

第一支那人は純粹的論法を用ふと雖も歸納的論法に依ること少なし是を以て易理の如きも一畫より起りて八卦に至り更に六十四卦三百八十四爻等を生ず

第二支那人は自然界と人間社會とは其間密接の關係あることを信ず且幾分か重きを自然界に置きたり是れ其勢力の強大にして原人時代に大なる影響を與へしによる者なるべし是故に包犧氏は先づ天の象と地の法とを俯察して然る後其易理を案出して人事も亦是の如き者なりと類推したり又淮南子に曰く天有四時五行九解三百六十六日人亦有四反五臟九竅三百六十節天有風雨寒暑人亦有取與喜怒云々精神訓亦天人の一致を示したる者といふべし

第三支那人は天地人元來同一體たることを認むるを以て人は天地と其徳を合す天の徳は萬物を發育生長するを以て人も亦仁と稱する當然たる慈惠の徳を有す是故に人間社會は「ホツプス」の所謂凡ての人は凡ての人と戰ふ所にあらず亦莊子の所謂

人と人と相食む所にもあらず或は一時其道を失なふ者ありと雖も之を改悛して其正に復歸せしむるときは天と其徳を合するに至る易に曰く立天之道曰陰與陽立地之道曰柔與剛立人之道曰仁與義說卦傳詩に曰く天生蒸民有物有則民之秉彝好此懿徳蒸民之を要するに其人生觀は樂天的なり

第四支那人は器械的將數學的思想を有す是故に數により易理の用を託し且之を法文制度の上に至るまで適用せり書經に曰く初一日五行次二曰敬用五事次三曰農川八政次四曰協用五紀次五曰建皇極(洪範)後世の五行學の如き皆此の思想より胚胎し來りたる者なり隋の蕭吉の五行大義に曰く行言五者物雖多數不過五故在天爲五星其神爲五帝孔子曰昔丘聞諸老聃云天有五行木金火水土其神謂五帝在地爲五方其鎮爲五岳物理論曰鎮之以五岳在人爲五臟其修五官云々と彼等の如何に五と稱する數を規則正しく運用せんと欲したるかを知べし

第五支那人の宗教的思想は多神教なり書經に曰く肆類于上帝禋于六宗望于山川禘于群神(虞書)然れどもその中に最大最高の神あることを信ず之を天或は上帝と稱す五經通義に曰く天神之大者曰昊天上帝其佐曰五帝と神を以て人格的となすことあり

り或は然らざることあり然れども詩書左傳等の記する所によれば上代は人格的に神を表すること多し詩の皇矣上帝臨下有赫、監觀四方、求民之莫、維此二國、其政不獲、維彼四國、爰究爰度、上帝耆之、憎其式廓、乃眷西顧、此維與宅、皇矣、是れ其一例なり只希臘人は或は我國人の如く甚しからず精神不滅の如きも亦之を信したる者の如し第六或點より支那人を論ずるときは抽象的頭腦に乏しきが故に哲學理學の如き者その進歩を爲さずと雖も一方より之を觀るときは頗ぶる之に富みたるの傾向あり是故に世界の本體を説明するに皆之を形而上の事物に取りて希臘人の如く水、空氣或は分子によらざるなり或は易の數或は老子の道の如き即ち是れなり第七支那人の思想は實際的に事物を運用せんと欲するが故に極端なる唯物論過激なる唯心論等出づることの痕跡なきにあらずと雖も長く人心を支配すること能はず是を以て哲學宗教等に關しては其心寧ろ冷淡なりといふも可なり支那人上代の思想大凡以上の如し吾人は宋代の儒學に於て此の古代思想が幾何なる點まで變革せられたるかを觀んと欲す

第七章 張橫渠

張載（真宗天禧三年生神宗熙寧十年十二月卒海五十八）字は子厚橫渠と號す秦人なり十八歳の時既に功名を以て自から許し書を范文正公に呈して採用せられんことを請ふ公先づ勸めて中庸を讀ましめ且釋老の學をも研究す久しくして其非なるを知り後兩程子に洛に見ゆるに及よび其意見の合するを以て直ちに志を改めて専ら儒教に其身を委だぬ其人を教ふるや先づ禮より入らしむ是故に童子は洒掃應對に習はしめ女子の未だ嫁せざる者は親づから祭祀酒漿の事務を實踐せしむ付つて學堂二屋を作り掲ぐるに箴誠を以てす東銘西銘是れなりまた正蒙十七篇の著述あり西銘に曰く乾稱父、坤稱母、予茲藐焉、乃渾然中所天地之塞吾其體、天地之師吾其性、民吾同胞、物吾與也、云々と此の兩銘は道德上の訓誡として著名なる者なりと雖も其哲學は寧ろ正蒙十七篇にありといふべし

吾人は是の正蒙を取りて之を以前の康節濂溪の書と比較するに其思想の愈精密に赴き且その論する所多端に至れるを知る今之を大別して五條となす

第一宇宙の本體論橫渠は宇宙を以て一大清虛より生ずる者となす然れども清虛と

佛老の虚無と相類して同一視せられんことを恐れ之を實するに氣を以てす此の氣の未だ發せざるを稱して太和若くは道と稱す已に發するときは陰陽動靜屈伸來往となり天地萬物盡く之に滯るゝ者なし曰く大和所謂道中涵浮沈舛降動靜相感之性、是生綱緝相蕩勝負屈伸之始(太和第二)後我國の大鹽後素が大虚を以て其哲學の第一義となせるは頗る横渠の説に類すと云ふべし

第二理一分殊の辨現象世界の萬事萬物各々其形を異にし其類を殊にすと雖も皆陰陽動靜により一氣の變化したる者に過ぎず森羅萬象其分各々殊なりと雖も之を生ずる所以の理は則ち一のみ然るに人は唯其現象の殊なるを觀て其本體の一なる所以を知らず或は徒らに其本體を觀て其發して殊なるに至るを知らざるなり曰く大虚者氣之體、氣有陰陽屈伸相感之無究、故神之應也無究、其散無數、故神之應也無數、雖無究其實湛然、雖無數其實一而已陰陽之氣散則萬殊、人莫知其一也、合則混然、人不見其殊也(乾稱第十七)是れ程子の所謂放之彌於六合卷之退藏於密と相同じと云ふべし

第三人性論、人性には天地之性氣質之性の兩種あり天地之性とは其性の未だ發せずして渾然たる太和に居るを云ふ是時は人性純粹至善なる者なり氣質之性とは已に

發表せられたる者にして即ち形以下の者たり人の才不才賢不肖等あるは皆氣質之性の然らしむる所なり故に天地之性より人を論ずるときは盡く同一なりと雖も氣質之性よりするときは各人皆異なり是を以て君子は氣質之性を性の本然とせずして天地之性に復へらんことを求む曰く形而後有氣質之性、善反之則天地之性存焉、故氣質之性、君子有弗性者焉(誠明第六)又曰く人之剛柔緩急有才與不才、氣之偏也、天本參和不偏、養其氣反之本而不偏、則盡性而天矣(同上)然るに何の故に天地之性の外に氣質之性あるや譬へは同一の冰塊と雖も其位置方向の如何によりて日光を受くるに當り小大昏明の別を生ずるが如し曰く天性在人、正猶水性之在水、凝釋雖異、爲物一也、受光有小大昏明、其照納不二也(同上)

第四現象本體の別、宇宙の本體は一大清虚にして其現象世界は一氣の屈伸往來して千態萬狀に至りたる者なり其發表せられたる者變化して定らざること是の如しと雖も其本體たる一大清虚は千秋萬古依然として同一たり曰く大虚無形、氣之本體、其聚其散、變化之客形爾、至靜無感、性之淵源、有識有知、物交之客感爾(太和第二)現象は單に我心の主觀的作用なりと爲す者の如し

第五老佛論、邵周二子は明白に老佛を批評駁撃したることあらず且、韓歐二子ももと深く之を研究せざるを以て彼等に對して論評せる者太甚だ淺薄に過ぐ然るに張子の所論は頗ぶる其度を進めて精密なり是れ嘗つて其佛門に入りし故なるべし曰く知虚空即氣、則有無隱顯神化性命、通一無二、顧聚散形不形、能推本所從來、則深於易者也、若謂虛能生氣、則虛無究氣有限、體用殊絕、入老氏有生於無自然之論、不識所謂有無混一之常、若謂萬象爲太虛中所見之物、則物與虛不相資、形自形、性自性、形性天人不相待而有、陷浮屠以山河大地爲見病、此道不明、正由潛者略知體虛空爲性、不知本天道爲用、反以入見之小、因緣天地、明有不盡、則誣世界爲幻化、幽明不能舉其要、遂躐等妄意、而然不悟一陰一陽範圍天地、通乎晝夜三極大中之矩、遂使儒佛老莊混然一途、(天和第一)又曰く有無虛實通爲一物者性也、不能爲一非盡性也、飲食男女皆性也、是烏可滅、然則有無皆性也、是豈無對、莊老浮屠爲此說久矣、果暢其理乎、(中略)浮屠明鬼、謂有識之死、受生循環、遂厭苦求免、可謂知鬼乎、以人生爲妄、可謂知人乎、天人一物、曠生取舍、可謂知天乎、孔孟所謂天、彼所論道也、惑者指游魂爲變、爲輪廻、未之思也、大學當先知天德、知天德則知聖人、知鬼神、今浮屠極論要歸、必謂死生轉流、非得道不免、謂之悟道可乎、(乾稱第十七)此の批評の果して正當

なるや否やは暫く之を措きて唯、其學理的に駁撃せしこと原道本論の比にあらざるを觀るべし

其他天文地理に關したる者にて參兩篇あり動植に關したる者には動植篇ありと雖も之を省略す

第八章 程明道

洛學の泰斗を以て目せられ生于千四百年之後、得不傳之學於遺經、(文彥博の語)と稱せらるゝ程明道(仁宗明道元年生、哲宗元豐八年卒、六月十五日卒、壽五十四)名は顥字は伯淳といふ河南の人にして父を程珦といふ當時周濂溪洛に在りと雖も人之を知る者少なし、獨り珦其常人にあらずるを見、且學術の深きを知り、頴及び其弟頴をして從學せしむ、頴(明道二年生、徽宗七年卒、字は正叔、世人の所謂伊川先生なり、濂溪二子をして首として、仲尼顔子の樂しむ所は何事なるかを考察せしむ、明道性質極めて溫良淳厚にして、和粹の氣、面背に盡れ、門人交友の數十年從遊する者ありと雖も、其忿勵せる顔色、舉動を見たる者なし、出で仕へて京兆府鄂縣主簿、其他の諸官を歷任して皆治績あり、神宗皇帝の召に應じて入對し、其退ぞく毎に帝宜はく頻求對來、欲常相見爾と又王安石と議合はず、安石怒氣太甚だし之を和らげて曰く天下事非一家私議、願平氣以聽と執拗なる安石も遂に婉ちて自ら屈するに至りしといふ後、安石已に附せざるものを追ふに當りても獨り明道を怨まずしく曰く此人雖不知道亦忠信人也と公論敵國にあり亦以て其人品を推知すべし

今、明道の哲學を以て以前の三子に比するに、理氣に關すること少なくして、心性に傾むきたるを見る、即ち自然界の觀察よりも寧ろ人間の倫理につきて立論せしこと頗る多し、其説く所、康節の數にあらず、周濂溪の理にあらず、張子厚の一大清虛にあらず、只、人間は如何にせば學問を爲して其極點に達し、以て人間たる所以の本分を盡くすことを得べきかを研究したる者なり、夫れ人類の至徳は渾然事物と一體にして、天地と其徳を合するにあり、之を名づけて仁と云ふ、此の道に入らんと欲するときは常に誠敬の二字を守りて從容自得するに在り、誠仁篇は之を述べたる者なり、其文に曰く、學者須先識仁、仁者渾然與物合體、義禮智皆仁也、識得此理、以誠敬存之而已、不須防檢、不須窮索、若心懈則有防、心若不懈、何防之有、理有未得、故須窮索、存久自明、安待窮索、此道與物無對、大不足以明之、天地之用、皆我之用、孟子言萬物皆備于我、須反身而誠、乃爲大樂、若反身不誠、則猶是二物有對、以己合彼、終未有之、又安得樂、訂頴意志、乃備言此體、以此意存之、更有仁義必有事焉、而勿正、心勿忘、勿助長、未嘗致纖毫之力、此其存之之道、若存得便合、有得、蓋良知良能、元不喪失、以昔日習心未除、却須存習此心、久可奪舊習、此理至約、惟患不能守、既能體之而樂、亦不患不能守也、(二程全集二)是れ論語より仁字を求め來りて、其第

一義となし之を助くるに中庸の誠と孟子の必有事焉而勿正、心勿忘勿助長也を以てしたる者なり而して更に誠敬を説明せんが爲に定性を云ふ定性とは何ぞや心を靜に定めて自然に内外の經界を滅するを云ふ何をか内外の經界ありと云ふや己の心の外に物ありしとなしてこれに誘惑せらるゝを云ふ定性は之を譬ふるに猶明鏡の如し明鏡の美醜を寫つす敢て意あるにあらず只其體明らかなるを以て物苟も其前に來るときは直ちに之を映すと雖も其物去れば鏡裏又其痕跡を止めざること心を靜におくときは外物の是非善惡を判して誤らず彼等去るときも亦之に拘はることなしと一般なり故に曰く所謂定者動亦定、靜亦定、無將迎、無内外、苟以外物爲外、率己而從之、是以己性爲有内外也、且以己性爲隨物于外、則當其在外時、何者爲在內、是有意于絕外誘、而不知性之無内外也、至集五十六答橫渠張子厚先生書是れ莊子の所謂至人用心若鏡、不將不逆、應而不藏、故能勝物而不傷、應帝王と其意略ほ似たりと云ふべし

明道の心性に關するの説頗る靦るに足る性とは天の命する所の者にして人の受くるものをいひ心とは性の働力にして吾人の舉動行止を總轄するもの、稱なり即ち未發に屬して天理を有する所の道心たり已に發して外に顯はれんと欲する所の思

慮は是れ即ち情にして是時は其道心幾分か人欲の爲めに腐蝕せらるゝを以て變じて人心となりたる者なり是故に心と情とは猶水の流に於けるか如し心本と善なりと雖も發して善惡となるは水の流の東西あるに似たり曰く心有善惡否、曰在天爲命、在義爲理、在人爲性、主于身爲心、其實一也、心本善、發于思慮、則有善不善、若既發、則可謂之情、不可謂之心、譬如水、只謂水、至如流而爲派、或行于東、或行于西、却謂之流也、と明道は是の如く心の本然を認めて善となすと雖も其性に至りては善惡一定せざる者となす思へらく善惡は已發の後始めて定まるものにして未發の性の如きに至りては善と云ひ難たく亦惡とも稱し難たし孟子の性善はその已發につきて稱する所の論なりと明道は心と性と混同せらるゝを憂れへて之を辨すること頗る勤めたり曰く生之謂性、々即氣、々即性、生之謂也、人生氣稟、理有善惡、然不是性中元有此兩物、相對而生也、有自幼而善者、有自幼而惡者、是氣稟自然也、善固性也、然惡亦不可不謂性也、蓋生之謂性、人生而誰以上不容說、才說性時、使己不是性也、凡人說性、只是說繼之者善也、孟子言人性善是也、夫所謂繼之者善也者、猶水流而就下也、皆水也、有流而未遠、固已漸濁、有出而甚遠、方有所濁、有濁之多者、有濁之少者、清濁雖不同、然不可以濁水不爲水也、如此則人不可以不

加澄治之功故用力敏勇則疾清用力緩怠則遲清及其清也則却只是元初水也亦不是將清來換却濁亦不是取出濁來置在一隅也水之清則性善之謂也故不是善與惡在性中爲兩物相對各自出來此理天命也順而循之則道也循此而修之各得其分則教也三程全書一其人生而靜以上不容說才說性時便已不是性也の數言は明道の甚だ辨明に困しむし所なるべし今其意を推すに性とは喜怒哀樂の未だ起らず即ち不自覺的の狀態を指さしたる者にして善惡の何れにも一定せざるなり其性を善なりと云ふは不自覺的變じて自覺的となりたるにつき立論したるものなり然れとも既に自覺的となるときは是れ性と稱すべからず寧ろ心に屬するに似たり心の善なること天下の人皆同じ猶天下の萬水の盡く低に就くが如し之を要するに明道の意見は明らかならず何となれば彼れ既に善惡は已發に屬する者なりと説きながら一方に於ては心を以て未發となして之に附するに善を以てす若心を以て已發となさば則ち其情と稱する者は何者なるか情は心の思慮に發するを云ふといへしにあらずや一面に於ては生之謂性の説によりて告子に依り一面に於ては性善なりと稱して孟子の説に従ふ蓋し明道は必らず性善説を立てんと欲して遂にかゝる曖昧なる理論に陥りたる者

ならん朱子の弟子陳植の如きは之を解して以爲へらく孟子は性を義理上より説き程子は之を氣質上より説きたる者なりその著木鐘集に之を述べて曰く孟子之時諸子の言性往々皆于氣質上有見而遂作氣質爲性但能知其形而下者耳故孟子答之只就他義理上説以攻他未曉處氣質之性諸子方得于此孟子所以不復言之義理之性諸子未道于此孟子所以反覆詳説之程子之説正恐後學死執孟子義理之説而置失血氣之性故并二者而言之曰論性不論氣不備論氣不論性不明程子之論舉其全孟子之論以矯諸子之偏人能即程子之言而達孟子之意則其不全之意不辨而明矣宋元學案卷六十五既に偏と云ひ全と云ふ却て是れ孟程兩子の差を證明する者にあらずや元來孟子と告子との論争を單に論理上より正すときは孟子の論の頗る失當たること明らかなり太宰春臺も杞柳楛捲の章を辨じて曰く告子カイフ所ハ杞柳ヲ採テ楛捲トナスハ杞柳ノ性シナヤカナルガ故ナリコレヲ採テ楛捲ヲナセバトテ杞柳ヲ傷害スルニアラズと亦性猶濡水也ノ章ヲ論ジテ曰ク如何ニトナレバ水ノ下ルハ水ノ動ク所ニテ見ユ人ノ性ノ善不善ハ動カス前ニテ論ズ中略告子ガ意ハ水ノ性ヲ以テ人ノ性ヲ譬喻スルニ非ズ只濡水ノ東ヘモ西ヘモ人ノ決スルニ順テ流レ行クヲ以テ人ノ性ノ善ニモ

惡ニモ導カル、ヲ喻タリト亦生之謂性の章につき曰く此段ニテモ犬ノ性ノ性ト見ルハ牛ノ性ヲ性ト見ルニ同キカ牛ノ性ヲ性ト見ルハ人ノ性ヲ性ト見ルニ同キカト孟子問ハ、告子亦然ナリト答フベシ孟子左様ニ問ハズシテ直ニ犬ノ性ハ牛ノ性ニ同キカ牛ノ性ハ人ノ性ニ同キカト問シ故ニ告子答へズ是レ孟子ノ前ノ二問ト其意ニ戻レルガ故ニ告子答へザルナリ(以上聖學問答卷上)明道は稍之を覺りたる者の如し然るに全く之を破すること能はざるは儒教の性質事狀の然らしめたる者なるか

第九章 程伊川

明道の後を繼ぎて洛學を盛ならしめたる者は實に彼が弟伊川の功なり少年の頃より英氣空を凌ぐの風あり十八歳の時闕下に上書して世俗の論を却けて王道を以て心の則となさんことを論ず大學に入るに及び胡瑗諸生をして顔子の好む所如何なる學なるかを論せしむ伊川の答案に云へるあり天地儲精得五行之秀者爲人其本也直而證其未發也五性其焉曰仁義禮智信形既生矣外物觸其形而動於中矣其中動而七情出曰喜怒哀樂愛惡欲情既熾而益蕩其性慤矣是故覺者約其情使合於中正其心養其性故曰性其情愚者則不知制之縱其情而至於邪僻積其性而亡之故曰情其性(三程全書六十二)安定この文を觀て大に驚きしと云ふ哲宗皇帝の朝大皇太后に召對して天子輔翼の必要を奏し遂に經筵進講の命を蒙むる其身を持すること頗る莊帥道も亦嚴にして少こしも假借せざるなり哲宗の嘗つて螻蟻の嗽水に溺るゝを憐れむと聞き奏して曰く願くは此心を以て百姓に及ばさしめよと猶孟子が堂下の牛によりて齊王の心を啓かんと欲したるが如し一日帝嘗つて庭前の柳を折る之を諫めて曰く時はれ陽春天意物を生せんと欲するに際す一枝と雖も故なくして之を折るべからず

とかゝる些細の事に至るまで匡救至らざるなし然るに當時東坡も亦同じく經筵に列仕す天性洒落快活にして禮節に拘はること少なきを以て自然伊川と相容れず洛蜀の争是に於てか起る群少此に乗じて伊川を讒陷して遂に其職を辭せしめ崇寧二年范致虛の上奏によりて目せらるゝに邪說誠行を以てせられ其學徒を解散することを命ぜられたり

伊川の學説は明道と大略相同しきを以て其特質と云ふべき者少なし今茲に論せんと欲する所は兩程の性行と其學術研究法との稍異なる點を比較せんと欲するなり第一伊川の自ら持すること高く亦人を責むることの厚きこと前述の如し之を明道の溫和なる氣象に比すれば大に異なりといふべし故に議論に際し若合はざることあれば明道は更に「考ふべし」と云ふと雖も伊川に至ては直ちに「然らずの一言を以て之を斷す一は是れ濃厚篤實の君子なれども他は剛邁不屈の偉人なり一は悠々として天を樂しみ命に安んずと雖も他は奇骨稜々として技癢に勝へざるの性なり一は洞庭湖の如く一碧萬頃際涯知るべからざるの風采ありと雖も他は蛾眉山に似て壁立千仞攀ぢ難きの氣象なり是故に明道も曰く異日能使人尊嚴師道者吾弟也若接引

後學隨人才而成就之則才不得讓焉と朱子も亦曰く大抵明道之言發明極致通透灑落善開發人伊川之言即事明理質懇精深尤耐咀嚼然明道之言一見便好久看愈好所以賢愚皆獲其益伊川之言乍見未好久看方好故非久於玩索者不能識其味此其自任所以有成人材尊師道之不同文集三十一答張敬夫書亦以て其學風の稍異なる所以を知るべし

第二兩程の性行の差既に前述の如し是故に明道が爲學の方法は自然に其道に融會するを貴ぶ吾學雖有授受天理二字卻是自家體貼出來(全書二)之に反して伊川は頗る歸納的に學術を研究せんと欲す日々格物究理に積染して始めて貫通する所あり躬から事物に當りて其理を正確に認識せずんは何事も容易に之を信すべからず曰く物理須是要究若言天地之所以高深鬼神之所以幽顯若只言天只是高地只是深只是已辭更有甚(全書十六)又曰く人皆稱柳下惠爲聖人只是因循前人之語非自見假如人言孔子爲聖人也須直待已實見聖處方可信(全上)是れ「デカルト」が哲學研究法の第三條如何なる事物と雖も自家心中に於て明白に之を知るにあらずんば決して之を信すべからずとの言に相一致せり

伊川の氣象學風以上の如く活潑々地なるを以て邵周張程に比すれば頗る生色ありて哲學社會に一の活氣を興へたり蓋し既往の諸子は或は靜或は敬或は誠等を重もんとて専ら寂然不動に傾きし者なりと雖も伊川は之に反して活動變化を主張したり曰く自古儒者皆言靜見天地之心惟某言動而見天地之心(卷十五)又曰く天地之化既、是兩物必動已不齊譬之兩扇摩行使其齒齊不得齒不齊既動則物之出者何可得齊(全)又、曰く之若謂既返之氣復將爲方伸之氣必資於此則殊與天地之化育不相似天地之化、自然生々不究更何復資於既斃之形既返之氣以爲造化(卷十六)之を前時の哲學と比較するに恰かもイリアテツク學派の萬物靜止論を唱へしの後、ヘラクリタヌ起りて萬物盡く常に變化することを説きしが如きの觀あり

明道は時々老佛の書も之を觀たりと雖ども伊川に至りては斷然之を却ぞけたり然れども其説く所佛臭なきにあらず蓋し英邁の氣象知らず知らず其範圍の外に出でしに由る者なるか曰く學者先務固在心志有謂欲屏去聞見知思則絶聖棄智有欲屏去思慮患其紛亂則須坐禪入定(十六)

其他の諸説論性不論氣不備論氣不論性不明(七)の如き性無不善而有不善者才也性即

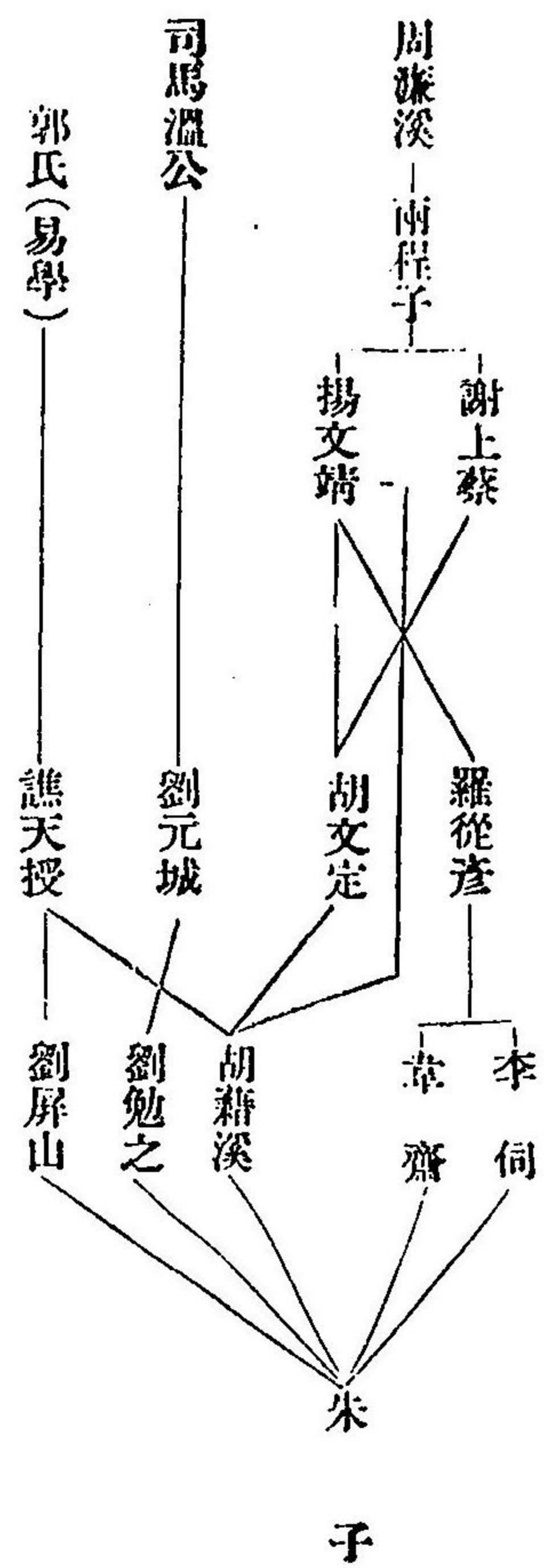
是理々即自堯舜至于塗人一也才稟于氣々有清濁稟其清者爲賢稟其濁者爲愚(十九)の如きその理氣心性に關する者は大抵明道等の意を敷衍したる者なり

第十章 兩程子と朱子との過渡

宋代に於て二回の黨禍あり第一回は元祐に起りて第二回は慶元に生ぜり是の二回に於て學術と政治との紛争大に起りて互に各々その黨を立て、以て勝敗を争ひたり其元祐の黨禍は金陵學派と洛學派との争より生じ來りたる者なり金陵派の首領王安石新經義を學官に立て且周官に附會して新法々天下に行ふに當り他の學派の人盡く其非なるを論じたりしかとも當時安石神宗の信用を得しを以て却て譴怒を蒙むるに至れり既にして哲宗位に即きて司馬溫公政を執るに及よび一時安石の徒輩退ぞけられて新法も亦廢せられしが溫公薨後二程の徒ありと雖も政治上に於て權力を有せざる故其勢頗ぶる振はず徽宗の崇寧以後章惇、安惇、蔡京、蔡卞等樞機に參するに及び文彦博、司馬溫公、兩程子其他新法を駁撃せし者一百十九人を元祐黨人と稱して彼等の姓名を石に刻し京自から姦黨碑の三大字を書して之を京城に立て其子孫の就官を嚴禁すかゝる勢なるを以て伊川の卒せしや平生の門人故舊と雖も連坐の罪を恐れて其喪を弔する者なく惟張繹、范城、孟原、及び尹惇の四人に過ぎず洛學をば異說として痛く排斥せられたり後來慶元年間に於ける朱子も同様なる禍を受

けたり

洛學の否運に會せしこと是の如しと雖も人の思想は政府の權力の能く防ぐ所にあらず恰も水の地に浸潤するが如く漸を以て次第に四方に蔓延せらるゝ者なり況んや二程の門亦博學有徳の學者輩出して其教を擴張せしに於てをや英才煥發せる謝上蔡名良佐字顯道謙謹にして好學なる楊文靖名時字中立號龜山の二子其最も卓拔せる者にして之に次く者は遊文肅名酢字定夫尹肅公惇字彥明號和靖等なり其他皆各々その授かる所を以て四方に傳ふその秦地方に入りしは呂氏兄弟即晉伯、和叔、與叔等の功なり其楚に入りしは謝上蔡の該地方に司教たりしを以てなり謝謨、馬涓は之を蜀に傳播せしめ周行已、許景衡、劉安節、飽若雨等は之を浙に擴張し王信伯は之を吳に輸入す然れども就中其最も洛學に功ありしは揚文靖なり何となれば文靖はその學を羅從彦に傳へ從彦は之を朱韋齋李侗に授け而して洛學の大成者たる朱子は此韋齋を父として此李侗を師とすればなり又朱子は一方に於ては胡藉溪、劉勉之等に師事したる者にして而して此等の人は揚文靖の門人なる胡文定の弟子なればなり今朱子の學統を圖すること左の如し。



宋代の儒教哲學は周子の大極說、邵子の先天の數理、張子の一大清虛、理一分殊、程明道の人性論、及び伊川の格物究理によりて大に精密に趣きその門人亦皆祖述する所ありしかども之を集合して大成したる者は朱晦庵其人なりと云はざるべからず朱子は此等の學理を渾化して之を明白にし以て一箇の哲理を組織し又諸子の下せる諸經の註解を網羅して以て爲學の門を定めたり朱子素より新奇なる見解を立てしにあらす眞る作者にあらすして述者たりしなり然れども若し朱子の之を統一すること微かりせば宋代の儒教哲學は完全の域に達せざるなり之を儒學の訓詁時代の人に

比すれば邵玄に類す之を歐洲近世哲學史中の人に求めば其位置頗ぶる「カント」に似たり宋學の諸問題の盡く朱子藥籠中の物となりしは「カント」が以前の經驗論唯心論等を總合して之を批判したるが如し歐洲近世哲學を了解せんと欲せば「カント」を知らざるべからず儒教の哲學を觀んと欲せば朱子の學理を明らかにせざるべからず是れ余が朱學を論せんと欲するの意なり

第一章より今章に至るまでは朱子が儒教中に於て如何なる位置を有するかを明らかにせんが爲めに歴史的事實より觀察したる者なり蓋し人間の思想は山間に於ける溪流の斷續隱見常ならざるか如しと雖も其屈曲に従つて其堤上に傍ふときは盡く同一の長流に屬する者たるを知る然れとも吾人をして朱子の哲學を述ぶるに先だちて其傳記を知らしめよ

第十一章 朱子の傳

王侯將相豈種あらんやとは是れ陳王の豪語もとより眞理なきにあらず然れども惡樹善果を結はず梅檀の二葉よりも香ばしきは亦世の傳ふる所誣ゆべからず今朱子の傳を案するに其父既に尋常の人にあらざるなり名は松字は喬年世々徽州婺源(今日の安徽省にあり)に往して著姓たり李延平と與に羅從彦の門に入る從彦は楊龜山の門人にして最も傑出せし者なり松日夜刻勵浮華を刮りて着實に就き日々大學中庸を誦讀して力を致知誠意に用ふ自から謂へらく卜急の性質ありて道を學ぶに害ありとて戒を古人佩韋の義に取りて韋齋と稱す進士に及第して官職に即きしが當時宋代の形勢を見るに金國の勢威日に盛にして朝廷の外交政略常に其宜しきを失し國步艱難甚だし松有志の徒と共に強硬政略を主張したれども宰相秦檜和議論者の巨擘なるを以て其議容れられず是を以て遂に官を辭して延平の尤溪城外毓秀峯の下(今日の福建省にあり)に寓居し餘生を送りぬ時に南宋の高宗建炎四年庚戌秋九月十五日(甲寅)午の刻其妻祝氏一人の男兒を擧げたり是れぞ即ち東洋哲學界の一大北斗として千載の後まで其光を止めたる朱子其人にして伊川歿後廿三年正に是れ

我朝崇徳天皇大治五年保元平治の亂將に起り日本の政體上大變革のなされんとするの時なり而して西洋にありて紀元後一千一百三十年復活せる文明の微光漸々暗黒時代を照さんとするに際す名は熹字は元晦また仲晦と稱す晦庵、晦翁、雲谷老人、滄州病叟、遜翁等皆その別號なり其居を武夷精舍、考亭、滄州精舍等と稱す幼よりして庭訓忽そかならず五歳にして學に入る當時韋齋その内弟程復に與ふる書によるに息婦生男名五二、今五歳上學矣の語あり五二とは熹が小字なり天稟の穎才既に囊中の物にあらず四歳のとき父天を指さして其天なることを教へしとき忽然問ふて曰く天の上何物ぞと痛く父の心を驚かしめたり八歳の時孝經を讀みて之に題して曰く是の如くならずんは人に非ざるなりと後來當時の思想を記して曰く某五六歳心便煩惱天體是如何外面是何物と豈驚くべき思想家にあらずや紹興十三年春三月丁亥韋齋歿するに臨みて此の幼なる思想家を籍溪の胡憲字は原仲白水の劉勉之字は致中屏山の劉子輩(字は彥仲)に託し遺言して曰く此の三人は我親友にして其學も亦淵源あり汝須らく之に父事すべしと熹是從ふ三子も亦亡友の遺託に負かずして之を教育撫養すること子姪の如く就中劉白水は其女を以て彼が妻となさしめたり

三子は皆洛學派なれども劉子輩胡憲の二子は交ゆるに老佛を以てせり
紹興十八年二十有二才の時進士に及第して同安縣の主簿となり治績大に擧がる廿
四歳の時に當り始めて李侗に延平に見へて其説を聽き從來徒らに空濶の言をなし
て自から快とし新奇を好んで着實を勤めざるの弊を覺り遂に弟子の禮を執る晦庵
が洛學の正統を得しは實に是時より始まる李侗字は愿中韋齋と同く羅從彥門下の
一人たり性恬淡温厚人之を評して冰壺秋月盤澈無瑕といふ嘗つて曰く學問之道不
在多言但嘿坐澄心體認天理と又儒佛の差を論じて曰く吾儒之學所以異於異端者理
一分殊也理不患其一所難者分殊耳と此等の言その學風の一斑を窺ふべし朱晦庵を
得るに及びてや頗るその才學に服せしと見へ友人羅博文に與へたる書の中にいへ
るあり元晦進學甚力樂善畏義我黨鮮有云々

孝宗皇帝位に即くに及びて直言を求む當時國勢金の爲に歴せられ日に盛りて月に
縮まる滿朝皆金の兵威恐喝を恐れて一人の義を唱へ計を獻する者なし熹其父より
遺傳し來りたる慷慨の情内に溢れて此の無氣力を嘿視するに忍びず封事を上りて
大に夷狄修攘を論じて主戰に左袒す隆興元年又召對に應じて奏するに大學の道は

格物にあり君父の讐は供に天を戴くべからざることを以てす然れども當時の宰相
湯思退等和議を主とせしを以て其言採用せられず熹も亦朝廷に立つこと能はず出
で、地方官となりたり然れども猶屈せずして屢々書を上りてその反對黨を彈劾す
ること頗る急なり是に於て彼等も亦上言すらく道學者は名を道に假りて以て僞を
なすと本部侍郎林栗は朱子と易及び西銘を論じて相合はざるを恨みて曰く彼れ本
と無學無識徒らに張載程頤の殘唾を呖ふりて自から道學と稱し門生數十人を従ひ
古昔孔孟の周遊に擬するは甚だ怪しむべしと

淳熙十五年五十九歳の時更に一大封事を上つり六事を論ず曰く輔翼太子曰く選任
大臣曰く振舉綱紀曰く變化風俗曰く愛養民力曰く修明軍政と戊申封事即ち是れな
り此の封事は孝宗を感せしめたること甚だ深く帝の寢に就き玉ひしにも關せず承
かに起きて之を批閱しその翌日熹を叙して大乙宮の主管となし兼ねて崇政殿説書
に任ず熹固辭して遂に秘閣修撰に叙せらる光宗の朝出で、潭州の知となり寧宗位
に即き趙汝愚政を執るに及びて再び之を召す是時に當りて韓侂胄定策の功あるを
恃みて頗る擅恣なり熹至りて先づ之を切言す是を以て旨に伴ひ四十六日にして罷

めらる反對黨これに乗じて朱學を目して僞學となし搏撃至らざるはなし沈繼祖胡紘劉德秀等の如き皆相共に讒陷を逞ふし遂に神器を窺伺する者となし僞學の目一變して逆黨となる余黨の如きは上書して黨の首を斬らんことを請ふ是を以て朱子に從遊する者も或は忌諱を避けて山林に隱るゝあり其志弱く氣小なる者に至りては名を改めて衣裳を變じ特に反對黨と交りて以て愛せられんことを求む是を慶元の黨禍と稱して以て前の元祐に比す只元祐の時は純然たる内政問題につきて生ぜし紛争なりしが慶元の時は是に加ふるに外交政略を以てしたるの迹あり然れどもこれを目して僞學となし其書を禁じ其學を止むるに至りては同一なりと云ふべし之を要するに宋代の大弊は全く朋黨にあり是を以て互に側目岐足一定の國是も立たず團結の機會も熟せず相打ち相仆れて遂に崖山沃血汚乘輿禮樂衣冠掃地虛の慘劇を見るに至れるは余實に宋代の爲に大息せずんばあるべからず嗚呼後の宋代たる者豈鑑せざるべけんや

朱黨の危きこと此の如しと雖ども泰然として動かす學を竹林精舍に講す人之を諫むる者あり曰く禍福自から命あり君の言固より我を愛するに出でたるものなるべ

し然れども我が壁立千仞の氣象豈斯道の榮光ならずや又曰く某今頭常如黏在頸上（語類）百七門人蔡元定道州に貶せらるゝに當り來りて晦庵に辭す平常寒暄の外絶へて嗟勞の語なく且前日讀みし所の參同契につきその疑點を論じたりと云ふ

天は此の大偉人を奪ひ去れり時に寧宗皇帝慶元六年三月甲子なり壽七十有一我朝の土御門天皇正治三年封建制度の創立者源賴朝薨去の年にして西洋にては一千二百年に當り名目論者と實點論者との争論盛なりし頃なるべし其葬式に當りてや反對黨上言すらく四方の僞徒その僞師を送らんが爲めに會合し遂に不軌を謀るに至るべし宜しく之を監察すべしと然れども猶會葬する者千餘人に及べり黨が政治上に於ける運命の不幸なること如此しと雖も眞理の光は長く之を掩ふと能はず韓侂胄死するの後嘉定元年十月諡を文と賜ひ中大夫を贈らる理宗の寶慶三年大師を贈られて信國公に追封せらる後徽國と改め淳祐元年周濂溪張橫渠二程と共に孔廟に配享せらる其時の詔に曰く朕惟孔子之道自孟軻後不得其傳至我朝周惇頤張載程顥程頤眞見力踐深探聖域千載絕學始有指揮中興以來又得朱熹精思明辨折衷會融使中庸大學語孟之書本末洞徹孔子之道大明于世朕每觀五臣論著啓沃良多今視學有日宜

令舉宮列諸從祀以副朕崇獎儒先之意と男子三人女子五人皆賢名あり後六十七年を經て宋の社稷將に亡びんとするに際し曾孫浚節を以て死す其家聲を辱しめざる者と云ふべし照忠錄に曰く朱浚字深原建寧府人酷嗜墨刻人號之曰朱古碑元兵至其家浚曰豈有朱晦庵孫而失節者哉遂自縊死と

晦庵壯より老に至るまで汲々孜々一日も學を廢することなし嘗つて病に罹りしとき人の晩起を勸むるあり答へて曰く某不能晩起雖甚病纔見光亦便要起尋思文字纔稍晚便覺似寢安鳩毒便似箇懶惰人心裏便不安須早起了却覺得心下鬆爽(二百四)又曰く某舊年思量義理未透直是不能睡初看子夏先傳後倦一章大凡三四夜究々到明徹夜(全上)是故に一章必ず究め一句必ず味ふ疑はしき所あれば其精通を待ちて止む四書集註の如きは前後殆んど四回の改正二十餘年を經てなりたる者なり然れども大學誠意の一章は未だ安んせざる所ありとて死に至るまでその改竄を絶さりき其朋友門人と相會するに當りてや互に切磋砥勵するを以て至樂となす毎夜諸生會集有一長上纔坐定便閑話先生責曰公年已四十讀未通纔坐便說別人事夜來諸公閑話至三更如何如此相聚不同光反照作自己工夫却要閑說歎息久之(百廿一)假令ひ病中にありと

雖も門人の質疑は快よく之を受くその氣象の活潑豪邁なること大凡此の如し是を以て僞學逆黨の名を蒙りて駁擊盛なりしと雖も敢て堅く執りて平生に負かず國家の大事に及べは身を挺して直言至らざるはなし若談の靖康建炎の事に及ぶあれば必ず蹙額して國勢の陵夷を嘆すること之を久ふす且身を律すること極めて嚴にして正少こしも怠容あるなし黃幹の行狀に曰く其色莊其言厲其行舒而恭其坐端而直其間居也未明而起深衣幅巾方履拜於家廟以及先聖退坐書室几案必正書藉器用必整其飲食也羹食行列有定位匙箸舉措有定所倦而休也瞑目端坐休而起也整步徐行中夜而寢既寢而寤則擁衾而坐或至達旦威儀容止之則自少至老祁寒盛暑造次頓沛未嘗有須臾之離と其卒するに際しても猶門人に勸むるに勉學を以てし衣冠を整ふて其命を終へたりとぞ然れども剛健に偏して優美なる風采なしと云ふにあらず若問あれば心を天地の玄妙に遊ばしめて悠悠天を樂むの風あり吳壽昌の曰く先生每觀一水一石一草一木稍清陰處竟日目不瞬飲酒不過兩三行又移一處大醉則跌坐高拱經史子集之餘雖記錄雜說舉帳成誦微醺則吟哦古文氣調清壯某所聞見則先生每愛誦屈原楚騷孔明出師表淵明歸去來辭並杜子美數詩而已

晦庵既に精神を聖賢の大道に委し誓つて斯道の際緒を紹き之を恢廓にせんと欲す是を以て詩文の如き將歴史の如きは之を重んぜず却て無用の長技空く精神を腐敗せしむる者となす曰く近世諸公作詩費工夫要何用元祐時有限事合理會諸公却盡日唱和而已今言詩不必作且道恐分丁爲學工夫然到極處當自知作詩果無益百四十又曰く某自十五六時至二十歲史書都不要看百四然れとも通鑑綱目の大著述ありて後を涑水に繼ぎ義を春秋に尋り詩文も亦鬱然たる一代の大家たるに耻ぢざるなり其材の美豊嘆せざるべけんや

晦庵古を好むこと篤しと雖も世の所謂儒者と異にして空しく堯舜三代の政を夢みる者にあらずその封建を論するや柳子厚の説を賛し且曰く使豪梁之子弟不學面居士民上其爲害豈有涯哉百八その禮樂を論するや曰く古禮實於今難行嘗謂後世有大聖人者作與他整理一番令人甦醒必不一々盡如古人之繁但倣古之大意八十四之を王荆公の周禮に模して新法を行へ若くは方孝孺が井田を實施せしに比すれば果して如何ぞや

その物理学の思想に乏しくして迷信に富みたる如きは是れ彼か國と其時運の然ら

しむる所之を追究せずして可なるべし猶「デカルト」が長命液の發明を企てんと欲し「ニウトン」が智者石を信じたると一般なり

實際世界に於ける晦庵の事業は多く否運に伴はれて志を得ざりと雖も精神的社會に至ては後世永く人の思想を支配して東洋哲學の歴史中大なる位置を有し後昆をして其芳名を景仰せしむる者あり是れ當に余の以下講述すべき所の者たり其編輯註釋及び著述せし者大凡左の如し

書名	卷數	年	齡
謝上蔡語錄	三	三十	闡准若くは出版せし時代
論語要義	未詳	三十四	紹興二十九年
論語訓蒙口義	全	全	隆興元年
困學恐聞編	全	三十五	全
程氏遺書 <small>(三稿全書の 中にある)</small>	廿九 <small>(廿五篇)</small>	三十九	乾道四
家禮	五	四十	五
論孟精義 <small>(後稱要義 又收集義)</small>	三十四	四十三	八

第十一章 朱子の傳

資治通鑑綱目	六十	全	七十二
宋朝名臣言行錄 <small>(李幼武同撰)</small>	七十五	全	全
西銘解義	一	全	全
太極圖解	一	四十四	九
通書解	二	全	全
程氏外書 <small>(二程全書の 中におり)</small>	十 <small>(十二篇)</small>	全	全
伊洛淵源錄 <small>(明楊濂補)</small>	十四	全	全
古今家祭禮	三十	四十五	淳熙元
近思錄 <small>(呂東萊同撰)</small>	十四	四十六	二
論孟集註	廿四	四十八	全
同或問	卅四	全	全
詩集傳	八	全	全
易本義	十二	全	全
中庸輯略	一	五十	十

易學啓蒙	四	五十七	十三
孝經刊誤	一	全	全
陰符經	一	五十八	十四
小學	六	五十八	十四
大學	一	六十	十六
中庸	全	全	全
儀禮通傳經解	三十七	六十七	慶元二
韓文考異	十	六十八	三
書集傳 <small>(蔡沈之 成すを)</small>	六	六十九	四
楚辭集註	四	七十	五
同後語	全	二	全
參同契	全	不詳	不詳
正蒙解	二	不詳	不詳
延平問答 <small>(周本補)</small>	二	不詳	不詳

第十一章 朱子の傳

第十一章 朱子の傳

朱子の文集を編纂せし類

朱文公文集

百廿一

朱子語類大全(宋景清德編)

百四十一日本寛文八年刊

四書朱子本義匯參(清王肯步編)

四十三日本天保七年刊

朱文公集(宋詩鈔内)

一

朱子遺書(年號編者不詳)

九十九

朱子全書(康熙五十二年御)

六十六

朱子經濟文衡類編(乾隆四年)

七十二

朱子書節要(嘉清戊午)

二十

第十二章 朱子の純正哲學

茫々たる宇宙何處より何處に入るか日月彼に麗りて河嶽茲に流時し人生及び萬物皆生をこの兩間に寓して其形を賦す春來れば百花爛熳胡蝶東風に酔ひ夏來れば北窓枕を高ふして清風の故人と共に來るを待つ若夫れ巫峽の猿聲斷腸の思を増し旅雁三行閑人の孤影を慰むる者なきは是れ秋ならずや人は鶴氈を着して行き枯木亦六花を生ずるは是れ冬にあらずや嗚呼數千年前の春夏秋冬は猶今日の如くなるを知らば數千年後の春夏秋冬も亦今日と同じからんか若吾人の聞見する所にして變化運動なかりせば如何なる學術も起らざるべし如何なる觀察も生せざるべし然らば則ちこの現象世界は單に現象世界として成立し得べきか然らずんばその本體と稱する者は如何なる者にして之を統制する者は果して如何なる法律なるか是れ實に、シヨペンハウエルの所謂哲學的動物が盡く焦心苦慮し以てその秘奥を發ばかんと欲したるの問題なり嗚呼宇宙汝は實に最大の、スピノクスと云べけれ

朱子は最大の、スピノクスの本體を説明して曰く太極なり太極とは何ぞや渾然たる圓體見るべからず聞くべからず將摸捉すべからず寂然として動き擾乎として靜

なり之を有といはんか黄泉に求むるも得ず兜率天に探ぐれども得ず之を無といはんか森羅萬象盡くこれに依りて其形を爲さざるはなし故に曰く無極にして太極唯太極と云はんか是れ有に偏するの恐あり故に添ふるに無極を以てす又單に無極と云はんか是れ虚に流るゝの弊あり故に加ふるに太極を以てす是を以て太極にして無極太極無極元と二あるにあらざるなり是の太極や天地あらざるの先に自存自立して敢て一毫の減損なく以て無終に亘る是の太極二個の原動力を有す動靜換言すれば陰陽是なり是に因りて以て理氣の二出づ動即ち積極によりて理生じ靜即ち消極によりて氣發す今理とは何ぞや無形なる者にして事物の事物たる所以運動の運動する所以の道を指さしたる者にして其氣と稱する者は理によりて生じたる所の事物理によりて發したる所の運動をいふ氣は則ち理の結果の如き者にして現象世界に屬し理は氣の源因に似たる者にしてその本體たり天下の者その何たるを問はず皆この二元より成らざる者はなし之を譬ふるに水はその器の方圓に従ふて其形を異にす然れともその形を異にする所以の者は他なし水の流動體なるが故なり理氣の關係猶此の如し然らば即ち二者の發出に當りて何れか先なるか或は同時なる

か曰く同時なり何となれば理ありと雖も氣なくんばその從屬する所なく又氣ありと雖も理なき時は安排するに由なし之を譬ふるに風と波との如し波ありと雖も風なくんば玉を碎き品を散するの美觀を呈すること能はず然れとも風のみあり波なきときは空々器々の聲を聞くのみ曰く天下未_レ有_レ無理之氣亦未_レ有_レ無氣之理語類二理氣の二者その先後定めがたし是を以て陰陽動靜も亦循環極まりなく一端の盡くる所は是れ一端の始まる所にして截然として涇渭の別あるにあらず猶水波の如し如何なる所よりして波なるかまた水なるかは之を決定すべからず然れども今若その先後を定めんと欲して之を暗會するに理は先にして氣は稍後なるに似たり水波元來截然たる區別あるにあらず相俟つて以て其働をなす者なりと雖も水は波の本體たるに似たり水なくんば波起ること能はず理なくんば氣も其用を定むる所なし曰く或問先有理後_レ有_レ氣之說曰不消如此說而今知得會下是先有理後_レ有_レ氣邪後_レ有理先_レ有_レ氣邪皆不可得而推究然以意度之則疑此氣是依傍這理行及此氣之聚則理亦在焉蓋氣則能凝結造作理却無情意無計度只此氣凝聚處理便在其中(語一)又曰く先有簡天理了却_レ有_レ氣氣積爲質而性具焉(全上)理は此の如くにして氣の前にあり是を以て理氣の根

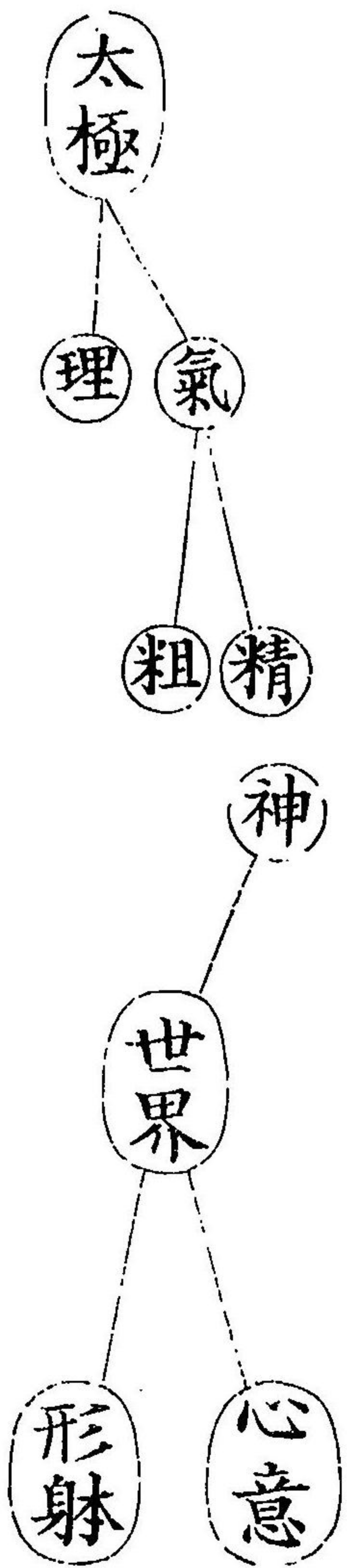
本たる太極も亦、理なり何となれば、理も太極も同性質の者なればなり。曰く太極只是「一箇理字(全上)」又曰く「未有天地之先、畢竟只是理、有此理、便有天地、若無此理、便亦無天地、無人無物、却無該載了、有理、便有氣、流行發育萬物、(全上)」。試みにこの理字を變じて太極となすも、毫も牴觸する所を見ざるにあらずや。

斯太極なる者は、單一なる者なるか、將多數なる者なるか、曰く太極の無數なる猶萬物の無數なるが如し、覆載の間その何たるを問はず、盡く太極を有せざる者なし、然れども各自の太極相分離したる者にあらず、皆全一の者たり、曰く太極只是天地萬物之理、在天地言則天地中有太極、在萬物言則萬物中各有太極(全上)、されば太極は此の點に於ては、「ライプニッツ」の元子アトムの如き者にして、凡べての元子皆宇宙の全體を有すると同じく、萬物盡く皆太極を有す、即ち大世界マクロコスモスと小世界ミクロコスモスと相一致したる者なり、然らば則ち何故に萬物盡く全一ならずして、却て千種萬別なるや、是れ氣の然らしむる所なり、氣に精なる者あり、粗なる者あり、精氣を得たる者は完全となり、高等となり、之に反して粗氣を得たる者は下等となり、不完全となる之を譬ふる、水滴の空中に散ずるが如し、萬滴皆同一の水なり、と雖も或る者は日光に映じて赫々玉と結き、或る者は林陰に遮ぎ

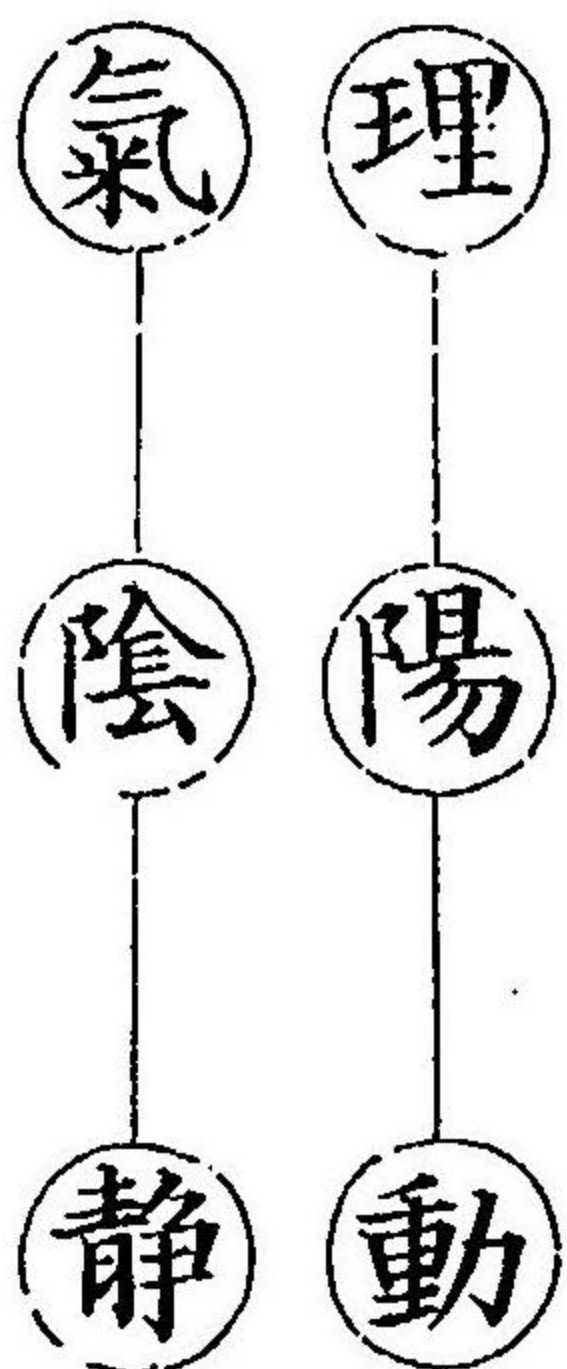
られて黒色となるに止まる、是れ「ライプニッツ」が元子に明白と區別との二屬性ありて、此を得るの多少に従ひ、諸物の差違を生すとすの說に似たり。

以上の理論によりて、朱子の哲學的組織を案ずるに二元論なりと雖も、純粹なる二元論にあらず、何となれば、理氣の二元同一の位置を有するにあらず、氣は理に比すれば、太極の孳枝たる者なり、又分出せし氣につき、更らに精粗ありとなすによれば、二重的二元論にして、「デカルト」の哲學に似たり。「デカルト」は神と世界とを兩立せしめ、更に世界を分つて心意と形體との二となせり、今、兩哲學者の考察を圖すること左の如し。

第二「デカルト」の說



理氣と活動力との關係左の如し



太極の性質を提要する左の如し

第一形以上の者にして絶對的なり自存的なり

第二無始無終にして萬物發生の源因たり

第三有無を兼ね單復を含み動靜を合す

之を要するに朱子は理氣合一説を唱ひたりと雖も其極重きを理に歸したること猶「カント」が唯心論と經驗派とを合一して之を平均せしめんと欲したれとも自家立脚點の傾向は寧ろ唯心論に近きが如し

第十三章 朱子の自然哲學

絶體的の太極自から其活動を起して理氣の二元素を發し萬物これによりて組織せらるゝこと前述の如し是故にこの世界の構造せられたるも亦二力の交互して運動したるに由る

世界の太始や混沌として一の氣體の如きものなりしが分かれて水と火との兩分子となる火は陽によりて動き水は陰によりて靜なり水火既に出で、木金土之に次ぐ之を五行と稱す森羅萬象此の五行よりならざるはなし而して其精を得たる者は人類となると雖も之に反して偏を受くるものは他の動物若くは物體となる既にして火一變して日月星辰の類となりて天空を組織し水の重濁下りて地球を形成す是に於て天地始めて剖判し陰陽茲に位を正ふす曰く天地始初未分時想只有水火二者水之滓脚便成地今登高而望群山皆爲波浪之狀便是水冷如此只不知因甚麼時凝了初間極軟後來後凝得硬間想得如潮水湧起沙相似曰然水之極濁便成地火之極清便成風霆電雷日星之屬(語一)かくの如くにして地球は天中の一物なると猶日月星辰の如し其隕然として動かすしかも敢て陷落せざる所以の者は一に天の運行して一息も休止

せざるに由るなり之を譬ふるに木葉の空中に飄るが如し木葉の空中に在るは風の動搖して之を支ふのか爲なりもし風にして靜止せむか木葉忽ち地に墜下するに至らん曰く天以氣而依地之形地以形而附天之氣天包乎地々特天中之一物爾天以氣而運乎外故地擡在中間隕然不動使天之運有一息停則地陷下語二然らば即ち朱子は天動説を説きたるものなり

而して此の地球は永世不朽に亘りて存在し決して解體せざるものなりと雖も若人類天に戻り道に逆ひて其極に至るときは分散顛滅せられて更に新しきもの構造せられ人類及び萬物再び氣化するに至る此の點甚だ耶蘇教大洪水の説に類すと云ふべし問自開闢以來至今未萬年不知己前年如何曰己前亦須如此一番明白來又問天地會壞否曰不會壞只是相將人無道極了便一齊打合混沌一番人物却盡又重新起問生第一箇人時如何曰以氣化二五之精合而成形釋家謂之化生如今物之化生甚多如虱然語二

動物植物の如き均しく太極の理を有するものなりと雖も其氣を受くるの精粗によりて一は知を有し他は之を有せず動物は多く陽氣を有するを以て天に親しみ之に

反して植物は多く陰氣を稟くるを以て地に屬す動物は植物に比すれば多く精氣を受けたるものなれども人類は更に他の動物よりも一層純粹なる精氣を受けたるものなり是故に人類は天地の中にありて陰陽の正を得其頭の圓なるは天に似其足の方なるは地に象どり其體格や端直なり之に反して禽地は其體格や横にして草木の類は其根本たるもの地中にありて最下にあるべき末の枝葉は反て上にあり是れ皆理氣の比例を失したるものなり曰く如人頭圓象天足方象地平正端直以其受天地之正氣所以識道理有知識物受天地之偏氣所以禽獸橫生草木頭生向下尾却在上語四シヨベンハウエル曰く之を概言すれば知識は意欲ウツクシの命令を聽きて其從屬たることは頭と體との關係に於ても之を見ることが得動物にありては意欲常に知識を支配し人類と雖も其優等なる者にあらずんば知識をして全く意欲の外に在らしむること能はず之を以て人類と動物との區別は知識と意欲との關係の如何にあるが如く頭と體との關係によりても明白なり下等動物は二ツながら不分明にして混沌たりと雖も一般動物は知識を司とる頭部意欲の本たる體に依頼して常に地に向ふ進歩したる動物に至りても此の關係人類の如くならず人類の頭部は全く體の最上部にあり

て獨立し體は只之を運ふに供せらるゝの觀あり云々世界論第三卷三十三章其着眼の奇なる兩哲學者の言相類すと云ふ可し

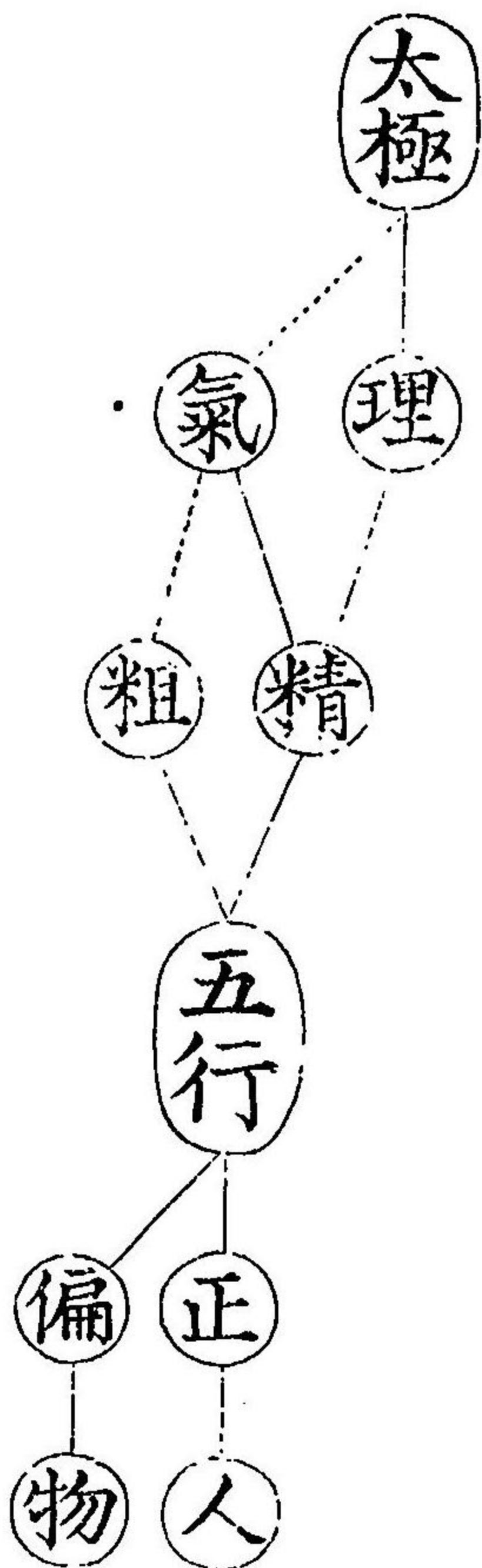
太極と萬物とは其氣異なりと雖も其理に至りては盡く同一なり何を以て之を證するか夫れ太極は萬化の源にして萬物蘊釀の根なり常に生意あるを以て事物を生せんことを助む若太極にして生意なくんば萬物何を以て發生することを得んや是故に此の太極を受けたる萬物も亦其氣の精粗によりて多少の生意あらざるはなし植物の如きすらも其皮を破りて芽を萌さんと欲するに非ずや曰く動物有知植物無知何也曰動物有血氣故能知植物不可言知然一般生意亦可嘿見若戕賊之便枯瘁不復悅慄亦似有知者菅觀一般花樹朝日照耀之時欣々向榮有這生意皮包不住自進出來若枯枝老葉便覺憔悴蓋氣行已過也問此必見得仁意否曰只看戕賊之便彫瘁亦是義底意思因舉康節云植物向下本乎地者親下故濁動物向上本乎天者親上故清獼猴之類能如人立故特靈怪如鳥獸頭多橫生故有知無知相半語四其太極を以て常に物を發生せんと欲するものとなし萬物を以て生意ある者となすは頗るシヨツペンハウエルが世界を以て意欲の發現にして如何なる者も之を有せざるはなしとするの説に近し

之を要するに朱子の宇宙論は支那古來よりありたるものにして列子も既に清輕者上爲天濁重者下爲地沖和氣者爲人故天地含精萬物化生天瑞篇第一と云へり其他希臘にも印度にも我國にも苟くも少許たりとも哲學的思想ある所には皆之に類似したる思想なきはなし

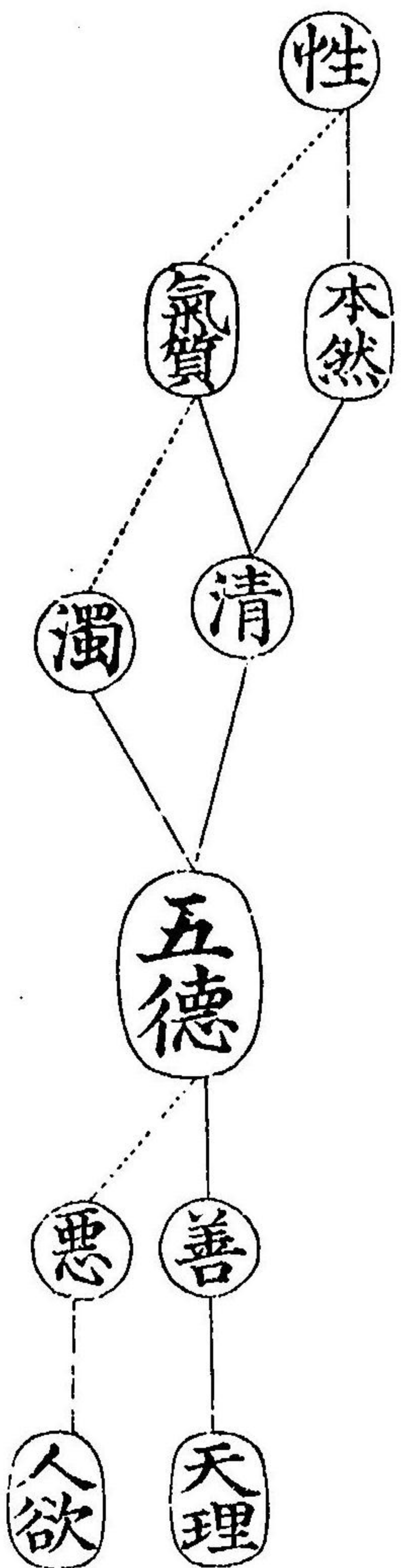
第十四章 朱子の心理學及び倫理學

前述の如く萬物は各自の太極を有して水火木金土の氣を儲へ而して人類は其最も精を得たる者なるを以て萬物の靈たることを得、是の精を稱して性といふ。是を以て性は即ち理にして太極と全一なり。蓋し朱子は太極より理氣分出して而して理は太極と全一なるが如く氣に精粗あれども其の精なる者は即ち亦理と均しきこと。猶理の太極に於けるに似たりとなす。是故に人性水火木金土の氣を有すれども其精なるが故に太極即ち理と合一するを妨げざるなり。人性は是の五氣に隨つて五徳を得、仁義禮智信是れなり。然れども太極に理氣ある如く性にも亦本然と氣質との兩性ありて本然は理によりて發し氣質は氣によりて生ず而して氣に精粗あるが如く氣質之性にも亦善惡あり人性同くして而して賢愚肖不肖等の差別あるは皆是の氣質之性の然らしむる所なり。蔡季通に答ふる書に曰く人之有生、性與氣合而已。然即其已合而折言之則性主於理而無形、氣主於形而有質。以其主理而無形故、公而無不善。以其主形而有質故、私而不善。以其公而善也故、其發皆天理之所行。以其私而或不善也故、其發皆人欲之所作。此舜之戒禹、所以有人心道心之別。蓋自其根本而已。然非爲氣之所爲有過不及、而

後流於人欲也(文集四十四)今朱子の大世界と小世界との一致を圖すること左の如し
第一大世界(宇宙)



第二小世界(自己)



故に曰く人物之生、天賦之以此理、未嘗不同、但人物之稟受、自有異耳、如一江水、備將杓去取、只得一杓、將碗去取、只得一碗、至一桶一缸、各自隨器量不全、故理亦隨以異、(語四)是によれば朱子の理と稱する者は、ブラレーの理の如き者にして、理は元來完全無缺なれども現象世界に入りて氣に従ふに當りてや必ず異ならざるを得ず、理は平等にして何物にも支配せられざる者なりと雖も、氣は差別にして必然の法則に従ふ人類は是の二方面を有する者なりと此の點に於ては大に、カント及びシヨペンハッエル等が本體と現象とを立て、必然と自山との關係を明らかにせんと欲したるの説に似たり。斯本然之性と稱する者は渾然として裏に條理を含みたる者にして、若條理を含まずんば事物に處するに道なく亦渾然たらずんば分散して統紀なきに至る曰く天理既渾然、既謂之理、則是箇有條理底名字、答何叔京書文集四十一、而して氣質之性と云ふ者は本然之性の發したる者にして、情即ち是れなり才とはこの情をやる所の力を云ふ者なり、心とはこの性この情この才等を統轄して身を主とする者をいふ、假りに之を譬ふるに本然之性は機關の構造既に成功し何時たりとも航海し得べき船の如し、氣質之性とは其機關將に運轉せられんとするの時にして既に運轉を爲すときは則ち情

なり而して其機關を運轉せしむる所の蒸氣力は是れ才なり、其船の路を一定する所の船長は恰かも心の如し、故に曰く心譬水也、性水之理也、性所以立乎水之靜、情所以行乎水之動、欲則水之流而至於濫也、才者水之氣力所以能流者、然其流有急有緩、則是才不(同也、語五)

本然氣質兩性の辨大凡前述の如し、本然は未發にして天理に屬す、是を以て至善純一なりと雖も、已發の氣質に至りては善惡の區別あるを免かれず、猶、全一の水と雖も之を赤色の碗に注げば赤色となり、青色の器に盛れば又變じて青色となるが如し、何となれば是時に當りては外物と關係を生じたればなり、然れども外物に當りてその正を得れば是れ則ち中にして之に反するときは欲なり、故に中は氣質の清を得たる者なるを以て本然の性と均きことを得、是故に人たる者其氣質之性を脱して人欲を離れ、以て本然之性に復し、天理を全ふすべし、之をなさんと欲せば精神を靜にして心を外誘に絶つに若くはなし、之を稱して敬といふ人は、斯敬を守りて日夜怠らざる、ときはその極聖域に入ることを得、斯敬は實に上聖以來の修身上の第一義にして、百行萬言皆、これに本づかざるはなし、曰く、如今聖賢千言萬語、大事小事、莫不本於敬、收拾得自

家精神在此語十二又曰く因歎敬字工夫之妙聖學之所以成始成終者由此全上
是を以て聖人の心は明鏡の如く虚靈不昧内外透徹動靜合一す何となれば外物の之
を蔽ふものなくして純然たる本然之性を有すればなり蓋し人の本來の性は靜にし
て動も素より性なりと雖も若その先後を立つときは靜にして然る後動なりと云は
ざるべからず是故に敬を守るときはその本來の性を失なはざることを得是れ朱子
が純正哲學の原理より繙釋し來りたる者なり故に曰く惟聖人無人欲之私而全乎天
理是以其動也靜之理未嘗亡其靜也動之機未曾息中略然而必曰主靜者蓋以其相資之
勢言之則動有資於靜而靜無資於動如乾不專一則不能直遂坤不禽聚則不能發散龍蛇
不蟄則無以奮尺蠖不屈則無以伸而天理之必然也文集四十二答胡廣仲書而して斯敬
に二種あり曰く活敬曰く死敬死敬は是禪家座禪の類にして何の依憑する所もなく
懸空にたゞ精神を靜にするの謂にして活敬は常に其心の散逸を防ぎ一旦の緩急に
應じて其宜しきを得んと欲するを云ふ蓋し吾人既に五官あり其事物に交接するこ
とこれ免るべからず豈只寂然として鬱塞するを得べけんや廖子晦に答ふる書に
曰く方其無事而存主不懈者固敬也及其應物而酬酢不亂者亦敬也故曰毋不敬儼如思

(文集四十五又曰く觀二先生(兩程子)之論心術不曰存心而曰主敬其論主敬不曰虚靜(文
集十四答何叔京書)

朱子の懐抱せる倫理及び心理の學說大凡前述の如し以下少しく之れを批評せんと
欲す

第一朱子以爲へらく太極に理氣の二元ある故性にも亦本然氣質の兩性ありと今夫
れ理と氣とは是れ相離るべからざることとは氣質と本然との互に獨立すべからざる
に同じ然るに聖人はこの氣質を脱して以て本然を全ふすと云ふは畢竟不可能的の
事なるべし何となれば天下の物盡く理氣を以て成る如く人性と雖も是の兩分なき
者あらず理ありて始めて氣あり氣ありて始めて理ありとすれば亦氣質あるときは
必ず本然なかるべからず本然獨り存じて氣質滅すといふこと豈是れあるべけんや
故に萬物解體せずんば理獨り存せず人類死せずんば本然獨立すること能はざるべ
し故に是れ聖人と雖も能はざることといふべし

第二朱子は本然は善にして氣質は善或は不善を兼ね敢て一定すべからざること
を言へり然るに何故に本然之性即ち人性を以て至善純一なる者となせしか其氣質と

稱する所の者も亦、是れ性中の一物にあらずや無、有を生ずべからずとせば、何故に善の性にして不善の性を生ずるか朱子の説によれば、人性至純潔白なりと雖も、僅に動くときは則ち氣質之性生じて物欲の掩蔽する所となり、遂に不善に陥るに至ると然れとも、其物欲の爲に蔽はるゝは是れ亦、その性中これに應ずる者あることを證するにあらずや之を譬ふるに白紙に墨を點するが如し、其白を變じて黒からしむるは外より來りたる墨の所爲なりと雖も、苟も紙にしてこれに染着するの性質なくんば如何ぞ墨之を變ずることを得んや

抑、宋儒常に性善説を主張し以爲へらく上古の聖賢より既に之を説きし者なりとなすと雖も、其實決して然るにあらず上代人民思想の簡にして粗なる豈かゝる精密なる心理的觀察をなさんや、書經の湯誥の惟皇上帝降衷于下民、若有恆性克綏其猷、惟后の如き詩の蒸民の天生蒸民有物有則、民之秉彝好是懿徳の如き易の繫辭の一陰一陽之閒道、繼之者善也成之者性也の如き皆、已發の點につきて形迹あるものを云ふたる者にして之を要するに性とは生なりの言最も上代の思想に近し、宋儒理氣論を唱出せしより遂に性にも亦、本然氣質あることを主張し孔子の性相近は是れ氣質の性に

して孟子の性善は是れ本然なりとなす後世より之を觀るときは或は然るべしと雖も當時豈必ず是の如き意を以て之を言ひし者ならんや

夫れ宋儒の性善を唱ふや太極を以て理となせしによる太極の理たる所以何くにあるか思ふに現象世界の秩序意匠法則皆、確然として秋毫も亂れざるを見て遂に之を轉する所の最大なる完全の物體なかるべからざることを推論したるによるなるべし而して人性は前述の如く亦、此の太極と全一なるを以て遂に之を善となすに至れり然れども理と善とは自から別ならざるべからず五穀豐盛天氣和暢なるも理の然らしむる所なりと雖も烈風暴雨降りて收穫を害するも亦、其理なり性も亦、人を愛し己を修むる所の傾向なきにあらずと雖も時として或は邪惡をなして快樂を感ずることあるなり之を要するに水の形は其器によりて定まり性の善惡は事業思慮に發して始めてその如何を決することを得程明道のみ稍、性善説の不可なるを知るに似たり(第八章參看)朱子も亦、多少之を解するに苦みて曰く人生而靜、是未發時以上、即是人物未生之時、不可謂性、才謂之性、即是人生以後、此理墮在形氣之中、不全是性之本體矣、然其本體又未嘗外之、要之人即之而見、得其不雜於此者耳、易太傳言繼善是指未生之前、

孟子言性善是指已生之後、雖曰已生、然其本體初不相雜也、(文集六十答嚴時書又曰、識說性時、便有此氣質在裡、若無氣質、則這性亦無安頓處、所以繼之者、只說得善到成之者、便是性、(語四)蓋し疑似して決せざる所あるに似たり、宋儒は人心の心理的説明に於て一步を進めたること、疑なしと雖も必ずしも孔孟と合せんことをつとめて遂に撞着と牽強とに陥るに至れり

第三朱子は人心を以て理と情とのことなし情は賤むべき者にして善惡一定せず理は至善なるを以て之に従ふべしと即ち氣質之性を脱して本然之性に復すべしとなす如此ことは東西の學者の多少唱ふる所の者なれども之を事實に徴するに人間は情を滅して獨り理を有すべきにあらず且理と情とは相分離して以て其用をなす者にあらずして寧ろ理中情あり情中理ある者たり其間判然たる區別あるにあらざるなり

是の復性の點に於ても宋儒は上古より以來性情の區別ありて聖人皆其性理に復し其情を棄てんこと勉めたるかの如く論せりその論據とする所は樂記の人生而靜、天之性也、感於物而動、性之欲也、物至知知、然後好惡形焉、好惡無節於內、知誘於外、不能反躬

天理滅矣、夫物之感人無究、而人之好惡無節、則是物至而人化物也、人化物也者、滅天理而究人欲者也、と及び大禹謨の人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執其中、といふ兩點にあり然れとも大禹謨の偽書たること今日既に定論あり、閻若麟の古文尙書疏證最も明らかに之を辨じ曰く荀子此篇荀子の解蔽篇に道經の文なりとて引證し曰く人心惟危、道心惟微の八字あり前又有精於道危於道之語、遂隱括爲四字、續以論語允執其中、以成十六字、僞古文蓋如此、初非其造語精密如此也、とまた樂記と稱する者も後世の作なればこれによりて上古より性情の區別ありといふこと信すべからず孟子も亦乃若其情則可以爲善矣、乃所謂善也、といへ格別情と稱する者を賤まざるなり然るに董仲舒の頃より性を尊び情を賤むの説生じたりとみへ曰く天之大經、一陰一陽、人之大經、一情一性、性本於陽、情生於陰、陰氣爲陽氣仁、と其後唐に至りて李翱復性書三篇を著はして吾人は情の掩はるゝ所となるを以て性に復さざるべからざることを論じて曰く人之所以爲聖人者性也、人所以感其性者情也、喜怒哀樂哀惡欲、七者皆情之所爲也、情昏性斯匿矣、非性之過也、七者循環而交來、故不能免也、と宋代に至り周子は無欲を主張し張子は天然氣質の兩性をいへ程朱は本然氣質の兩性をいへ皆頗る情を賤みて性を

貴ひたり之を孔孟時代の倫理に比すれば大に嚴肅主義リッソリズムに傾きたりといふべし然れとも其極遂に隱遁主義インダクティズムに陥るの弊あるを免れず善い哉袁子才の曰く夫水火性也其波流光焰則情也人能沃其流而揚其光其有益於水火也大矣若夫汚而爲泥沙穢而爲烟藪此後起者累之所謂習相遠也于情何尤哉（小倉山房文二十三書復性書後）

此の章を終るに臨み吾人は朱子が政治主義を一言せんと欲す然れども朱子の政治原論と云ふべき者は甚だ僅少にして且又觀るに足る者なし只吾人の知れる所は彼が天下を經綸せんと欲するには先づ君心の非を格して以てこれを正道に導びかしまむることを其大基礎とせる事なり是故にその最初の上書（隆興元年）に於て孝宗皇帝に勸むるに大學の道即ち格物究理の學を以てし後江西の刑獄を提點するに當りて奏するに正心誠意の論を以てす人或はその陳腐にして人主を聳動するに足らざるを云ふ者あり答へて曰く吾平生學ぶ所惟此の四字のみ豈隱嘿して我君を給くべけんやと又曰く天下事有大根本有小根本正君心是大本其餘萬事各有一根本（語類一百八）朱子の倫理の孔孟時代に比して稍嚴肅に傾きし如くその政治上の主義も亦敢て寛和を主とせざるなり素より孔孟の政治主義と雖も敢て盡く寛和のみを以て經綸を

行はんと欲するにあらざれども之を要するに刑名學派の信賞必罰論と其趣く所を異にする者あり是故に蘇東坡は之を刑賞忠孝之至論に論じて曰く當堯之時皐陶爲士將殺人皐陶曰殺之三堯曰宥之三故天下畏皐陶執法之堅而樂堯用刑之寬四岳曰鯀可用堯曰不可鯀方命圯族既而曰試之何堯之不聽皐陶之殺人而從四岳之川鯀也然則聖人之意蓋亦可見矣書曰罪疑惟輕功疑惟重與其殺不辜寧失不經と然るに朱子は稍刑罰を以て民を威し然る後之を治めざるべからずと以爲へらく須らく嚴以て體となし之を濟ふに寛を以てすべし今人徒に寛の空名に戀着して罪ある者も之を罰せずして以て善事を爲したりとなすは是れ加害者を憐んで被害者を顧みざる者といふべし故に曰く號令既明刑罰亦不可施苟不用刑罰則號令徒掛牆壁爾與其不遵以梗我曷若懲其一以戒百與覈實檢察於其後曷若嚴其始而使之無犯做大事豈可以小不忍爲心（語類一百八）蓋し朱子か是の如き意見を抱きしは時勢の然らしめたる所なるべきか

第十五章 朱子の宗教論

支那人は古來より天を神となし且亦諸々の神を祭りしが思想愈發達するに従ひて人格的天變じて益高尚なる者となり遂に宋儒に至りては理を以て神となす張橫渠曰く鬼神者二氣之良能也聖者至誠得天之謂神者大虛妙應之目凡天地法象皆神化之糟粕爾(正義)大和益神とは即ち陰陽動靜屈伸の理を云ふ者にして宇宙の森羅萬象は盡く神の迹なり何となれば彼等は皆陰陽屈伸靜動によりて生せられたる者なればなり程明道は曰く詩書中凡有一箇主宰的意志皆言帝有一箇包涵偏覆的意志則言天有一箇公共無私的意志即言王(三程全書)鬼神の存在を信じたる者の如し即ち萬有神教に傾きて稍高尚なる思想なり

然れども朱子は張程二子に反して頗る異なりたる考察を有せり以爲へらく鬼神なる者あり其體は氣なり而して鬼と神とは自から別なり鬼とは陰陽兩氣の屈したる者にして神とは其伸びたる者をいふ曰く神伸也鬼屈也如風雨電雷初發時神也及至風止雨過電住雷息則鬼也(語三)而して鬼神に善なる者あり惡なる者あり雨風露雷日月晝夜此鬼神之迹也此是白日公平正直之鬼神若所謂有嘯于梁觸于胸此則所謂不正

邪暗或有或無或去或來或聚或散(全上)されば則ち朱子の鬼神と稱する者は太極より分出したる氣の變化と云ふ者にして氣に精粗あるが如く鬼にも亦善惡あり氣は一
定せざる者故鬼神も亦確乎たる者にあらず有と云はんが有にあらず無と云はんが無にあらず只人心に感ずるときは則ち現れ然らざるときは生せざるなり曰く有若是無時古人不如是是求七日戒三日齋或求諸陽或求諸陰(語三)故に有神論にも無神論にもあらず且假令ひ神ありとするも宇宙を支配するといふ如き有力なる者にあらず何となれば萬物は太極の創造したる者なり而して太極は猶印度僧侶派の自性の如き者にして鬼神の如きも亦太極より出づ何となれば鬼神は氣の屈伸にして氣は太極より分出せられたる者なればなり曰く天地之心亦靈否還是漠然無爲曰天地之心不可道是不靈但不如人恁地思慮伊川曰天地無心而成化聖人有心而無爲(語一)又曰く蒼々之謂天運動周流不已便是那箇而今說有箇人在那裏批判罪惡固不可說道全無主之者又不可這裏要人見得(語一)此の心若くは主と稱する者皆太極を指さしたるに似たり以上朱子が鬼神に關する説の概略なり

人類の生は性理と氣との合一にして死とは其氣理より離れて解散したるを云ふ

と神と別なるが如く精神にも魄と魂との二稱あり曰く鬼神不過陰陽消長而已亭毒化育風雨晦冥皆是在人則精是魄魄者鬼之盛也氣是魂魂者神之盛也精氣聚而爲物何物而無鬼神(語三)而して氣理より離るゝときは自然に稀薄に趣きて全く消滅に至る然れども若感ずる所あらば直ちに其働きをなす是れ祭祀の起りて靈驗を生ずる所以なり然れども其感ずるや皆類の内に於て是を以て天子は天地を祭り諸侯は境内の名山大川を祭り大夫は門行戸中雷を祭る子孫と先祖とは共に一氣にしてその類を同ふするを以て自然に相感應してその來格を致す問人之死也不知魂魄便散否曰固是散又曰子孫祭祀却有感格者如何曰畢竟子孫是祖先之氣他氣雖散他根却在這裡盡其誠敬則亦呼召得他氣聚在此如水波漾後水非前水後波非前波然却通只是一波子孫之氣與祖宗之氣亦如此語三又曰く鬼神只是氣屈伸來往氣者也天地間無非氣人之氣與天地之氣常相接無間斷人自不見人心才動必達於氣便與這屈伸往來者相通如下篇之類皆是心自有此物只須說個心上事才動必應也同上前述の如く此の氣は消滅するものなる故之を防がんが爲に鬼神を祭るに生物を用ふ曰く大抵鬼神用生物祭者皆假此生氣爲靈古人鑿鐘鑿龜皆此意同上朱子の心靈に關したる説の大要なり

氣は聚散ありと雖も性は萬古不變なり人の死は單に氣の散じたるに過ぎずして其性(理)に至りては太極と合體す猶(プラト)の理より各自の精神の出て更に死後理に復歸すると云ふ説の如し此の點よりして見るときは朱子は精神不滅を信したる者の如し故に連嵩卿に答ふる書に曰く所謂天地之性即我之性豈有死而遽亡之理此説亦未爲非但不知爲此說者以天地爲主耶以我爲主耶若以天地爲主則此性却自是天地間一箇公共道理更無人物彼此之間死生古今之別雖死而不亡然非有我之得私矣若以我爲主則只是於自己身上認得一箇精神魂魄有知有覺之物即便目爲己性把持作弄到死不肯放棄謂之死而不亡是乃私意之尤者何足與語死生之說性命之理哉(文集四十五)之を要するに朱子の宗教思想は高尚幽玄ならざる者にして往々迷信に類することあり且又朱子も此の如き問題に對しては敢て特にその思考を費さず寧ろ之を第二着に置きたり

第十六章 朱子の學術研究法、教育法及び諸經書に對する意見の概略(附釋老)

第一學術研究法朱子の研究法は伊川に則とりたるを以て續釋法と云はんよりも寧ろ歸納法に傾けり是故に事々物々皆其理を究めて其知を達し小を積みて大に至り卑きより高きに達し遂に一旦豁然として萬物の理に通するにあり若之に反して或は唯懸空に理を悟らんと欲し或は階梯によらずして直に高遠の地に達せんと欲する時は何の得る所もなく剩へ禪學の教外別傳文字不立の弊に陥る汪德功に答ふる書に曰く人之生也固不能無是物矣而不明其物之理則無以順性命之正而處事物之當故必即是物以求之知求其理而不至夫物之極則物之理有未究而吾之知亦未盡故必至其極而後已文集四十四又曰く學者常要視細務莫令心蕩語十三蓋しソクラテスが知識と徳とを一致せしめし如く朱子も知は則ち徳を得るの第一着歩にして果して全く知を得るときは道徳も從つて吾人の得る所となるべしとの説なり余嘗つて論語を讀む子游曰子夏之門人小子當洒掃應對則可矣抑末也本之則無如之何子夏曰噫言游過矣君子之道孰先傳焉就後倦焉譬諸草木區以別矣(子張第十九)朱子は子游の流に

あらずして子夏の風なり故に曰く聖人未嘗言理一多只言分殊語廿七是を以てその讀書法も亦頗る小心謹直を守りて敢て新見を立つるを喜ばず只古人の意を失なはずして熟讀玩味自家の心に決洽せしめんとを期す魏應仲に與へたる書に曰く逐日早起依本點禮記左傳各二百字參以釋文正其音讀儼然端坐各誦百遍訖誦孟子二三十遍熟讀玩味訖看史數板不過五六反復數遍文詞通暢議論精密處誦數過爲佳(中略)思索不通即置小冊子逐日抄記以時省閱云々(文集四十九)後人或は朱子の研究法の後に至りて稍一變し陸象山の如くなりしと云ふものあり或は然らずとするものありて議論紛然決する所あらざれども今暫く其大體につきて論辯するのみ

第二教育法讀者は第十四章の心理學倫理學及び今述べたる學術研究法によりて朱子の教育法の如何を推知することを得ん朱子以爲へらく人性は至善なりと雖も外物の爲に掩蔽せらるるを以て其本性を盡くすこと能はず是故に上古の聖賢庠序學校の教を設けて人を教育し以て氣質の稟受到拘泥することなからしむ人生れて八歳に及べば小學に入りて灑掃應對進退の細禮によりて先づ其心を鍛鍊し胸中をして自然に忠孝信義の分子を涵養せしめ十五歳に及びて更に大學に入り理を究め心

第十六章 朱子の學術研究法、教育法及び諸經書に對する意見の概略 百四

を正ふし己を修め人を治むるの道を受く如此にして卑きより高きに登るは是れ皆人性の自然に率由したる者にして之に反するときは其卑き者は之を記辭詞章に失し高き者は之を虛無寂滅に失すと是を以て朱子は小學及び近思錄を編して以て教育の助となす小學の序に曰く古者小學教人以灑掃應對進退之節愛親敬長隆師親友之道皆所以爲修身齊家治國平天下之本而必使其講而習之於幼稚之時欲其習與知長化與心成而無犷格不勝之患也文集七十八又白鹿洞書院を建て書生を薰陶す其學規に曰く

父子有親 君臣有義 夫婦有別 長幼有序 朋友有信

右五教之目堯舜使契爲司徒敬敷五教卽是也學者學之而已而其所以學之之序亦有五焉其別如左

博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之、

右爲學之序學問思辨四者所以究理也若夫篤行之事則自修身以至處事接物亦各有要其別如左

言忠信、行篤敬、懲忿窒慾、遷善改過、

右修身之要、

正其誼不謀其利、明其道不計其功、

右所事之要、

己所不欲勿施于人、行不有得反求諸己、

右接物之要、

竊觀古昔聖賢所以教人爲學之意莫非使之講明義理以修其身然後推以及人非徒欲其務記覽爲詞章以釣聲名取利祿而已也今人之爲學者既反是矣然聖賢所以教人之法其存乎經有志之士固當熟讀深思而問辨之苟知其理之當然而責其身以必然則夫規矩禁防之具豈待他待設人而後有所持循哉近世於學有規其待學者爲己淺矣而其爲法亦未必古人之意也故今不復以施于此堂而特取凡聖賢所以教人爲學之大綱條列如右而揭之棚間諸君相與講明遵中而責之于身焉則夫思慮云爲之際其所以戒謹而恐懼者必有嚴於彼者矣其有不然而或出於此言之所棄則彼所謂規者必將取之固不得而略也諸君其亦念之哉(文集七十四)

之を讀まば朱子の教育法を知るに足るべし

第十六章 朱子の學術研究法、教育法及び諸經書に對する意見の概略 百六

第三諸經書に對する意見の概略、此の項もと一章の盡くす所にあらざれとも只朱子が諸經に對して如何なる意見を有せしかを摘録するのみ

其一詩、朱子は詩經の大序小序を以て頗る詩の義理を害する者となし就中小序に至りては其甚だしき者となし之を核定するに及びて一切之を削除したり曰く大序亦有未盡、如發乎情止乎禮義又只是說正詩、變風何嘗止乎禮義(語八十)又曰く詩小序全不可信、如何定知是美刺那人(全上)

其二書、朱子書經に於て古文尙書の疑はしきこと及び孔安國の序と稱する所の者も信すべからざることを論じて曰く孔壁所出尙書、如禹謨五子之歌、胤征、秦誓、武成、周命、微子之命、蔡仲之命、君牙等篇皆平易、伏生所傳皆難(語七十八)又曰く書序不是孔安國做、漢文幾枝大葉、今書序細膩、六朝時文字(全上)

其三春秋、朱子以爲へらく春秋の主旨は聖人内外の貴賤を明らかにして王霸の區別を正しふせんと欲するのみ然るに後世一に義例を設け一字を褒貶の間に寓すとするは是れ牽強附會の説なり春秋大旨其可見者、誅亂臣、討賊子、內中國、貴王賤伯而已、未必如先儒所言字々有義也、想孔子當時只是要備二三十年之事故取史文寫在這裏、何嘗

云某事用某法某事用某例邪(語八十三)

其四易、古人淳質文章なきを以て易によりて其理を示す易もと卜筮の爲に設けたる者なれば先づ其象を明らかにせざるべからず近人之を知らずして單に義理を以て之を解せんと欲するは誤れりと是れ朱子が易學啓蒙を著はせし所以なり曰く易本爲卜筮之書、後人以爲止於卜筮、至王弼用老莊解、後人便只以爲理、而不以爲卜筮亦非、中略、今人不看卦爻、而看繫辭、猶不看刑獄、而看刑統之序例也、安能曉、今人須以卜筮之書看之、方得不然、不可看易(語六十六)

其五禮、周禮もとより周公の親著となすべからざるも後世の書たらざることも明らかなり儀禮も亦信するに足る只禮記は深く之を信すべからずその二禮の關係を論じて曰く儀禮是經、禮記是解、儀禮(語八十六)

その他孝經、左傳、公羊、穀梁等に對する評論は繁瑣に渡るを以て之を略しぬ然れども茲に一言すべきことあり即ち儒教に於て經書と稱すべき者の増加したること是れなり抑、宗代以前儒者の經書と稱すべき者は六經に外ならざりしが兩程子に至りて大學、中庸の二書を禮記より抽出して更に加ふるに論語、孟子を以てし朱子に至りて

第十六章 朱子の學術研究法、教育法及び諸經書に對する意見の概略 百八

更に此の四書の章句を正しふし諸註を折衷して四書と云ひ大に之を尊敬して六經と並稱するに至れり而して大學を以て初學徳に入るの門となし論孟を以て學者の志氣を喚發せしめ更に中庸を以て學問の歸結となさしむ曰く某要人先讀大學以定其規模次讀論語以定其根本次讀孟子以觀其發越次讀中庸以求古人之微妙處大學一篇有等級次第總作一所易曉宜先看論語却實但言語數見初看亦難孟子有感發興發人必所中庸亦難讀後方宜讀之語十四是の如くにして四書六經によりて先づ大道を會得し然る後歴史及び諸子百家の書に亘るも害なし然らずんば胸中一定したる秤量尺度なきを以て之を裁制して其正鵠を得難たく往々權變に流れて詐術を尙び或は刑名に陥り或は虛無に流る理明後便讀申韓書亦有得語十二

朱子又釋老に對して諸々批評を試みたりと雖も格別新奇なる者なく且今日より之を觀るときは首緊を失したるの言多し特に釋氏に對して其然るを見るなり是れ獨り朱子のみにあらず儒者全體の有すべき缺點なるべし彼等は佛教を以て儒教の如き入世間の者と全一視してその出世間の教たるをば一切之を顧みざるなり釋氏を以て死生を畏れ人性を滅する者となすは皆空の一面を見て之を駁撃し其空と實と

相兼ねる者あるを知らざるなり朱子以爲らく老氏は空を説き釋氏は無を説きたる者なり空は有無相兼ねたる者なりと雖も無に至りては是れ絶對的の無にして彼の天地萬物の實在を幻火となす者なり恰かも自家日に數千粒の米を食し數千條の糸を着しながら我敢て一粒の米一條の糸に衣食せずと云ふが如し豈誤まらずや吾人の見を以てすれば寧ろ釋氏は空を説き老氏は無を説きたる者となすに若かざるなり且佛教を以て老氏或は揚子より出でたる者となして曰く佛氏之學亦出於揚子語百廿六又曰く佛家始來中國多是偷老子意去做經如說空是也(全上)是れ豈公平なる觀察ならんや佛家の空を説くはその固有の教理にして老子に摸倣したるにはあらざるなり元來釋氏と儒家との別は朱子自身の言ふ如く釋氏只要空聖人只要實(全上)の差にして一は未來を説く所の宗教にして他は現世界に關する學術なればその着眼その理想その起原自から異ならざるを得ず儒者之を知らずして漫に自家の説を以て之を律せんと欲するは其功なくして適に釋氏の不服を招ねくに足る元の劉謚三教平心論を著はして儒佛道三教鼎立の事を云ひ中に宋儒駁佛の非なるを辯せり其言盡く正當と云ふにあらずと雖も亦彼等が意見の一斑を知るべきか故に之を引證

す程明道曰釋氏惟務上達而無下學抑不思釋氏六波羅密皆下學上達之說禪波羅密謂由禪定以到彼岸也禪定則是下學到彼岸則上達矣(中略)謂之無下學可乎朱晦庵曰釋氏自以爲直指人心見性成佛而實不識心性抑不思首楞嚴一經乃心性之選學其言曰前塵虛妄惑汝真性(中略)謂之不識心性可乎(中略)張橫渠曰其過也塵芥六合其蔽於小也夢幻人生抑不思莊子曰四海在天地間猶壘空在大澤中國在海內猶稊米之在大倉非塵介而何白樂天曰昨日屋頭墻災手今朝門外好張羅莫笑賤貧誇富貴共成枯骨兩如何非夢現而何橫渠自不悟此豈可謂悟之者爲非是乎程明道曰釋氏要說去根塵然沒此理要有此理除是死也抑不思大慧禪師曰心意識之障道甚於毒蛇猛虎猛虎尙可迴避心意識無懈迴避所則學道者安可累於根塵哉(中略)明道曰謂釋氏實是愛身放捨不得何不觀五代史曰佛於頭目手足皆以施人則佛不愛身固出於歐陽公之筆也豈獨佛書有是說伊川曰昔之惑人也乘其愚暗今之惑人也因其高明抑不思智者觀於未形愚者暗於成事既曰高明而復謂其惑可乎(中略)至晦庵指其實見之差謂釋氏之學正謂惡此理之充塞無間而使自己不得一席無理之地自安厭此理之流不息而使己不得無理之時以自肆殊不知釋氏非厭惡此理而欲無此理也正以世有二障曰事障曰理障不特事能障吾之心而理亦能障我

之心(圓覺經曰若諸衆生者除事障未除理障但能悟入聲聞緣覺未能顯住菩薩境界正此意也)故學佛者不明此理固無以識心性之真而執滯此理亦未免爲心性之礙是以勉強力行之始固當研究此理從容中道之後則不可執滯此理故曰渡河須用筏到岸不須船不特釋教如此而儒教亦如此只如周文王不大聲不長夏則是除事障也至於不識不知則理障除矣顏氏不遷怒不貳過則是除事障也至於如愚坐忘則理障除矣文王聖人也顏子幾聖也固能不爲理所障若分量未至於聖則只能改過遷善以除事障安能不思不勉以除理障哉晦庵分量未遠到此所以徒執滯此理而謂釋氏不合厭惡此理且指爲實見之差識者觀之則差不在釋氏而在晦庵也(中略)晦庵曰就使其說有實非吾儒之說所及者是乃過乎中正而與不及者無以異晦庵於是始知釋氏之說非儒者所能及也(三教平心論卷下)

第十七章 朱子と陸象山陳同甫及び呂東萊

淳熙二年この歳は是れ朱子が一生の中否寧ろ宋代哲學史中最も記憶すべき時なり。朱子は此の歳に於て始めて陸象山と鷺湖に相會して其學術の異同を辯論せしときにして若例を獨逸文學史に取らんか一千七百六十七年「シルレル」と「ゲーテ」が始めて交際を結びたると同じき事なり（朱子四十六歳にして陸子三十七歳なり）

陸象山は金溪の人にして其兄庸齋、梭山、復齋皆當時有名なる學者なり抑、兩程子の門人中最も傑出せし者は謝上蔡及び楊龜山の兩人にして龜山は溫厚篤實の君子なれども上蔡は英氣人を凌ぎて直ちに事物の眞理を究めんと欲するの人なり此の兩種の學風相傳はりて龜山は朱子に至りて大成し上蔡は象山を得て顯はる象山少年の頃よりして食牛の氣あり曾つて古書を讀み宇宙の二字を解するを看て忽ち曰く宇宙内事乃己分内事、己分内事乃宇宙内事、と又曰く東海有聖人出焉、此心同也、此理同也、西海有聖人出焉、此心同也、此理同也、南海北海有聖人出焉、此心同也、此理同也、千百世之上、有聖人出焉、此心同也、此理同也、千百世之下、有聖人出焉、此心同也、此理同也、と又其詩に曰く仰首攀北斗、翻身依北辰、舉頭天外望、無我這般人、とこれ等の言象山の豪爽雄邁

にして尋常章句の儒にあらず直ちに聖域に入りて洙泗と均く立たんと欲するを知るに足るべし

象山の氣象すでに此の如し之を朱子の小心翼々たる格物究理の學風に比すればその相去ること實に遠し彼は朱學を以て空く文學の末に拘はり區々たる禮義法則の中に其身を屈するは是れ其天資を殘害するに過ぎず學問の道は其外にあらずして其内にあり古人の文字にあらずして精神にありと故に曰く必以形跡觀人、則不足以知人、必以形跡觀人、不足以教人、と朱子は亦象山の専ら心につきて考察するを譏り思へらく學は必ず聖賢の遺意を其書中に求めざるべからず又修身の法必ず小より大に進み洒掃應對より順序を追ふて始めて聖人の域に達することを得象山の説は是れ禪學なり曰く但向上一路、未曾撥轉處、未免使人疑着恐是葱嶺帶來耳、如何如何、一笑（文集卅二卷陸子語）是れ朱陸子爭論の第一點なり

兩哲學者の性行學風の差違あること前述の如きを以て陸子は徳行を尊みて問學を後にし朱子は之に反して問學より徳行に入るべきことを論ず陸子曰く於其端緒、知之不至、悉精畢力求多於未、溝澮皆盈、淵可立待、要之其終本末俱失、夫子曰、知之爲知之、不

知爲不知是知也後世耻一物之不知者亦耻非其耻矣人情物理之變何可勝究文集一與邵叔直書朱子自身も此の傾向あることを認めたり故に項平夫に答ふる書に曰く大低子思以來教人之法以尊德性道問學兩事爲用力之要今子靜所說專是尊德性事而烹平日所論却是問學上多了所以爲彼學者多持守可觀而看得義理全不子細又別設一種杜撰道理遮蓋不肯放下而烹自覺雖於義理上不散亂却於緊要爲己爲人上多不得今當反身用力去短集長庶幾不墮一邊耳文集五十四此の言頗る公平なりと云ふべし是れ朱陸爭論の第二點なり

此の兩哲學者互に各其の説を張りて下らざりしかば當時の學者呂伯恭之を憂へて調停を計かる是れ即ち鵝湖在江西省の會ある所以なり斯行に先だちて象山の兄復齋一詩を賦して象山に告ぐ其詩に曰く孩提知愛長知欽古聖相傳只此心大抵有基方築室未開無跡忽成岑留情傳註翻榛塞着意精微轉陸沈珍重有朋勤琢切須知至樂在於今と既に會するに及びて象山朱子に語るに此の詩を以てし且その和韻なりとて吟じ曰く墟墓興衰宗廟欽斯人千古不磨心涓流積至滄溪水卷石崇成泰華岑易簡工夫終久大支離事業竟浮沈と朱子の色頗る變ず結句の欲知自下升高處眞僞先須辨自今に

至りて最も擇ばざる風ありかくて兩哲學者の辯論數日に及び象山をして堯舜以前は如何なる書を讀むべきかと問はしむる迄に歩を進めたれども到底調和すること能はず伯恭の企望も空く水泡に歸しぬ

然れども朱陸の爭點はこの二點に止らず更に第三點のあるあり太極説につきての議論是れなり朱子濂溪の説を奉じて無極而太極を信じまた易の陰陽を以て形器となせり象山の兄梭山之を争ひ象山に至りては其議論結んで説けず今兩人の文集を按ずるに象山の朱子に與へし書六篇ありて而して朱子の象山に與へし書五篇あり然れども此の事に關せし書翰は各二篇なり且朱子の梭山等に與へて之を論辯せし書數通あり今その大要を序述すること左の如し陸子太極説の必ずしも周子の眞説にあらざるを辨じて曰く太極圖説以無極二字冠首而通書終篇未嘗一及無極字二程言論文字至多亦未嘗一及無極字假令其初實有此圖觀其後來未嘗一及無極字可見其道之進而不自以爲是也象山全集二與朱元晦書且無極と稱する者は全く聖人の書中にあらざるを論じて曰く無極二字出老子知其雄章吾聖人之書所無有也同上朱子之を辯ずらく伏羲作易自一畫以下文王演易自乾元以下皆未嘗言太極也而孔子言之

孔子贊易自太極而下、未嘗言無極、而周子言之、先聖後聖、豈不同條而共貫哉、又曰、程子秘之而不示、疑亦未有能受之者、爾、文集卅一答張敬夫書、陸子また朱子の太極と稱して無極と稱せずんば、後人太極を以て空しく孤立して其用を爲さざる者となすと云ふを駁して曰く、自大傳至今幾年、未聞有錯認太極別爲一物者、設至此、爰嘗不能以三隅反、何足上煩老先生、特地於太極上加無極二字以曉之乎、全集二與朱元晦書、又若果して聖人をして太極の名狀すべからざるを見はすの意ありとなさしむるも無極而太極とは云はざるなり曰く、若謂欲言其無方所無形狀則前書固言宜如詩言上天之載而於其下贊之曰無聲無臭可也、豈以無極字加之太極之上、繁辭言神無方矣、豈可言無神、言易無體矣、豈可言無易、同上、朱子は更にその無極を添へざるべからざる所以と且、又、太傳の有と周子の無と敢て撞着するにあらざるを云ひ曰く、故語道體之至極、則謂之太極、語太極之流行、則謂之道、雖有二名、初無兩體、周子所以謂之無極、正以其無方所無形狀、以爲在無物之前、而未嘗不立於有形之後、以爲陰陽之外、而未嘗不行乎陰陽之中、以爲通貫全體、無乎不在、則又初無聲臭影響之可言也、文集三十六答陸子靜書、又曰く、無極而太極、猶曰莫之爲而爲之、莫之致而至、又如無爲之爲、皆語勢之當然、非別有一物也、同上、象山ま

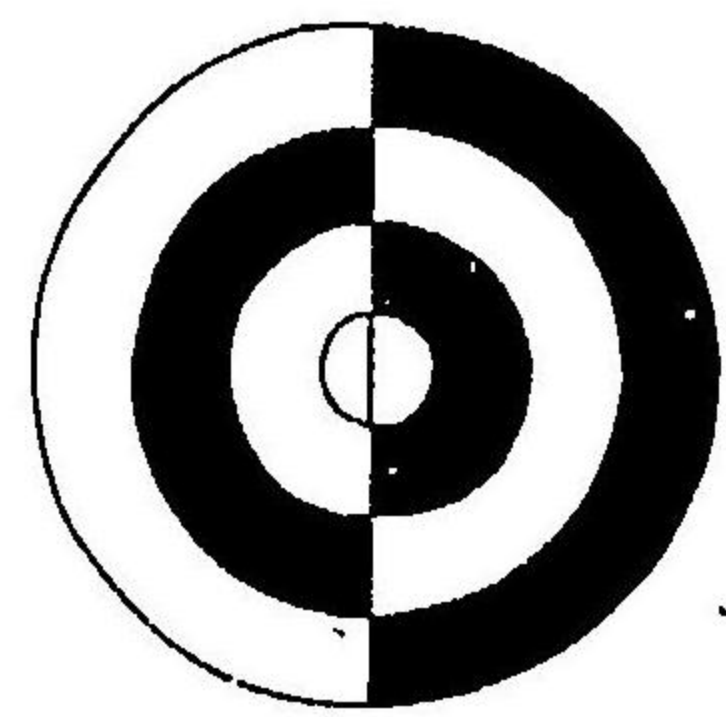
た朱子が陰陽を以て形器となせしを駁して曰く、易道一陰一陽而已、先後始終動靜晦明、上下進退、往來闔闢、盈虛消長、尊卑貴賤、表裏隱顯、向背順逆、存亡得失、出入行藏、何適而非一陰一陽哉、文集二與朱元晦書、朱子は其可なるを主張して曰く、若以陰陽爲形而上者、則形而下者復何物、更請教と、又、陸子は朱子の人心道心を以て本然氣質の兩性に配せしを非なりとなし、朱子はまた陸子の説を以て全く性を解せざる者となせり

かくの如く朱子と陸子とは第一爲學的、第二實際的、第三學理的の諸問題に於て盡く相衝突したりしが、其末流に至りて各弊害を生じ且、兩派の徒互に相譏りて以て自から快となせり、然れども朱陸の兩子の交際は極めて親密にして互に禮讓を以て其論を闘はせしこと明らかなり、特に朱子は濃厚篤實の君子たるを以て、如此反對あるにもかゝはらず、頗る象山を重んず、後彼と共に舟遊せしとき喜ぶこと甚しく曰く、自有宇宙以來、已有此溪山、還有此佳客、否、象山全集三十四曾つて其書院白鹿洞に於て象山を招請し、君子喻於義、小人喻於利の章を講せしめ、大に其説に感じて深く學者隱微の病にあたりし者となす、其講義の略に曰く、此章以義利判君子小人、辭旨曉白、然讀者苟不切己、觀者亦恐未能有益也、九淵平日讀此、不無所感、竊謂學者於此當辨其志、人之所喻、

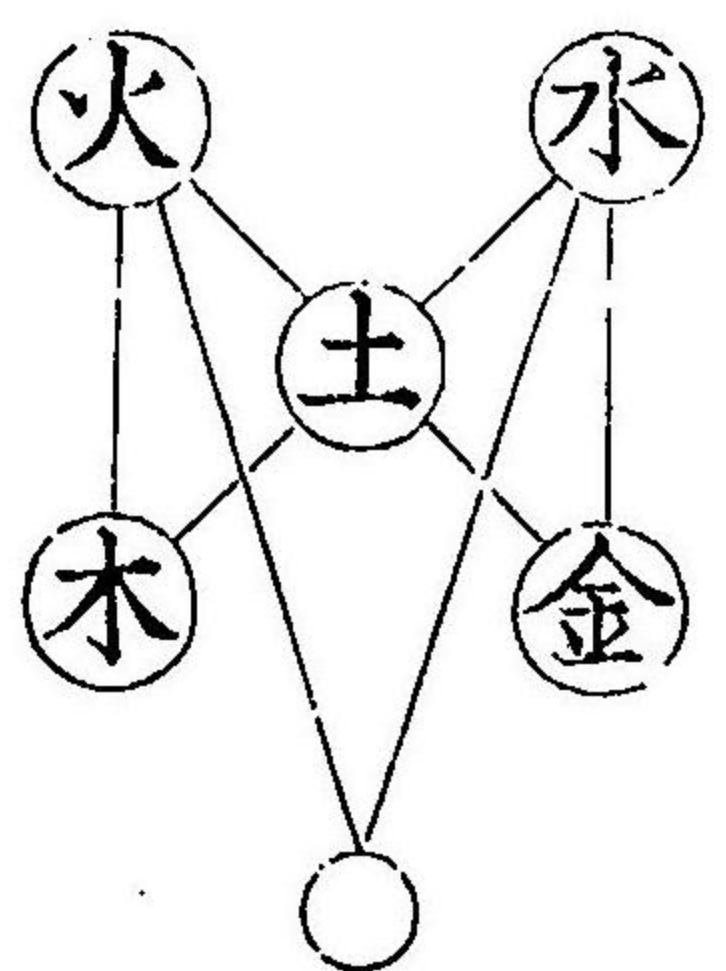
由其所習、所習由其所志、志乎義則所習者必在於義、所習在義斯喻於義矣、志乎利則所習者必在於利、所習在利斯喻於利矣、故學者之志不可不辨也、科舉取士久矣、名儒鉅公皆由此出、今爲士者固不能免此、然場屋之得失、願其技與有司好惡如何耳、非所以爲君子小人之辨也、而今世以此相尙、使汨沒於此而不能自拔、則終日從事者、雖曰聖賢之書、而要其志之所嚮、則有與聖賢相背而馳者矣、推而上之、則又唯官資崇卑、祿廩厚薄是計、豈能悉心力於國事民隱、以無負於任使者哉、(中略)凡至斯堂者、必不殊志、願與諸君子勉之、以毋背其意、と讀者よこの講文を讀まば宋代の經學なる者は如何なる者たるかを知るに足らん、斯一章の如き實に是れ明々白々一の解し難き者なし、然るに堂々たる一代の大學者等之を語ることの深切之を聽くことの丁寧なる大凡かくの如し、彼等は單に文字空理を以て學となさずして之を我身に實踐することを急務となすなり、今世以此相尙云々の言以て當日斯偉人が學者の空く利祿に汲々として道に志さず者なきを慨嘆しこの一章を假りて以て之を警戒せしにあらざるなきを知らんや

今、朱陸爭論の三點を検するに第一爲學的、第二實際的の二は兩者各相俟つて始めて其完全を得る者なること明らかなり、第三點の學理的問題も兩者の意見を比較するに朱子の説複雑にして整齊なる象山の上にと雖も、只此の太極圖を以て上古以來の物となし、周濂溪に至りて其不傳を得し者となすに至りては大に誤れる者にして、近世考證家の説によれば朱子の説の強辯たること拒むべからざる者あるなり、朱子以爲らく太極圖は純然たる濂溪の作にして、陳希夷の如き道士の手に出たる者にあらずとなすも、毛奇齡の考證によれば、陳希夷の其根本を魏伯陽の參同契中の水火匡廓二五至精の兩圖に取り、更に之を參するに他の圖を以てしたる者に過ぎること明らかなり、今、毛氏の太極圖説遺議によりて沿革を録せんと欲す、其一是漢の魏伯陽の參同契の圖その二は唐の道士の作、眞元品の圖その三は即ち宋の紹興年間朱内翰の朝廷に進めし所にて、今、ま世に傳ふる所の太極圖は之を少しく變せしのみ、其沿革を表はすこと左の如し

第十七章 朱子と陸象山陳同甫及び呂東萊
第一魏伯陽の圖

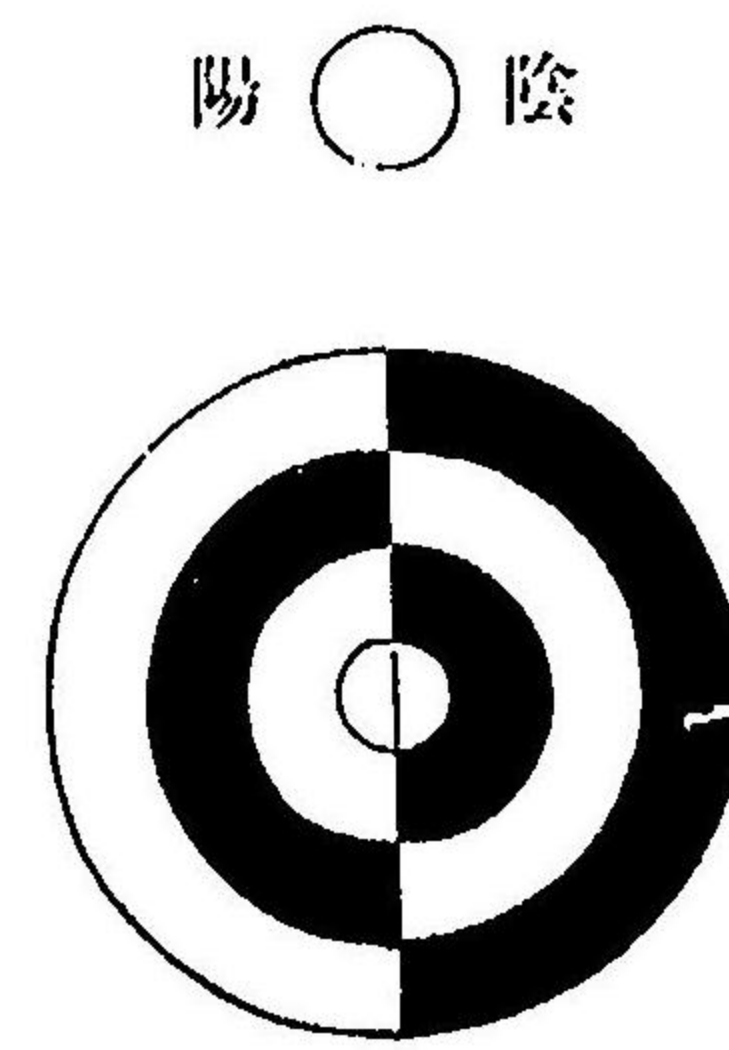


水火匡廓

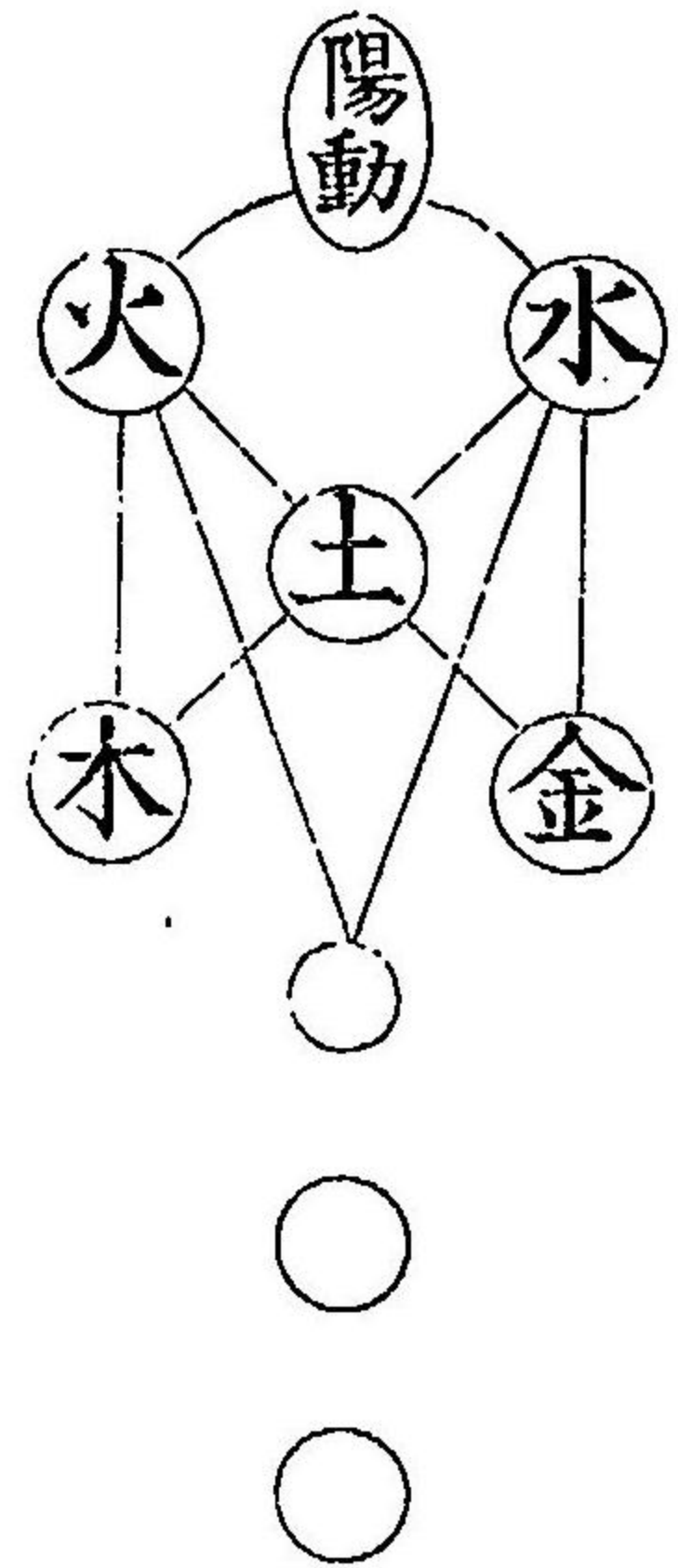


二五至精

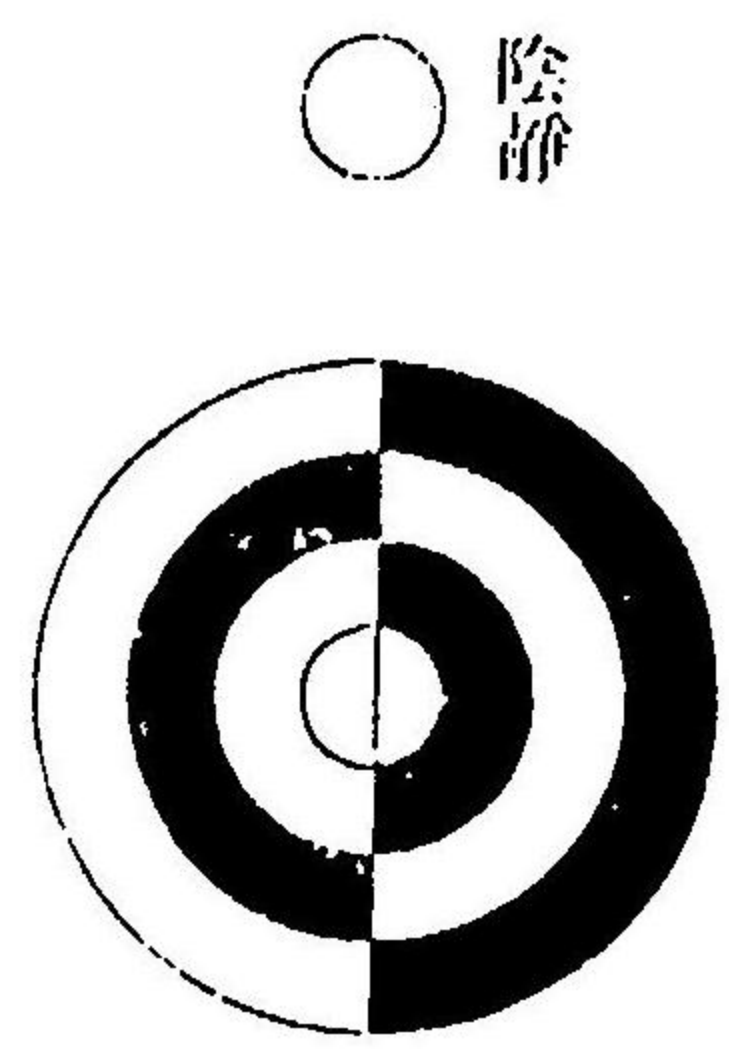
第二真元品の圖



陽 陰

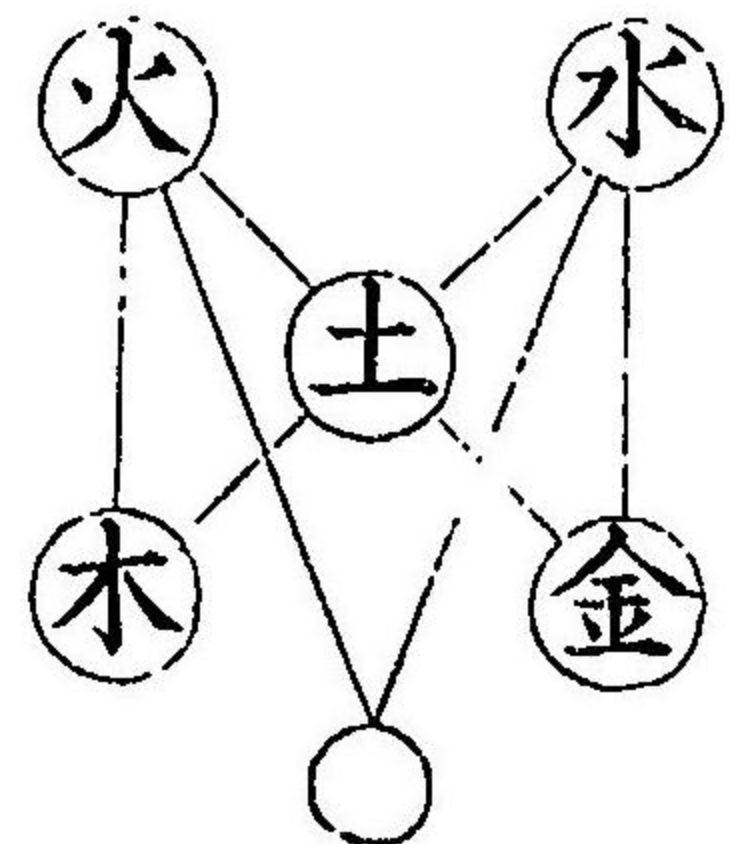


第三周濂溪の作と云ふ者にして朱内翰の進めし圖



陰 靜

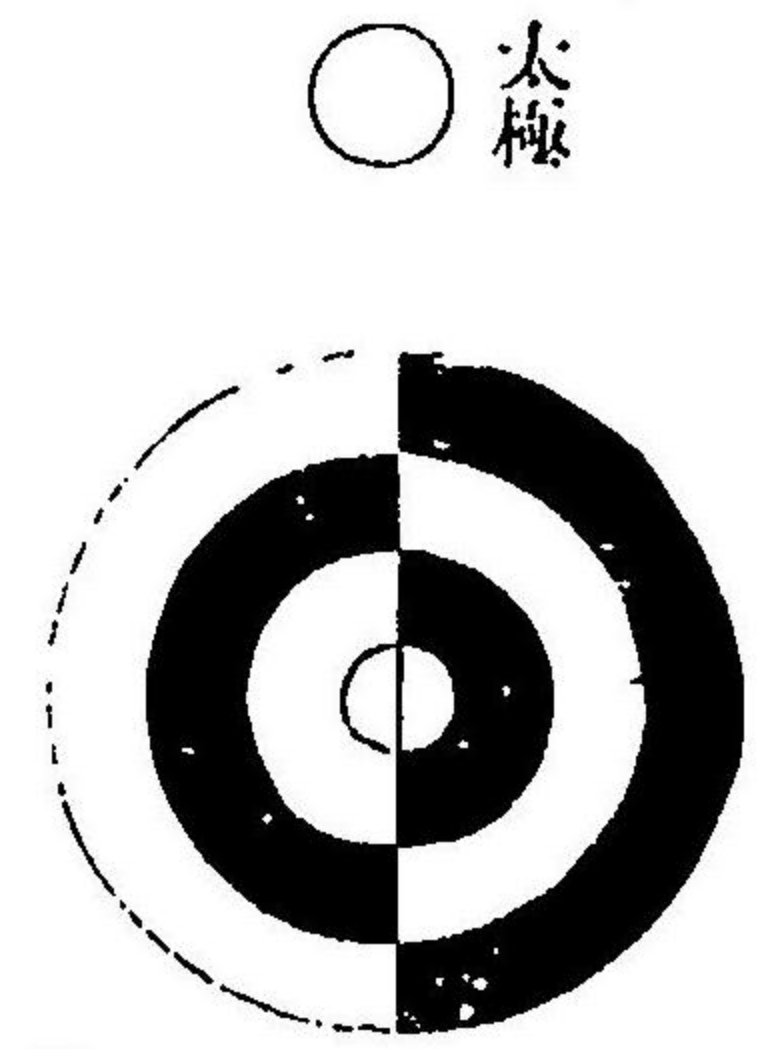
動 陽



乾道成男
坤道成女

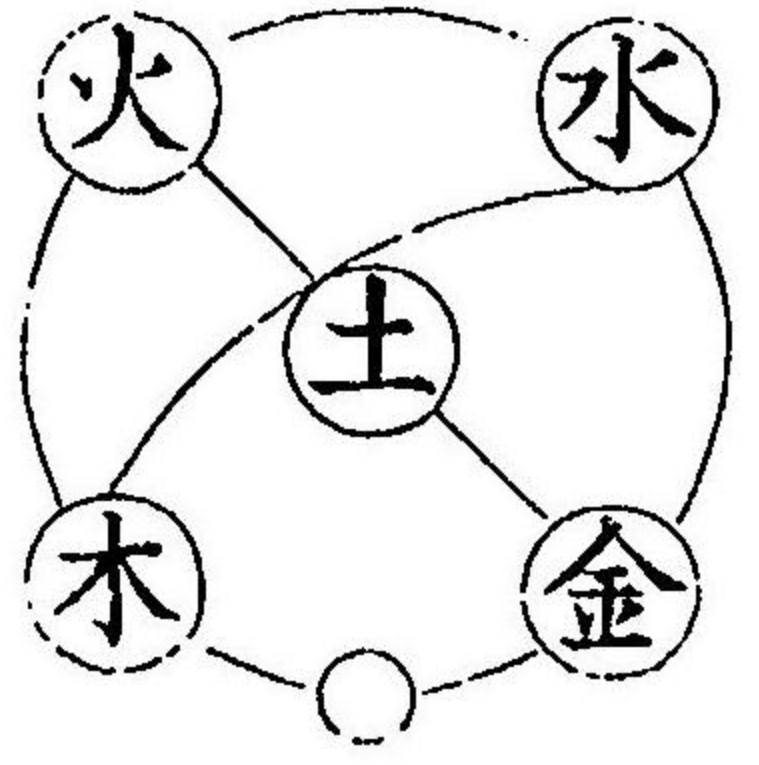
萬物
化生

第四通俗の大極圖



太極

陽動 陰靜



坤道成女
乾道成男

萬物
化生

第十七章 朱子と陸象山陳同甫及び呂東萊

此れ等の考證によれば、謙溪を以て太極圖の作者となすに足らざるを知るべし然れどもその傳來の正しからざるまでにして太極圖説其物は哲學上頗る興味ある者なり

象山と同時にありて朱子に反對せし者を陳亮と云ふ字は同甫龍川と號す永康の人にして世之を浙學派と稱す其氣象卓犖にして實用の才に富み當世儒者の空く空名を貴みて其時を知らざるを嘆じ王霸兩用義理兼行の學を唱ふ以爲へらく世の儒者常に王霸は全く異なる者にして王は天理により霸は人欲を主とする者なり三代以後眞の王なしとなすは大に誤れり漢唐の君と雖も其本領能く天地と並び立つを以て國を開き民を安んずることを得夏殷周三代の如きも全く人欲なしとなさず曰く昔者三皇五帝與一世共安于無事至堯而法度始定爲萬世法程禹啓始以天下爲家而自爲之有扈氏不以爲是也啓大戰而後勝之湯放桀於南巢而爲商武王討紂取之而爲周武庚挾管蔡之隙求復故業諸咎與武王共事者欲修德以待其自定周公違衆舉兵而後勝之夏周商之制度定爲三家雖相因而不盡同也五霸之紛々豈無所因而然哉老莊氏思天下之亂無有已時而歸罪于三王而堯舜僅免耳と朱子之れを駁して曰はく老兄高明剛決

非吝於改過者願以愚言思之細義理双行王霸兼用之說而從事於懲忿窒慾遷善改過之事云々(文集卅八與陳同甫書)同甫亦朱學の流弊は空く事功を棄て、虛理を談じ天下實地の事を知らずして身を社會の外に置き以て自から高ぶることを譏りて曰く爲士以文章行義自名居官以政事書判自顯各務其實而極其所至各有能有不能卒亦不敢強也道德性命之說一興而尋常爛熟無所能解之人自託于其間以端慤靜深爲體以徐行緩語爲用務爲不可究測以蓋其所無一藝一能以爲不足自通于聖人于是天下之士始喪其所有而不知適從爲士者耻言文章行義而曰盡心知性居官者耻言政事書判而曰學道愛人云々(送吳允成序)之を要するに同甫は其見る所史學より入りたるを以て朱子の如き哲學者とは自から異ならざるを得ず一は變化する所の現象世界を重んじ他は永久不變なる本體を觀察する者なれば其説の異なる豈怪むに足らんや

金溪派の如く抽象的議論を唱ふるにもあらず浙學派の如く實際的主義を論じたるにもあらず寧ろ朱子の賛成者とも云ふべき者は則ち東萊呂祖謙なり然れとも朱子と全く相同じと云ふにあらず其異なる所は第一詩經に對する意見第二歴史に對する意見の二點なり

呂東萊讀詩記なる者を著述して小序の依據すべきことを論じ且鄭玄の古註による然るに朱子は斷じて小序を以て詩の本意を害する者となし一切之を削除したり故に呂東萊を論するや曰く人言何休爲公穀忠臣某嘗戲伯恭爲毛鄭之佞臣語類一百廿二又彼に與へたる書によるに曰く大抵小序盡出後人臆度若不脫此窠臼終無緣正當東萊亦史學を好のみ春秋左傳及び馬遷を喜ぶ然るに朱子は之に反して經學を重んじて史學をは之を度外に放棄するの傾向あり且左氏をば痛く之を却ぞけたりその三傳の優劣を評するの言に曰く左氏見識甚卑如言趙盾弑君之事却云孔子聞之曰惜哉越境乃免如此則專是回避占便宜去得計聖人豈有是意公羊說得宏大如君子大居正之類穀梁雖精細但有些鄒搜狹窄語類八十三且又馬遷を以て黃老を崇尙して六經を黜くとなせり是故に東萊を評して曰く伯恭於史分外子細於經却不甚理會語類一百廿二此の他朱子の言によるに少こしく攻學の方法につきても異なりたる者の如し或問東萊謂變化氣質方可言學曰此意甚善但如鄒意則以爲學乃能變化氣質語類一百二十三然れども之を要するに朱子に反對すると決して陸象山陳同甫の如き者にあらず朱子も又之を尊敬して同臭味の益友となせしと張南軒の如し是故に其死する

や之を哭して曰く我實無似只辱與遊講席深切情誼綢繆前日之枉書尙粲然其手筆始言沈疴之難除猶幸死期之未即中語簡編之次第卒誇草樹之深幽謂昔騰騰而有約蓋今命忽以來遊欣此旨之可懷懷計車而偕至考日月之幾何不且暮之三四嗚呼伯恭而遽死耶吾道之衰乃至此耶と近思錄の如きは同じく編せし所なり朱子と同時にありて互に辨難攻撃せし者は實に以上の三子にして就中象山は其最も尤なる者たること疑を容るべからざる者なり

第十八章 宋代儒學の批評

吾人は前數章に於て宋代儒學の重要な學說を略述しその如何に變遷せるかを明らかにせり今之を概括して批評すること左の如し

明道曰く天地萬物之理無獨必有對、と實に宋代哲學の組織は二元論なり彼等は太極を立つと雖も太極分かれて兩儀となることを論じ敢て太極その物が直に或は陰となり或は陽となることを言はざるなり朱子の如きは是の二元論を巧みに應用せんと欲しその純正哲學を始として倫理心理及び鬼神に至るまで盡く對ありて獨なきことを論ずるに至れり是の故に其極遂に兩儀の關係の不明を生じて往々彼の理論中撞着を生せしむるに至れり猶、アリストートルが二元を立て、遂に曖昧なる論法に陥りたるが如し、アリストートルの形式は宋儒の理にして物體と稱する者は氣に似たる者なり是れ實に宋學の長所にして又、其過失ある點なりと云はざるべからず宋儒の研究法は之を前代に比するに大に整齊にして統紀あるを覺ゆ彼等は一方に於て太極論を唱へ一方に於て格物究理の重んずべきを説き總合分析兩つながら之を兼用したり然れどもその結局を言は、寧ろ分拆に偏して總合を輕んじ歸納法を

取りて續釋法を取らざる者と云ふべし伊川の曰く究理亦多端、或讀書講明義理、或論古今人物、別其是非、或應接事物而處其當然、皆究理也、或問格物須物々格之、還是格一物而萬物皆知、曰、怎生便會該通、若只格一件便通衆理、雖顏子亦不能如此道、須今日格一件明日格一件、積習既多、然後脫然有貫通所、と朱子が此の研究法を重んずること既に第十六章に於て之を述べたりこの研究法たるや着實にして誤謬少なしと雖も其弊や概括する所なくして動もすれば散漫の譏を蒙るに至る是れ當時陸象山等の反對せし所以なり

支那人全體の思想が宗教に熱心ならざるが如く宋儒も亦神等に關して格別之を研究せず寧ろ無神論とも云ふべき者なり是を以て萬物の本體を太極として萬物皆是れより器械的法則によりて分出することを論じたりと雖も結局的問題の如きは之を不問に付し、只天即ち理(太極)の意匠は萬物發生を欲すと云ふに過ぎざるのみ蓋し儒教一般の傾向専ら人生に偏したるが故なるべし

以下宋儒が以前の哲學に比して進歩せし點を述べんと欲す

第一宋代以前の儒教哲學は専ら有の一邊に偏したりしが宋儒に至りて老佛の哲學

を參照して之に加ふるに無を以てし無極而太極と唱へたり朱子曰く不言無極則太極同於一物而不足爲萬化之根不言太極則無極淪於空寂而不能爲萬化之根(文集卅六答陸子美)即ち有にして有ならず無にして無ならず有無畢竟一にして二、二にして一なり

第二宋儒はまた實體と現象とを分別せり理氣體用即ち是れなり彼等は氣を以て形而下となし理を以て形而上となす一は變化して差別ある理象なりと雖も他は平等にして不變なる實體なり猶「カント」等が「メーメナ」と「フーノメナ」とを論じたるが如し吾人の耳目に觸る所の者は只其氣の變化消長に過ぎず其理に至ては心意の之に違するあるのみと蓋し宋儒は吾人の智識を以て事物の本體を極むるに足る者となす是を以て萬物の本體を斷言して以て理となす

第三宋儒は大にその攻究點を自己の心上に向けたり以前の儒教は大抵皆外界よりして原理を探究せんと欲したりと雖も宋儒に至りて其の方向を轉じて内界より着手し以て外界に及ぼさんと欲したり是れ心性の學の大に興起せし所以なり程明道曰く先聖後聖若合符節非傳聖人之道傳聖人之心也非傳聖人之心也傳已之心也、と伊

川曰く心具天德盡己心則能盡人盡物と張橫渠曰く大其心能體天下之物若し此の考察をして進歩せしめば遂に萬物の實在を否定して盡く我心の主觀的作用となすの説を唱ふに至りたるなるべし

然らば則ち宋儒はその本體論に於てその觀察點に於てその攻究法に於て盡く進歩し亦昔日の儒教哲學にあらざることを知るべし

人或は宋代儒教の佛臭を帯ぶるを譏する者ありと雖も當時の事狀に暗くして歴史的事實を知らざるに坐する者なり一言一句の少しく玄奥に渉る者あれば忽ち捕へて之を老佛の書中より竊取せし者となすは是れ實に儒教の學者を以て無智淺薄の者となすに同じ儒教の老佛を參照せしや疑なし然れども只文字を取りて其義を變せし者もあるべし太田錦城は宋儒用語の出處につきて明細なる考證を吾人にしめして曰く周茂叔所謂無極而太極無極二字本于老莊(太宋師在)列子(湯)而太極出于唐僧杜順華嚴法界觀伊川所謂體用一源顯微無間亦出唐僧澄觀華嚴經尙直編歸元直指程張所謂本然氣質二性出于首楞嚴經曰本然性和合性程朱所謂復性復初出于莊子(性)老子復歸於嬰兒莊子能兒子乎(庚)亦與此同程朱所謂虛靜無欲出于老子莊子(庚)明

鏡止水之說、亦出于莊子(德充)及圓覺經唐僧神秀偈、明道所謂心無將迎、晦庵所謂期待留
在出于莊子(應帝)事理對言、出于華嚴法界觀、有無對言、出于老莊(齊論)、晦庵所謂虛靈不昧、
出于大智度論、程子所謂沖漠無朕、出于莊子(應帝)、晦庵所謂未有天地、先有此理、同于老子
有物混沌先天地、生字之曰道、莊子道先天地(太宗師)、橫渠所謂死之不已、似于老氏谷神不死、
莊子人其盡死而我獨存乎(在)、晦庵所謂一旦豁然、似于莊子大覺(齊論)、禪家頓悟、明道所謂
器亦道々亦器、似于般若心經、色即是空、空即是色、晦庵所謂與守書冊泥言語、全無交涉(集文)
(齊論)、似于達摩不立文字、所謂世間一切事皆此心發見耳、似于華嚴三界唯一心、心外無
別法、程子揚龜山所謂天地同根、萬物一體、出于莊子惠施之語(天)、高僧傳肇法師之語(九經
談)、然れとも老莊釋氏の考察したること必ずしも儒學者の考察し能はざることゝ
なさんや人間の性質は大抵同一の物たり是を以て地を距つること數千里時を去る
こと數百年にして兩者の間驚くべき暗合を生ずるあるにあらずや

第十九章 朱子没後の宋學の景況

宋學朱子に至りて大成したると猶百川の海に歸するが如し、朱子その該博なる學識
と深邃なる卓見とを以て以前の太極說性理說格物究理の諸論を打ち之を一丸とな
して以て哲理の門を開き、學庸論孟及び群經の意義諸注を闡明して以て爲學の法を
示し、餘惠を後代に垂れたり、斯道に偉功ある實に非常なりといふべし。

朱子と同時に起りて力を洛學に盡くせし者を張南軒、呂伯恭(東萊)となす、而して朱子
の門人には播謙之、楊志仁、林正卿、林子武、李守約、李公晦等の閩中にあるあり、黃去私、張
元德等の江西にあるあり、李敬子、胡伯量等の江東にあるあり、葉味道、潘子善等の浙中
にあるあり、其他門人數百人に及ぶ、然れども其最も傑出せし者は蔡元定(西山)、黃翰(勉
齊)、蔡沈(九峯)、輔廣(漢卿)、陳淳(北溪)等の徒にして皆、其受くる所を以て之を四方に傳へ
朱子の學大に世に普及す、宋の末年に當りて眞西山出で、更に之を擴張し、人以て朱
子の再來となす、魏鶴山亦、朱張に私淑して、優に一家をなし、其言頗る見るべき者あり、
其他象山の門人には、揚慈湖あり、東萊の門人には、樓迂齋等出で、更に王應麟、馬端臨、黃
東發、葉水心の徒ありて、或は考證學の先聲をなし、或は程朱の説に疑を挾みし者なき

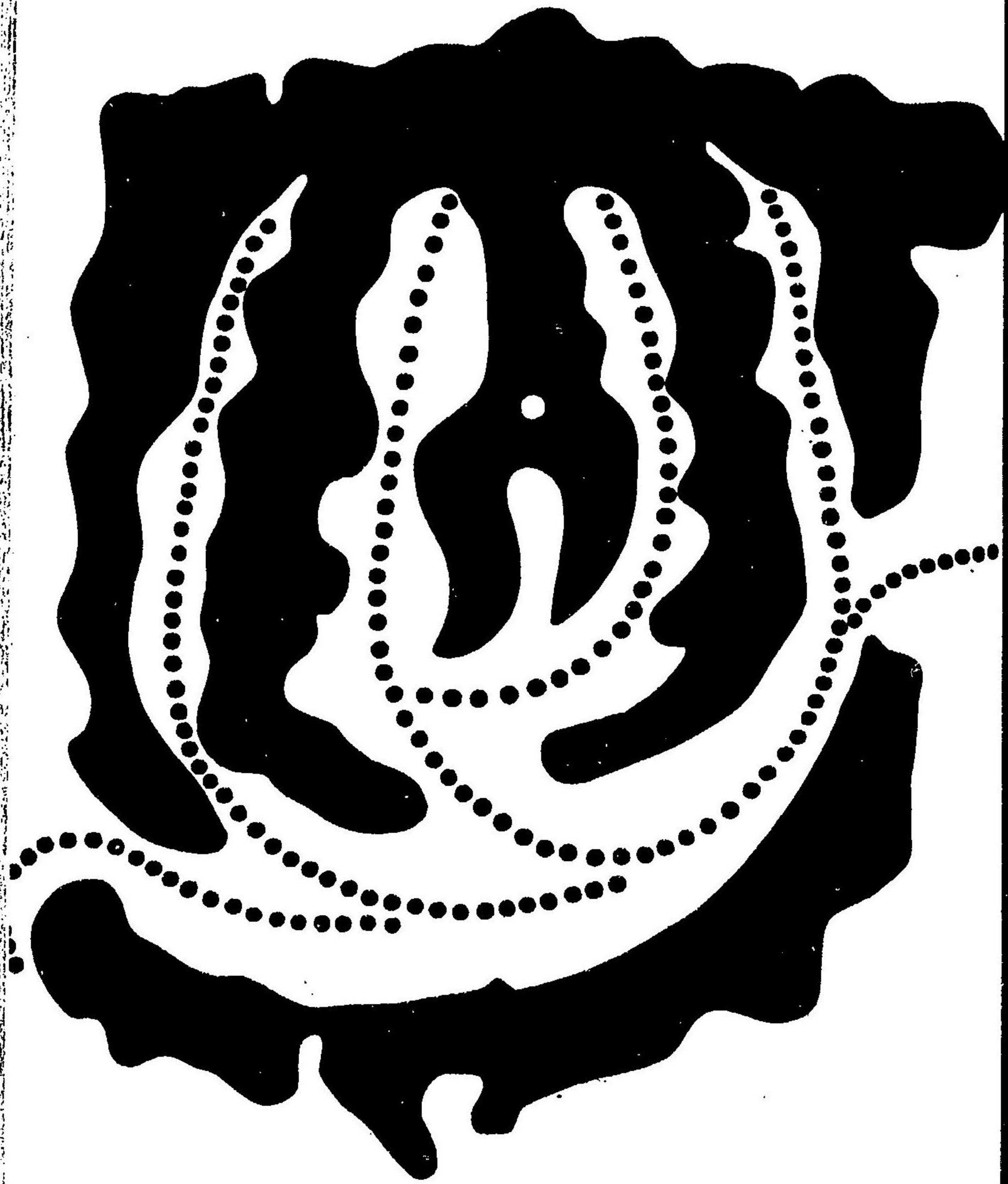
にあらずと雖もその學說の來由を案するに皆洛學の支流に屬す宋亡びて元に至りて姚樞、趙復等を経て許魯齋に至り一代の學術を開き金仁山、許白雲等亦興りて跡を勉齋につぐ仁宗皇帝遂に命を發して程朱の傳注を以て官吏登用試験の課本となさしむ即ち詩には朱子の註、尙書には蔡傳、周易には程朱等是れなり明に至りて宋景濂、胡居仁、薛敬軒皆朱學を奉じ中世に至りて王陽明、歐陽起して遠く陸象山の學派を擴張して近く陳白沙の風を學ぶ一時の勢頗る盛なりと雖も程朱の學は官學たるの特權を有するを以て其勢力依然たり亦之を朝鮮に傳へたるは李退溪(王陽明と同時代人)なり清朝に至りて學術社會の氣運大に考證風に趣きたるを以て純粹なる宋學者と稱すべき者之なしと雖も陸稼書、李光池の如き其有名なる者なるべし現存の學者中に愈樾考證家を以て自から任じ李鴻章等は曾國藩の弟子なるを以て宋學派中の人といふも不可なし

程朱學の我國に傳はりしは後醍醐帝の頃より始まり當時の僧侶玄惠法師の如きその佛老に似たるを以て之を嗜好したりと雖も公然起りて之を首唱せし者は實に藤原惺窩なり後、林氏之を傳へて長く幕府の官學となる伊藤氏父子の復古學に於ける

中江藤樹の陽明學に於ける物徂徠の古文辭に於ける其他洛學に反對する者なきにあらずと雖も彼等皆、一たびは其門に入りて之を研究せし者なり之を要するに徳川時代儒學の勃興は程朱學の力興りて多きに居る此の如くにして明治の今日に至ると雖も苟くも儒學を知らんと欲せば先づ朱子集註より着手して然る後、他の古注に及ぶを以て之を觀るときは其勢力の偉大にして永續せること豈驚かざるべけんや余は他日を待て將に朱子以後宋學の變遷と學說とを評論して斯篇を紹介がんと欲す我が山陽晦庵の圖に題して曰く韓岳驅馳虎嘯風四書獨費畢生功一張萬古科場設、無數英雄墮此中、

明治廿七年三月十八日朱子没後を去ること殆んど六百九十四年後學某斯一大偉人の學術と性行とを概論して筆を茲に止む。

文公塋墓形勢圖



附 録

第一 宋學の源因

(哲學雜誌
百十號)

余嚮きに宋學概論を公にしたるや、哲學雜誌「國民之友」「六合雜誌」等より有益なる批評を賜はり自己の研究の粗漏なるを知れり、今更らに得たる所の結果を録して識者に質す。本題は則ち宋代哲學を助けて起らしめたる源因の探究にして、概論には單に「宋代の衰運」「佛教の勢力」「人心の心理的作用」を以てしたる而已なれど、精密に之を論ずるときは、大凡左の如けん(概論第三章參看)

第一 朝廷の學術獎勵

第二 道教の盛大及び迷信

第三 科學制度の變更

第四 佛教の勢力

第五 宋代の衰運

第六 人心の心理的作用

第一 宋學の源因

以下之れを論せんとす

第一朝廷の學術獎勵 唐二百年文運の後は繼ぐに五代の亂離を以てす僅々たる五十餘年の間姓を革むること五回制度文物殘缺して倫理綱常も亦行はれず所謂天地間の一大却運なり故に文學技藝の如きも蕩然として地を掃ふに至れり故に周の世宗嘗つて樂縣を見て音樂を質問したりと雖も遂に答ふる者なかりしと云ふ宗太祖起るに及びて漸く干戈を收めて民と休息を期す即位の明年太常博士聶崇義重修三禮圖を上つるに因り太子詹事尹拙に詔して儒學の士を集めて之れを欽定せしむ又諸國を征服削平する毎に先づ其圖籍を收録し且敕使を發して散亡の書籍を集聚せしめたり又國子監學舍を増修して先聖十哲の像を修飾し七十二人の孔門及び先儒廿二人の像を東西兩廊の板壁に畫かしむ

既に學術を尊崇したれば學者を優待したること辯せずして明なり真宗の如きは揚勵の喪に當り親ら輦を降り歩いて之れを吊したりまた富弼の母歿せしときに當りては仁宗その春宴を開くことを止めしめたり(千百年眼卷十)その他胡瑗孫復の如き皆非常の優遇を被むれり

且宋には祠祿の制度と稱する者あり趙翼の廿二史劄記にその根源を述べて曰はく宋制に祠祿の官以て老を佚し賢を優す真宗玉清昭應宮を置きしより王旦をして之れが後とならしむ且病を以て致仕す乃ち命するに太尉を以て玉清昭應宮を領せしめ宰相の半俸を給す祠祿之より始まる(卷廿五)と即ち學者乃至名臣の養老金の如き者なりかく優遇を被むりて俸給も饒かなる故學者たる者自然に力を深遠なる學理に用ふることを得又世人をして學術の重んずべきを知らしめて研究の獎勵心を興へたること疑なし

而して此外更に學術の振興を助けたる者あり印刷術の進歩是れなり蓋し支那の「グーテンベルヒ」は誰なるか明ならずと雖も宋史藝文志によるに周の顯德中始めて經籍を板に刻して印行したるを以て學者筆札の勞なく古人の全書を得ること容易なりと或は又一説によるに唐の末に益州始めて墨板あり多く術數字學小書に止まるのみ是に於て蜀の田昭裔九經を印行せむことを願ひしかば蜀主之れに従ひ乃ち始めて木版を用ひて六經を摹刻することゝなれり宋の眞宗景徳中又司馬班范の諸史を摹刻すと(千百年眼卷九)されば多少の遲速ありたりと雖も要するに此術が廣

く世に行はれて便を興へしは宋代に至りて起りし者ならむか然らば此の事當時の文運に多少の關係なしとせむや

第二道教の盛大及び迷信 洪範五行より讖緯の説生じて老莊學の末流道家之れと相聯絡し以て奇怪の思想を述ぶ魏晉の際天下久しく兵馬に苦みたるを以て人間の思想は一方に於ては苦痛を避け又一方に於ては快樂を求めむと欲するの傾向を生ず老莊の流派これによりて其恬淡虛無の説を鼓し快樂的道德を唱へて以て現世界と相脱離せむと欲す竹林七賢の如き是れなり此際著名なる學者は何晏王弼等にして何晏は字を平叔と云ふ南陽宛人なり魏の公主に尙して曹爽に媚事す其の人取るに足らず性頗る易を好みて管輅と論辯すること屢々なり常に五石散を服して曰はく唯に病を治むるに止らず精神の開朗なるを覺ふ又以爲へらく天地萬物皆無を以て本となす開物成務も盡く無ならざるはなし陰陽はよりて生を化し賢者は恃んで以て道をなす故に無の用たる儻なくして貴しと且論語集解を著はすや間々解するに老莊の見を以てす

王弼は字を輔嗣と云ふ山陽高平のの人にして老莊に長じて博學能辨なり易を解す

るに當りて象數を棄て、義理に従ひ雜ゆるに老莊の説を以てす以爲へらく天地は無を以て心となす道とは無の稱なりと虛無の道此の如く流行して儒教と混一せむと欲するの景況なりしかば裴頠と云ふ者崇有論を著はして之れを諷す其の略に曰く虛無の理誠に不可なり蓋一唱百和往きて反らず遂に綜世の務と薄んじて功利の用を賤しむ浮游の業を高しとして至實の賢を卑となす人情の傾むく所名利之れに徇ふ是に於て文ある者は其の辭を銜へ訥なる者は其の旨を賛し言を立て、虚無に籍る之れを玄妙と云ひ言に處して親しからざる之れを雅遠と云ひ身を奉じて其の廉操を散する之れを曠達と云ふ云々(後世程朱學派の攻撃せらるゝも常にかゝる論調なり陳同甫周密などの論駁を見るべし)その他向秀の莊子を注する(郭象之れを竊みたること世説新語補卷五文學中に見よ)鐘會の四本論を著はす(世説に魏志を引證して四本を解して曰はく四本とは才性の同才性の異才性の合才性の離を言ふなり尙書傳假は同を論じ中書令李豐は異を論じ侍郎鐘會は合を論じ屯騎校尉王廣は離を論す文多く載せずと以て心性の議論盛なりしを知るべし)皇甫謐の高士傳を稽康の養生論を劉倫の大人論を葛洪の抱朴子を作る皆これ當時の風潮の然らしめたる

者にして降りて東晋以下に至りては皇帝には簡文帝文學者には謝靈運陶淵明等皆老莊學派に浸染したる者の如し陶泓景冠謙之等また著名なる道學者たり此の如く老莊の盛大と共に道學の迷信怪說頗る行はれたりと見へ當時の兵を擧げ亂をなす者を視るに大抵名を妖術咒法に籍らざるはなし唐に至りては道教は佛教の如く普く世上に盛ならざりしかども其國姓と相同じきを以て老子を尊稱して太上玄元皇帝となし王侯以下をして皆道德經を諷誦せしめ且莊子の書を南華真經と列子の書を冲虛真經と亢倉子の書を過元真經と尊稱したり故に仙人の徒頗る輩出す呂祖全書の著者呂洞賓の如き其の白眉たり推移して五代に至るその一二を言はむに陳搏は亳州真源の人なり周末嘗つて驢に乗り汴に入る會々太祖趙匡胤の即位を聽き大笑して落つと云ふまた王闢之の澠水燕談錄によるに人の禍福を語るに符契を合するが如し王世則と云ふ者嘗つて韓見素趙諫の二人と共に搏を訪ふ世則僞はりて僕と伍し共に堂下に拜したりしかば搏笑ふて曰はく人を侮る者は自ら侮る者なりと即世則を揖して坐右に上らしめ且語るらく將來科擧の際君は第一たらむ他は此の席次に順すと後ち果して此の如しと云ふ(卷三)また種放のことにつきて同書に

よるに其の山に還へるに當りてや真宗酒を監政殿に置きて之れを餞し賜ふに客禮を以てす酒半ばにして上七言詩を賦す云々(卷四)以上の二人は宋學に大關係ある者なり

また同書によるに證博と云ふ者あり鎮陽の道士なり年九十にして形氣衰へず太祖訪ふに養生を以てす曰はく清心鍊氣に過ぎざるのみ帝王の道は之れに異なり老子曰我無爲而民自化我無欲而民自正しと軒轅帝堯國を享け年を延ばす率ね此道に由るなりまた王昭素と云ふ者あり酸棗縣の人にして易に長ず易論廿三篇を作る八十にして貌衰へず太祖之れを召見すまた史延壽と云ふ者あり嘉州の人にして善相を以て名あり貴人爭ふて之れを延く貴賤を見ること一の如く爾我の對を以てす由りて史不拘或は史我の綽名を得たり

以上の事實によれば此等の人は皆道家の臭味を帯びたる者にして而して世人の尊信を博すること此の如し今宋史隱逸傳によるに其の擧ぐる所殆んど四十三人に至る亦以てその盛なるを知るべし

此の如く道家の勢力の偉大なると與に迷信頗る流行したり天子の如きも奇怪の事

實を以て其神聖の名を買ふの傾向あり舉人揚勵夢に一大殿に至る一人あり語りて曰はく我は汝の主にあらず來和天尊は汝の主なりと指示して之れに謁せしむ後日勵眞宗に拜謁したるに夢中の天尊と符契を合するが如し又世傳によるに仁宗の降誕に先ち眞宗上帝に請ふに嗣を得んことを以てす帝生るゝに及びて赤脚を好み又晝夜啼泣して止まず一道人あり曰はく之れを止めむと即ち見へて曰く呌ふ莫れ呌ふ莫れ啼泣直ちに止みたりと云ふ以上の事實妄誕もとよりなりと雖もかゝる事の史上に傳はりたるは當時迷信の盛なるを知るに足るべし而して最も笑ふべきは天書の流行是れなり

抑も契丹の事件以後眞宗心常に安からず王欽若即ち密奏して曰はく前代帝王の祥瑞ある者その實敢てこれあるにあらず一時の權謀によりて民心を制するのみ且亦假令權謀たりと雖ども誠敬以て神祇に對すること久しきときは實に之れを致すことを得故に帝先づ天書下ると言はしめて以て信を天下に得るに若くはなし且群臣の威望ある者をして之れを贊せしめよと是に於て帝竊に當時の賢相として衆の稱する王旦に之れを囑す且つ群臣に語りて曰く去冬十一月(當時正月)庚寅の夜半方に

就寢に際し忽ち室中光耀々して星衣絳冠の神人を見たり我に告げて曰はく天當に太中祥符三篇を降すべしと朕悚然として起ち對す已後見ることなしと既にして適々皇城司皇后警察の如き者奏すらく黃帛あり懸りて承天門の南鷓尾にありと帝中使をして之れを視せしむるに帛長さ二丈許にして裏に書卷の如き者あり其封する所隠々として字あり且等皆以て天書降りて帝夢に應じたる者となす帝即ち歩して門に至り二内侍をして屋より之れを下に奉せしむ再拜して之れを道場に奉じ陳堯叟をしてその書を啓かしむ黃字三幅ありその文詞洪範道德經に類す始に帝の至孝、至道以て世を紹ぐを云ひ次には論とすに清淨簡儉を以てし終りに世祚延永の意を述ぶ此に於て群臣入賀し太中祥符と云ふ此れより後陳彭年杜鎮丁謂等附和するに經義を以てし爭ふて祥瑞を上言しその夏六月天書を泰山に七年春三月又之れを乾祐山に得たり自ら欺き人を欺くは豈至愚の至りならずや或は云ふ是れ外交政畧より出でたるなりと蓋し契丹の俗天を敬すること太甚し宋の群臣假りて以て敵人の視聽を動かし窺伺の志を潜消せしめむと欲するなりとかくして帝は天書の僞策を設け群臣亦その意を迎合し上つるに尊號を以てす崇文廣政天尊道寶應章感聖明仁

孝帝是れなりその道家くさくして長々しきこと笑ふに堪へたり是れより封禪及び道家尊信の事盛に行はれ元年の十月には泰山に封じ四年二月には后土を汾陰に祭り七年には老子に亳州の太清宮に謁し上つるに太上老君混元上德皇帝の尊號を以てしたり元來宋は祭祀の盛なること他代に勝れりと見へ大に國家經濟の上に影響をなしたり廿二史劄記卷廿五によるに三年に一たび親しく郊記を行ふ而して毎回大小各官に蔭子を賜ふその他緡錢五百餘萬を費やす云々とされば當時の林和靖詠じて曰はく茂陵他日求遺稿猶喜嘗無封禪書と

徽宗に至りては道家の尊信益々太甚し上清寶籙宮に幸して道士林靈素に命じて道教を講せしめ之れを尊びて通真達靈先生と號す靈素の講するや高坐によりて放言漫語し時々大笑して上下相和し君臣の禮あるなし且當時の道士皆俸給あり一大齋毎に緡錢數萬を費す號して千道會と云ふ佛を廢して釋迦を大覺金仙と云ひ僧を道士、寺を宮院を觀と云ふ政和七年夏四月道籙院帝を冊して教主道君皇帝となす是れより先き帝道籙院に諷し己れを以て上帝の元子となし上帝中華の金狄の教を蒙むるを憫み時に元子をして人間に下り以て正道を傳しめたる者なりとなし此の號を

上らしめたるなり

上の爲す所下これに倣ふ當時如何に民間に迷信の盛なりしかは愧劄錄卷六の記事によりて明かなり曰はく今中都仙釋之教盛行、或列肆通衢、爲箕筆之妖、或毀體四支、爲詭異之狀、浩穰彈壓漫不同焉、曰此非法令所及也、珂按、國朝會要、政和六年正月廿三日詔、近來京師姦猾狂妄之輩、輒以箕筆、聚衆立堂、號曰天尊、大仙之名、書字無取、語言不經、竊慮浸成邪惡、可令八廂使臣、逐地分告示、毀撤焚乘限三日、外立賞賜三千貫、收捉犯人、斷徒二年、制配千里、官員勒停千里、偏管若因別事彰露、本地分使臣與犯人同罪、每日一次、檢舉告示、取使臣知、委繳連同奏京師、內外準之と

迷信は迷信なりと雖もかゝる傾向を生じて哲學の兄弟たる宗教に疑信を生じたるを見れば豊多少の裨益を純理の觀察に與ふることなしとせむや猶鍊金術の化學を開き占星術の星學を始めたるが如し鍊金術は歐洲中古に於て盛に行はれ八世紀の半頃には Sabeian 人の Djafar (Gelber) とも云ふ) 十世紀の半頃には Shinaiz 人の Avicenna 或は Mahomed-berr-Zakaria (Plazes) とも云ふ等有名なる者にして印度の婆羅門にも其術につきては二元法と結合法との區別あり此等は皆支那の所謂圓砂化して黃金

となると云ふ如き説を唱導したるものなり而して今日の精密なる化學は此の荒唐なる信仰より變轉したる者にあらずや占星術に至りても亦然り歐洲古代の信仰は天變を分ちて自然的及び刑罰的となす自然的は即ち自然の天變にして人力の如何ともする能はざるを云ふ之れに反して刑罰的とは人事の如何によりて天の變祥を生ずるを云ふその他これに關する種々の迷信怪説あり然かも「コペルニカス」ケブレル出で、遂に吾人は嚴正なる天文學の組織を得たるにあらずや是に因りて之れを觀れば宋代の哲學と道教迷信との關係豈に一言の辯を興ふるなくして可ならむや第三科擧制度の變更 國家の制立したる法律は當時の人心に影響を興ふるは明かなる事實なり唐代に於て文學の盛榮を極めて大家輩出したるもその科擧制度に詩を加へたるを以てなり宋に至りて王安石神宗に上言して詩を省き専ら經義を以て天下の士を試みたり此の變更につきては利害の論區々として一定せずと雖も之れを要するに經學の研究心を世人に興へて大に獎勵を加へたるや疑なきなり而して經學の研究は是れ儒教哲學の研究と云ふも不可なきなり

第四佛教の勢力 宋代に於て儒佛の關係は最も注意すべき問題なり抑々佛教の大災難と稱せらるゝ三武一宗の一宗は即ち周の世宗なり世宗非常の英斷を以て盡く無格の寺院を廢し私に僧尼を度することを禁じ又民間をして佛の銅像を五十日以内に上納せしむべきことを命じたれば僧侶の勢力大に衰へたり然るに宋代に至りては太祖以來深く佛道を信じ乾徳元年に廢寺を修めて佛像を安置し聖誕節に僧を度すること八千人に及びたり當時又吳越王錢俶頗る佛を信じて八萬四千の塔を作る開寶三年始めて大藏經を刻す太宗の興國五年譯經院を置き端拱元年贊寧高僧傳を上る世の所謂宋高僧傳にして内宋に屬する者三十二人あり眞宗に至りては天禧元年天下を大赦して僧二十三萬人尼一萬五千餘人道士七千餘人女冠八千餘人を度したり又英宗治平四年天下に赦して私に寺院を造して大三十間に及ぶ者は褒賞として敕額を賜ふ佛教の尊信せらるゝ亦盛なりと云ふべし

かゝる勢なるを以て佛教家にも熱心者を生ぜり四明の知禮は十僧を結びて法華懺を修むること三年遂に身を焚かむと欲したりまた遵式は國清寺普賢の像前に於て一指を燒きて天臺の教へを傳へむことを誓へ又智者大師の諱日に當り終日頂を燒きて三昧を行ひたり其他祖印佛印等皆有名なる者にして殊に最も大なる者は圓悟

禪師克勤と明教大師契高たり圓悟は碧巖集の著者にして明教は儒者と交渉を開きたる者なり

蓋し支那の佛教は唐に至りて極りぬ唐より以後は單に繼續の時代たり保守の時代たり開かるべき宗旨は盡く唐に開かれたるを以てなり而して宋に於て最も盛なる者は禪宗にして當時學者の研究せし者も亦此宗なり宋以前に於て儒學者にして佛教を研究し論難せしものなきにからずと雖も之れを要するに未だ精密なる者あらず然るに宋に至りては管に禍福吉凶と云ふ如き見地より論下するに止らず教理として將學理として着眼する者を生じたりされば有名なる學者にして多少是れに浸染せざる者あらず今その二三を言はむに

宋の韓退之とも稱せられて本論三篇を作り以て佛教を攻撃したる者は歐陽修なり然るに彼れは景祐五年諫院より滁州に左遷せらるゝに當り廬山に遊び租印祖師居納と道を談し其致仕して穎上に在るや六一居士と稱し臨終の前日華嚴經を近隣の寺に借り讀みて八卷に至りしと云ふ程顥に明道先生の謚號をなせしは文彦博なり然るに彼れは皇祐二年京師にありて沙門淨嚴と共に僧侶十萬人と相結びて念佛を

なしたり文學者に至りては黃庭堅の如きは黔安にありて大藏經を讀むこと三年なり蘇東坡も亦隠れなき禪學者にして唐の白樂天とも云ふべきか

是の如くして佛教は自然に儒教と相接するに至れり儒教者も知らずく佛教の教理を儒教に混入するの傾向を生じたり今その一二を言はむに

李觀曰はく吾人の議論まだ一卷の心經を出づること能はずとせば佛教豈知り易からむやと其門人黃漢傑に答ふらく古の儒者の世に用ひらるゝや必ず民を教導す故に民異端に趣くの暇なし今は然らざるを以て民の心主とする所なし然らば則ち佛を舍て、何くに適歸せむやと亦た陳瓊了翁曰はく佛法の要は文字にあらず亦文字を離れず只金剛經一卷を讀めば足れり此の經や一切の有名有相有覺有見に於て皆掃ふて虛妄となし之れを要約して阿耨多羅三藐三菩提の九字となす華言に只覺の一字のみ之れを儒に求むるときは中庸の誠字たりと亦た劉安世元城曰はく孔子佛氏の言は終始を相なすなり孔子の毋意毋必毋固毋我は佛の無我無人無衆生無壽者と相同じ孔子の心即ち佛心なり唯孔子は三綱五常を以て道となす故に色々空々の説は微に其端を開くこと前言の如きに止らしむされば天下もし三綱五常なきときは

禍亂作りて人類唯類なからむ是れ豈佛の心ならむや揚時(龜山)は東林總禪師と相善し謂へらく佛教の十識中第八の庵摩羅識は白淨無垢にして本然之性たり第九の阿賴識は善惡種子の相混じたる者にして氣質之性の如き者なりとなし謝顯道(杏)蔡は會點洛沂の事を以て禪家の脱俗高妙に比して曰はく子路冉子曾點に冷眼に看らる他(曾)只だ春風に對して肚皮裡を吟咏するのみ渾べて些の能解なし豈快活ならずやと更に一步を進めて宋代哲學者の巨擘につきて一言せむに周惇頤は佛印を戀侯に見へ之れに問ふて曰はく天命之謂性率性之謂道禪門何ぞ無心を云ふや佛印曰はく若し之を疑はゞ參禪すべし曰はく參禪畢竟既に無ならず曰はく滿目の青山公の看に一任す云々と又程明道嘗つて定林寺を過ぎ嘆じて曰はく三代の禮樂盡く比に在りと又曰はく佛經の中光明變現を説くと雖も初め其理を知ること能はず近日華嚴論を看て始めてその約喻たるを知る機に應じて感を破る之を名づけて光と云ひ心垢を解脱之れを明と云ふ要するに自己の光明能く人を教化し又無盡の世界を教化す聖人一心の明を貴みたる者なりとまた程伊川嘗つて靈源清禪師に問ふに禪要を以てしたり答書に曰はく公伊川心を此道に留むること甚だ久しくして天下の大宗匠を

歴問せり云々と未だ朱子も少時劉屏山に従ひしとき大慧禪師語錄一帙を有したり嘗て曰はく釋氏の學我儒と相似たり又曰はく佛教の説く所六根六識曰六十二因縁生の類皆精妙を極む前輩の孔孟も及はざる所と云ふは眞なりと猶博引旁證の勞を憚りて直ちに太田錦城の疑問録を借用せむに

『周茂叔ハ瀾州鶴林等ノ僧壽涯ニ參セラレタルコト宋晁公武讀書志馬端臨文獻通考明敬敬時習新知清朱舜尊經義考等ニ見ヘタリ佛印禪師元公ト相講道セリト云コト曉堂雲臥紀談ニ見ヘタリ東林總禪師ニ太極ノ深旨ヲ叩キシコト空谷尙直編ニ見ヘタリ永覺寐言ニ空谷ノコノ言ヲ論ゼリ程伯子ノ老釋ニ出入セシコト幾十年ト云コトトハ叔子ノ明道行狀ニ見ヘタリ張橫渠ノ釋老ノ書ニ訪コト累年盡究其説ト云コトハ呂與叔ノ橫渠行狀ニ見ヘタリ朱晦翁ノ謙問善ニ學ハレタルコトハ延平問答附録ニ見ヘタリ又羅欽順困知記ニモ見ヘタリ晦翁劉屏翁ノ所ニテ會一僧參禪セシコトヲ自ラ言ハレシコト朱子語類ニ見ヘタリ又熹於釋氏之說師其人尊其人ト云コト文集答江尙書書ニ見ヘタリ出入於釋老十餘年ト云コトハ文集答江無適書ニ見ヘタリ皆悔改ノ語也朱子初年ニ學ハレタル劉屏山モ實ハ禪學者ナルコト晦翁ノ屏山墓表

ニ見ヘタリ王士禎池北偶談ニモ見ヘタリ云々(卷下)

儒者よりして佛教を相合せむと欲したる者前述の如しと而して佛教家よりして儒者と相合せむと欲したる者もなきにあらず今その一二を言はむに

張商英は宰相なり元來佛を好まず遂に無佛論を著はさむと欲し終夜顛る考察に苦しむ其妻傍らより其故を聞き笑ふて曰はく既に無とする何爲れぞ特に著はすことをせむと商英大に笑ふて止む然るに後には佛教の信仰者となりて無盡居士と稱して護法論を著はしたり其開卷劈頭に曰はく孔子曰はく朝に道を聞かば夕に死するも可なりと仁義忠信を以て道となさんか則ち孔子もとより仁義忠信あり長生久視を以て道となさむか則ち夕に死すも可なりと云ふときは是れ果して何の道を聞くを求むるか豈大に慈尊誠心見性無上菩提の道を覺るにあらずや然らずんば別に何を以て孔子曰はく北西方に大聖人あるを聞くと謂ふかと牽強附會笑ふべしと雖も其熱心を觀るに足るべし然れども當時是の事項につき最も有名なる者は契高にして其著述には輔教編三篇及び鐔津文集十九卷等あり(輔教編は文集の中にあり又單行せらる以下少しく之れを述べむ)

契高は當時の碩學たり文集の序(陳舜俞の選)によるに當時慶曆年間天下の士古文を學びて韓退之の排佛に賛同する者多し東南地方の章表民、黃聲、隅、李、泰、伯等最も著名なり契高その間に介立して獨居原教孝論十餘篇を作り儒釋の道相合一せることを論じたれば反對者もその文才と理の勝れるとに服したりと此等の文皆文集にあり今原教に曰はく儒を以て之(佛)を校ぶれば則ち其所謂五常仁義なる者と號を異にして體を一にするのみ夫れ仁義は先王一世の治迹なり迹を以て之れを議すれば始めより異ならずんばあらず理を以て之れを推せば始めより同じからずんばあらず迹は理より出でて理は迹を祖す跡は末なり理は本なり君子は本を求めて末を措けば可なりと輔教篇上)以て儒佛の一致を企てたり又曰はく情は性に出づ性は情に隱る性隱るゝときは即ち至實の道息む是故に聖人は性を以て教となす天下の動は情に生ず萬物の惑は情に生ず情性の善惡は天下審にせざるべけんや(輔教篇中)と後來宋儒が性情を區別せむと欲するもこれに外ならざるなり又曰はく聖人の教は道に存す聖人の道は覺に存す覺は則ち明なり覺ならざれば明ならず明ならざるは則ち郡靈の聖人と相同じからざる所以なり學とは漸覺にあらず極覺なり極覺は乃ち

聖人の能事畢ると是れ聖人の道と轉迷開悟とを聯結せしめたる者にあらずや其他
鐔津文集には皇極論中庸解等あり皆佛敎的眼光を以て儒敎を觀察したる者なりま
た非韓子を著はして韓退之を攻撃すその序に曰はく非韓子は非を公にするなり云
々(文集第十四參看)是の如く佛敎的眼光を以て儒書を解する者次第に増加したり後
來明の幽益大師の四書旨指の如き其の著明なるものなり

元來外より來りたる學術宗敎は其の入りたる國の風俗好尚と相容れず亦從來の學
術宗敎は之れを遇するに異端邪説の觀を以てするを以て外來者は勉めてその敎理
主義を舊來の者と一致せしめむと欲するは明かなる事實なり例すれば我國に於て
神道と儒敎乃至佛敎との間を視るに佛敎者は本地垂迹兩部習合を企て天照大神を
毗盧沙那佛となし八幡宮を阿彌陀如來となし春日四社天兒屋根命經津主命武甕槌
命姫大神を釋伽藥師地藏觀音の四佛となしその他諸々の方法によりて神佛相戻ら
ざるを説き儒敎家も山縣周南の如きは爲學初門に於て我國の神道は即ちもろこし
の神道なりといひ以て易の聖人設神道而治天下を引證したり然れども易の神道と
我神道とは同一ならざること明けし而して神道者より云ふときは盡く此の二者を

拒絶せむと欲したり唯平田篤胤氏の如きは以爲へらく何れの國を問はず其最初は
皆幾分か我國の眞正なる神道の面影ありし者なるに後世盡く邪説の滅する所とな
りて獨我國に傳はり止まるに至るとされば鬼神新論に於て神の觀念を論じ玉銜百
首の歌をひきて釋迦孔子も神にし有れば其道も廣き神の道の枝道と云ひ又出定笑
語の一に於ては印度の梵天を以て皇靈産神となし那落を以て夜見の國となしたり
是れ則ち神道を無上の廣大なるものとなし自動的に他敎を籠絡せむと欲したるの
大言なり之れと同じく儒者にも太宰春臺の如きは辨道書に於て神道といふ文字は
周易に出候て聖人の道の中の一義に候といひ先本朝の古を考候に神武天皇より三
十代欽明天皇の比までは本朝に道といふことあらずと斷言し平田氏と正反對に立
ちて儒敎より自動的に神道を包含せむと欲せり佐々木掌靜辯々道書を著はして太
宰氏を駁す然れども先づ此の如き突飛の論を措き虚心平氣に論ずるときは三敎元
來各異なりたること明にして異なりたりとて驚くに及ばざるなり亦無理に一致せ
しむるにも及ばざるなり故に熊澤蕃山は集義和書に論ずらく一致にてもなきもの
を一致と虚言可申様もなく候其上一致は平の端也(卷一)

支那に於ける儒家道教佛氏の關係も猶此の如き者にして佛氏は常に容れられむことを儒家に求め而して儒家は飽まで之れを排斥せむと欲す亦或は儒家の大膽なる者は一步を進めて老佛共に儒家より其教理を竊み去りたるものとなす彼の謝上蔡曰はく孟子歿して天下の學者自家の寶藏を知らず彼れ佛氏一斑半點を窺見し遂に攀攀堅脚底の事をもつて把りて手に在り云々(上蔡語錄)と又朱子も曰はく釋氏の古書は四十二章經のみ餘は皆中國文士の潤色にかゝると明の敖敬(京山)の如きも論ずらく曰はく古今の道術は定靜に過ぎるなし精神凝聚盛徳大業此れより出づ大學の「知止中庸の不二論語の一貫孟子の收放心易の何思何慮書の惟幾惟康詩の不識不知佛の慧仙の丹夫豈異術あらむや皆聖教の餘緒を踏襲して而して偏に之れを用ふる也世儒偏狹にして二氏の己れに似たるを惡み定靜を併せて之れを諱みて講せず偏に格物を主として以て天下の物理を究盡するを入門となすは謬れる哉明徳の兩字は乃天命人性の指南學問の淵源なり二氏竊取り變換して妙明智慧定光種々名色となす其實は聖教に本づくなり亡失既に久し儒者怯懦にして光復を求めず反りて嫌を引きて卻避し遂に二氏に奄有せらる云々(此文は悟窓漫筆より引證す)然れども虚

心平氣に之れを論するときは一は世間的にして一は出世的の一は現在に關する學術にして他は未來を主とする宗教なれば一致すべくもあらず然るに儒家が常に佛教家を營するに五倫を棄て三綱を斃り心を虚無恬淡に遊ばしめて自ら死灰に擬する云々を以てするは是れ佛教の宗教たる所以を忘れたる者にして佛教を譏るに是の如き言を以てするは是れ猶炭を黒なりと訝り雪を白なりと尤むると一般なり而して佛者また之れを辯せむと欲するは笑ふべきことなりと雖も主客の勢の然らしむる所以なるべし三教一致は爲學初問(下)によるに明の林兆恩と云ふ妄人の傳へたる者なるよしなれど吾人今之を調査するの書籍なければ林兆恩の何人たるかを知り難し唯思ふに三教一致必ずしも林兆恩に始まるに非ざるが如し

宋代儒佛の關係前述の如し洛閩の體用を談じ理氣を唱ふる豈故なしとせむや

第五宋代の衰運

第六人心の心理的作用

以上二項は概論に多少の説明ありたれば屋上屋を架するを欲せざるなり吾人は更に題を更めて唐代の儒教的學者の思想を略述して宋學に影響を與へたる所以を見

んと欲す (完)

(唐代の儒學につきては、反省雜誌に掲載したることありしも、今や歲月を経て其稿本を覓むべからず故に之を闕く)

第二 清朝の學術

第一回 總論

東亞說林第一號出づ何を以て讀者に見ゆべき乎今や元戎行を啓きて李氏の山河既に締盟を結び赤縣四百州日ならずして將に旭旗の朝風に翻騰たるを見んと欲す是際軍國の事を論ずる世間自ら其の人あり是を以て余は將に清朝學術の一般を闡明して之を同好の人に質せんと欲す何となれば一時代の學術或は思想界の風潮は少くとも現實の社會に對して格段なる影響を與ふる者なればなり

既往を回想して青燈の下颯颯劉蹶の歴史を觀來れば他人種にして支那を掌握しその本土人民を壓服せしこと茲に二回曰はく元の忽必烈曰はく現今の愛親覺羅怒爾沿齊同じく是れ他人種なり然り而して元代僅に百年に充たずして遂に再び漢人種の爲に亡滅せられたり其間敢て桀紂の暴政ありと云ふにあらず之に反して清朝の國祚實に三百歲に垂んとす易姓革命の國に在りては亦決して短しと云ふべからず假令ひ今日老驥駑馬に若かざるの觀ありと雖もその内地未だ茫礪山蛇を斬るの人を見ざるは何等の源固此れに與りて最も力ありたる乎他なし滿人の漢人と調和を

励めたること是なり

清朝は一方に於ては各部の長官より屬吏に至るまで滿漢の兩人種をしてその權衡を保たしめ榮譽の源泉たる國家の官職位階を以て漢人種の歡心を得んことを圖り又一方に於ては大に學術を獎勵して漢人種の文物の保護者たる事を自任せり今試にその一端を言はむに世祖章皇帝の順治十三年大學士に命じて易經通注を撰ばしめ且永樂大典の繁冗を削除してその紕繆を訂正し聖祖の康熙十九年には大學士庫勒納等に命じて日々四書及び書經を講せしめ三十八年には春秋傳說彙纂の撰あり五十四年には大學士李光地をして周易折中を撰ばしめ世宗の雍正五年には孝經集註の御纂あり是れに尋ぎて乾隆帝高宗登極六十年の間碩學鴻儒輩出實に清國文運極盛の時にして嘉慶以後國勢一蹶學術も亦看るべき者尠少なり

その學者を遇すること頗る卑辭優禮黃宗義顧炎武の如き前朝の遺臣にして節を守り敢て屈せざる者と雖も飽迄で之を尊敬し特に康熙帝の如きその二十一年に自ら乾清宮に御して内閣大學士翰林院學士等に宴を賜ひその醉ふ者をば内官をして之を扶けしめ六十一年にも亦千叟宴の設ありて以て當時の文人學士をして歡を盡さ

しめたり

學校のことに至りては順治九年既に官費の學生を集め又大學に幸して釋奠の禮を行へ釋倫堂に至りて講席に親臨しまた乾隆二年の上諭によるに

先師孔子聖集大成教重萬世我皇祖聖祖仁皇帝皇考世宗憲皇帝親詣辟雍登堂釋奠儒臣進講經書諸生圍橋觀聽雍々濟々典至盛也朕祗承不緒嚮慕心殷國學文廟特令易蓋瓦以展崇敬竣工程告竣之日朕躬詣釋奠用昭重道隆師作人造士至意

且孔夫子及びその門人の子孫を召見して之を優待したること前古未だその比を見

す
また遺書を采訪するの詔にはく

康熙二十五年奉上諭諭禮部翰林院自古帝王政治隆文典籍俱備猶必博採遺書用充秘府以廣見聞而資掌故甚盛事也朕留心藝文晨夕披覽雖內府書籍篇目粗陳而哀集未備因思通都大邑應有藏編野乘名山豈無善本宜廣爲訪輯凡經史子集除尋常刻本其有藏書秘錄作何給值採集及借本抄寫事宜爾部院會同詳議具奏務令搜羅罔佚以副朕稽古崇文之至意

其他かゝる敕令布告を發して斯道の發達に力を盡したること數ふるに遑あらず獎勵保護此の如くにして生せられたる清國の學術は果して豫期の如く善良なる結果を生せしや否や吾人は斷言す是れ却て清國の學術と思想とに與ふるに不幸なる影響を以てしたりもし忌憚なく言はゞ清國の時代と人民とは一の獨立的思想を有せずと云ふべし是を以てその學風専ら考證に流れ或は他書の叢錄専ら行はるゝに至れりその源因二あり

第一義理研究に對する反動趙宋時代に於て濂洛關閩跡を尋ぎて輩出し純理の研究大に勃興したりしが元に至りて一たび衰ひ更に明に入りて陳白沙王陽明羅近溪湛若水羅整庵等その哲學的思想を發揮し殆んど宋代を壓せん計りに進歩せしかとも元來是等の議論素よりその思想を懸空に馳するのみにして然かもその標準となして歸結する所は孔孟の教理にありと爲す是に於てかゝる空漠たる哲學的爭論に倦み果てたる反對黨は起りて論ずらく孔孟既に逝りて復遇ふべからず唯その眞意を會せんと欲せば彼等が遺したる文字によらざるべからず文字を捨て、孔孟の道を知らんと欲する獨舟なくして海を渡るが如しと是に於てか考證學と稱する新學風

一世を風靡するに至れり

第二清朝政府の學政に干涉せしことの過度なること是れ余が前言の所謂に不幸なる結果を與へたる點にして清朝政府は保護の度過ぎて干涉となり幾分か箇人の思想を束縛して之を狹隘ならしめたるの傾向あり雍正三年の議准に曰はく

士子糾衆結社於人心風俗實有關係應飾令各省督撫學臣嗣後除宿學之士授徒講學及非立社訂盟實係課文會考者無論十人上下俱無庸議外如有生監人等假託文會結社聚黨縱酒呼盧者令該地方官立即拏究申革其有遠集各府州縣之人標立社名論年序譜指目盟心放僻爲非者照奸徒結盟律分別首從治罪如地方官知而故縱或被科道糾參或被旁人告發將該管官從重議處

と是れ學生等の集合結社して私に學術を講論するを禁じたる者なりまた文體を一定することも順治二年の布告によりて明らかなり曰はく

定文有正體凡篇內字句務典雅醇粹不許撫一家言飾爲宏博
と更に乾隆十九年の上諭に曰はく

易屋制義屢以清真雅正爲訓前命方苞選錄四書文頒行皆取典重正大足爲時文程式

士子咸當知所崇尙矣、而浮薄之士、競新奇云々

また書肆に調するや曰はく

坊間書賈、止須刊行理學政治有益文業諸書、其他瑣語淫詞、及一切濫刻、窗藝社行、通行嚴禁、違者從重究治、

乾隆十九年に水滸傳を嘉慶七年には西廂記等を禁じたりかくの如くにして朝廷は國家の威力を以て民間の私學を嚴禁しその結社その出版その言論を壓抑し更に政府より諸々の文書を發行して以て一般の法則となさしめたり實に清時代ほど欽定或は御纂と銘打つたる書籍の出でしことあらず且亦一方に於ては、エンサイクロピデア的の叢書類書等の類盛んに行はれて便利なる學問の方法を世に流布す佩文韻府淵鑑類函康熙字典四庫全書提要古今圖書集成等皆官府の印行にしてその他一人の叢録したる者の如き頗る多し皆多きは一萬卷少きも數百卷に下らざるなり然れども是皆古人の遺書を體裁能く陳列したる迄にして創作の者一も之なしと云ふも可なり且亦經學に關したる書類も皇清經解の如き大篇ありて一字の沿革を論じ一句の是非を訂したる者に至りてはその精到その該博驚ろくべき者ありて千古の

疑案を一掃し支那の古典に大なる光輝を與へたるや疑なしと雖も之を要するに文字章句の學にして古人の説につき徒らに云々を費せしに過ぎすよく簡人の獨立的思想を發揮したるは實に少なしと云ふべし乾隆帝の如き是の弊を幾分か防遏せんと欲しその五年に上諭を下して曰はく

朕命翰林科道諸臣、毎日進呈經史講義、原欲深聖道之粗蘊、爲致治寧人之本、道統學術、無所不該、亦無往不貫、而兩年來諸臣條舉經史、各就所見爲說、而未有將宋儒性理諸書、切實敷陳、與先儒相表裏者、蓋近來留意詞章之學者尙不乏人、而究心理學者蓋鮮、中略夫治統原於道統、學不正則道不明、有宋周張程朱諸子於天人性命大本大原之所在、與夫用功節日之詳、得孔孟之心傳、而於理學公私義利之界、辨之至明、循之則爲君子、悖之則爲小人、爲國家者山之則治、失之則亂、實有裨於化民成俗、修己治人之要、所謂入聖之階梯、求道之塗轍也、學者粗察而力行之、則蘊之爲德行、學皆實學、行之爲事業、治皆實功、此宋儒之書所以有功、後學不可不講明而切究也、今之說經者、間或援引漢唐箋注之說、夫典章制度、漢唐諸儒有所傳述、考據固不可廢、而經術之精微、必得宋儒參考、而闡發之、然後聖人之微言大義、如揭日月而行也、

と然れども大勢の赴く所亦支止すべからざるなりたゞ吾人の此の考證學風に向つて謝する所は支那古典の之によりて世に明かにせられたることにして就中當時古器物の蒐集行はれたるを以て大に古代器具の眞製を知ることを得考工記等の研究に大なる便益を興へたり

經學の傾向大凡如此然らば純粹文學の境界は如何文に於ては黃宗羲の雄大なる候朝宗魏叔子の豪放新奇なる桐城派の謹嚴緻密なる詩に於ては吳梅村蔣藏園朱竹垞等素より屈指の者にして後世に傳ふるに足るべしと雖も之を前代に比して進歩したりと云ふこと能はざるなり然れとも若しその種類よりして之を言はゞ發達せりと云も可なるべし何となれば小説戲曲噺詞等の流行したればなり

金聖嘆出で、その卓拔奇稔なる眼光を以て水滸傳等を評隲し李笠翁の蜃中樓傳奇風箏誤傳記湯士奇の邯鄲傳記黃承培の廣虞初新誌孔尙在の桃花扇曹雪芹(?)の紅樓夢蔣藏園の紅雪樓九種曲等各々獨得の妙筆を揮ひその他諸々の小冊子續出し往々鄙猥讀むに堪へざる者なきにあらず是を以て清朝政府は滿人種の士氣を懦弱ならしめんことを恐怖して遂に嘉慶七年左の上諭を下せり

朕恭閱皇考高宗純皇帝實錄內載乾隆十八年七月欽奉諭旨滿州習俗淳樸自我朝一統以來始學漢文會將五經及四書通鑑等書繙譯刊行近有不肖之徒不繙譯正傳反將水滸西廂記等小說繙譯使人閱看誘以爲惡甚至以滿州單字還音鈔寫警詞者俱有滿州風俗之偷皆由於此不可不嚴行禁

若し夫れ他の科學の類に至りては之を前代に比するに發達したる者頗る多く就中天文學の如き最もその精微を究め梅文鼎等その有名なる者にして阮元の疇人傳一斑を窺ふに足るべし此れ蓋し近世歐洲と交通を開きしより得たる結果なるべし吾人は此章を終るに臨んで讀者と共に此の經學此の文學この科學その他清朝時代の文物を發達せしめたるに力ありたる者は滿人種に非ずして漢人種なることを記應せざるべからず恰も日耳曼人の羅馬人を壓服したりと雖もその開化によりて却て恩恵を得たるが如く滿州人は一時の武力によりて疑もなく漢人種を制御したりと雖もその文物その思想に至りては盡く前朝の遺物を奉じて本土人種の啓沃を蒙らざるはなし漢人種は體力に於て敗北せりと雖も却て滿人種を掌握せり見よ清朝文學の創起に力ある二大學者顧炎武も黃宗羲も盡く是れ漢人種にあらずや

豈に管に學術の社會のみならんや政治の上に於ても亦然り清朝時代の政治家にして滿州より起りたる者實に僅少なり現今李鴻章も張之洞も皆漢人種なり然らば則ち滿人種は只一時漢人種を壓伏して清朝を立てたる迄にして今日に至りては既に一の空殼と云ふも誣言にあらざるべし蓋し偉人の起り文明の生ずる大に其の人種に關係する者にして吾人未だ滿州人にして學術を闡明し一世の思想を風靡し世界文明の上に大なる影響を與へたる者を聞かざるなり

第二回 總論

余は前回に於て清朝學術の傾向と特質とを評論し且滿漢兩人種が學術の社會に於て如何なる關係を有したるかを明かにしたり更に一步を進めてその補遺を述べんと欲す

清朝政府は前述の如く力を學術の獎勵に用ひ漢人種の歡心を失はざらんことを欲したりと雖も自己の人種たる滿人種を保護することに至りては敢て怠らざりし蓋しその心以爲らく我等一旦の勢に乗じて禹城を蹂躪し其の君を革めその服を變せしめたりと雖も素と平日馴養の恩誼ありて彼漢人種を心服せしめたる者あるにあ

らず堯舜三代の治績も唐宋の文明も皆我人種の起せし所にあらず寧ろ我人種は彼等の稱して夷狄となし蠻夷となして之を荒服の外に置きたる者に外ならず是を以て一旦罅隙の乘すべきあらば漢人種の再び起りて我等を壓倒し以て會稽の耻を雪ぐことなきを必すること能はず我人種たる者豈意を此に用へざるべけんやと是に於てか清朝政府は滿人種に學術を獎勵すること同時に武藝を熟練せしめ若之に熟せざるときは文藝に優るなる者ありと雖も之を却けて任用せざること、せり康熙二十八年の議准によるに

考取滿洲生員宜試騎射不能騎射者不准考試

その八旗兵の如き漢人種と同じく文學の考試をなさしめたることあり或は然らざることあり乾隆二十年の上諭によるに

八旗陳滿洲因到京年久向有考試之例故姑從而留之東三省新滿州烏拉齊與在京滿州等不同止宜熟習騎射爲國家之用嗣後東三省新滿州烏拉齊等考試之處著永行停止

政府は如此にして武勇の氣象を保持せしめんと欲したり而して遂に滿州全體の考

試を停止したることは左の敕令によりて明かなり

嘉慶四年奉上諭、向有會試之例、後經停止、敬惟皇考聖意、原因宗室當嫻習騎射、以有滿州舊俗、恐其專攻文藝、沾染漢人氣習、轉致弓馬生疎、然自停止考試、以後騎射亦未能精熟、天潢支流繁衍、自當仍准考試、廣其登進之路、兼可使讀書變化氣質、不致無所執業、金鐵の堅きも一たび熱火の鎔解を經れば三尺の童子も之をしてその意の欲する所に従はしむべし、清朝政府、コサツク兵を以て自ら任ずる滿州八旗の精銳も、秦淮の月を梳びて揚州の花に戯むれ、大道髮の如きの長安に優游して、人影の搖動する天津橋邊に徘徊するに當りては、などか化して都人とならざることを得んや、衣到肝袖到腕の風も何時となく消失して、倡優巧鐵劍鈍の境界に至るは怪しむを要せざるなり、嘉慶四年今日を去ること既に百年に垂んと欲す而して、弓馬の廢頽して柔弱の氣、彼等の剛腸に染みしこと如此、我王師の至る所、恰かも竹を破るが如く、彼等をして遠く幕北に逃避せしめたる所以の者亦宜なる哉、而して嘉慶四年を去ること殆んど一千三百年、北魏の孝文帝一たび代北を去りて都を洛陽に遷つし、南方浮華の文明を喜びてその胡姓と胡服とを禁じ、制度文物を變革して、昭成道武の雄圖遂に挫折し、拓跋氏忽

焉として再び振はず而して北魏を去ること更に一千年、趙の武靈王落々たる雄心大漠を覆ひ、趙燕公子成の諫を容れずして、黑齒雕題の風被髮文身の俗を取り、汗馬に策して、角弓を鳴らし、代北の地を聞くこと千里、五徑の險を絶りて、九限の固を踰ふ、或は出で、之を取り、或は入りて、之を失ふ、百世の上より百世の下に及ぶ、我豈慨然として筆を投せざることを得んや

巍々たる高山は鑿て之を通せしむべく、茫々たる河海は舟して之を渡さしむべし、獨り言語の異なる習慣風俗の同からざる、兩人種の化合に於ては一朝にして之を了すべきにあらず、況んや金革に罹して干戈の間に見へたるに於てをや、況んや促守堅忍を以て特質とせる漢人種に於てをや、在昔、ノルマン人の英吉利を征して、サクソン人を壓服せしに當り、敗者は數世紀の間その固有の風俗を維持して、敢て勝者と同化するを肯へんせず、言語の如きも、ノルマン語は上等社會若くは官衙の川語としてのみ用へられ、他は一般に「サクソン」語を使用し、その真正なる一團體となりて、參商の觀を脱せしは、「ジョン」王時代の後に生じたることなり、吾人は今左の上諭を讀みて、滿漢兩國語の如何なる關係を有するかを知る

乾隆四十四年奉上諭近來凡有論旨應兼蒙古文者必經朕親加改正方可頒發而以理藩院所擬原葉示蒙古王公等多不能解緣繙譯人員未能諳習蒙古語就虛文實字敷衍成篇遂致不相吻合又如從前德通所繙清文阿岱閱之往々不能盡曉夫阿岱素精國語無不備知其所以不曉德通之清文者非阿岱不通清語乃由德通拘泥漢字文義牽綴爲之於國語神理全未體會是岐清語與清文而二之無怪其相背也則蒙古王等之不解理藩院之蒙古文其義亦然總自國朝定鼎至今百餘年八旗滿州蒙古子弟自其祖父生長京城不但蒙古語不能兼通即滿州語亦曰遺忘又復憚於學習朕屢經訓飭而率教者無幾固山習俗所移亦其人之不肯念本向上耶

德通とは如何なる人なるか今之を知るべからずと雖も恐らくは漢人種にして清文繙譯者なるべし彼の繙譯にして滿人の阿岱に通すべからず又理藩役員の繙譯にして蒙古王等に通すべからざるによりて之を觀るときは清語なる者の漢人に入り難くして又同時に漢語の滿人に通曉しがたきを知るべし百餘年の久しきを経て猶此の如し民俗の變じ難きこと辨を俟たざるなり之を要するに清朝政府自己人種の特質を維持しその武力を以て長く漢人種を壓服せんことを圖りたる者にして兩

人種の間は其外觀互に相親睦して魯衛の如しと雖もその内部に至りては睽離反目宛として吳越に似たり是れ余が紙上に於ける想像のみにあらずして近日の聞見する所之を證するに足る然り而して今や滿人種はその長技となして依頼せし所の武力も既に御侮折衝の任に當るに足らず大蘇の指す所八公山兵となり戈を倒にして我軍を迎ふるを觀れば吾人竊に彼等の爲に以後何を以て内は敵人種を壓し外は列國に對するかを慮らざるべからざるなり

學友狩野紫海余に語りて曰はく清朝學風の特質たる考證學はその人民を無氣力に陥れたりと夫れ或は然らん余は前回に於て清朝時代の學問に獨立の思想なく徒らに他人の陳說につき評論を試みたる者に過ぎざることを言へり

蓋し國家の大任を負ひて民人の具瞻に當り經濟の樞機を攬りて智識を活世界に試みんと欲するの人は到底考證學の如き一章一句の拘束に箝制せられ唯汲々としてその解釋を求むることによりて得らるべき者にあらず古來より儒者にして政事の大才を兼ねて治績の觀るに足るべき者を見よ彼等の多くは六經我注脚と稱せし陸象山の徒にあらずとするも少なくとも自己の思想を以てその解釋を爲す所の宋儒

に類するにあらずやかの趙咨が魏王の間に吳王浮江萬艘帶甲百萬、任賢使能、志存經略、有餘閑、博覽書傳、歷史籍、采奇異、不効書生尋章摘句而已と答へたるを觀現に現今考證家の泰斗たる愈樾と宋儒の學派なる李鴻章の徒と何れか經濟實用の才識に富み何れか清國人民の運命を左右するかを察するときは考證學の社會に與へたる影響の一斑を知るべし然り而して更に一派因の存するありて人才を萎靡せしめたる何ぞや曰はく科擧の制是れなり

現今清朝科擧の制度を案するに各省に卿試なる者ありて先づ秀才を試みその及第者擧人をば京師に送りて會都之を檢す之を會試と稱す共に丑辰未戌の歲八月の九日十有二日十有五日の三日を以て期となす更に殿試あり是れ天子自ら大和殿に御して擧人の及第者を試むる者にして其の選に中つる者を進士と稱し之を官吏に登用することあり或は之を翰林に容るゝことあり而してその試験科目は卿試會試共に第一期九日に書藝三及び論一、第二期十二日に經藝四及び五言八韻詩一、第三期十五日には時務第一なり又殿試には御製策問を出だして之に條對せしむ令、ウキリア、ムス氏の著書中國 (The Middle Kingdom) によりてその模様を略言せむに會試の問題

に出せる經藝の一は曾子曰以能問於不能以多回於寡有若無實若虛犯而不校昔者吾友嘗從事於斯矣にして其の世に傳ふ忽必烈大砲の數種を得たりと何人か之を彼に傳へたるか等あり亦詩の題は青山綠水聽琵琶等なり而して經藝に對する答案の如き一に欽定或は御纂の注書に本づきて一切他の異說を容るさゝるなり是を以て一官一職を得んと欲する者たゞ一生を此の擧科に盡して他あるを知らず自首に至ると雖も甘んじて之を爲す「マルテン」氏の言によるに千八百二十八年(道光八年)擧人となりたる者九十九人の内四十歳以上の者十六人六十二歳の者一人八十三歳の者一人ありたりと云ふ讀者よ徒に獨逸或は佛蘭西の大學に於て自首校門に出入する者あるを驚くなかれ吾人の隣邦に於ては更に甚しき者あるにあらずや而してかゝる老書生は幾何の數あるやと云ふにたゞ廣東の一區に於てすら千八百二十八年に於て四千八百人、一千八百三十二年(道光十二年)に於ては六千人之を支那十八省によりて算するときは殆んど十萬四千人なり此の十萬四千人の讀書社會阿附して官海に入らんことを計るその思想の腐敗せる豈驚嘆せざるべけんや黃宗羲曰はく其所謂學校者科擧器爭富貴蕪心亦遂以朝廷之勢利一變其本領而士之有才能學術者且往

往而拔於草野之間於學校初無與也、と三百年前に於て絶叫したるも猶今日に至りて積弊依然たるは吾人清朝學術の爲にその不幸を吊せずんばあるべからず
哲學的觀察を有せず獨立せる思想を發顯せざる文學は美なりと雖も人を感せしむること深からず韓退之の韓退之たる所以は彼が卓然として古文を天下に唱道し老佛を排して孔孟を擧げたるにあり李白の李白たる所以はその廣濶なる思想の天地を包容して絶對と唯一に歸したるにあり

吾人は清朝の文學を觀察することに其少數を除くの外軟弱にして萬丈の光燭なく膚淺にして人生の秘密に觸るゝ者少なく一讀索然たるを覺ふるは是れ清朝學風の然らしむる者なるを知る文氣を以て本となす而して清朝の文人は此の氣に乏しその著作の動もすれば纖巧浮華に失する亦怪むに足らざるなり

嗚呼國家百年の大計を畫する者豈深く心を學政に留めて思想の風潮を察せざるべけんや余清朝の國運を觀て感ずる所あり記して以て君子に質す

第三 清國現今の思想界

(哲學雜誌百八十二號及百八十三號)

積弊を挽回して非常の革新をなし以て一世を風靡して天下を聳動せしむる者は深奥なる理論に其根據を寓する者にして始て之を能くすることを得べしたゞ一時の偶感に驅らるゝ者の能する所に非るなり是を以て我國維新の大業はすでに徳川時代の國學者或は漢學者の頭腦によりて養成せられ今日諸政黨の依つて以て標榜する主義も歐米の哲學乃至政治學に其證權を求めざるはなし事實ありて然後理論あることは世の常なれど理論ありて然後始めて事實の生ずるを觀るも此種の事に於て往々怪むに足らざるが然則一代學風の根源に遡りて以て當面の事實を説明するも必しも無用の論に非るべし清國近日の政變に際し世人或は漫然として以爲らく是れ康有爲梁啓超諸氏が政治上の感慨に迫まれて一時の冒險を試みたるに過ぎざるべしと然れども熟ら之を考ふれば其實決して然らざるを知る此等諸氏の改革の本源は其由りて來る所頗る遠く其目的理想もまた頗る遠大なる者にして吾人の研究を値すべき者あるなり故に少々之を説明して併せて清國現今の思想界を評論せんと欲す讀者願くば歐米文獻研覈の餘暇を以て斯古國の新色に一瞥の勞を吝む

なかれ

第一 康有爲等諸氏は儒教を以て其主義となす、即ち證權を孔子に求め其著春秋を以て其理想の本據となし之を補ふに公羊傳及董仲舒の學を以てす

孔子堯舜を祖述し文武を憲章す詩書を刪して易傳を繋ぐ而して身用ひられず言容れられず是に於てか遂に之を空言に載するは行事に著はすの深切著明なるに若かずとなして春秋を作り以て其治國平天下の精神を寓したりといふ後世其傳を著す者五氏あり曰く鄒氏曰く夾氏曰く公羊氏曰く穀梁氏曰く左氏是れなり而して鄒夾二氏の學風に絶滅して後世之を窺ふことを得ずたゞ公羊穀梁左氏の三傳のみ今に至るまで諷誦せらる此三傳固より一得一失ありて學者の執る所同からずして相下らざる者あり今康梁諸氏は公羊傳によりて其主義を明かにせんとす其説如何

其一

康梁諸氏の理想は萬國の平和に在り之を證するに春秋三世の説を以てす春秋三世とは何ぞや隱公元年に曰く公子益師卒公羊傳之を釋して曰く何以不日遠也所見異辭所聞異辭所傳聞異辭と今之を解釋せんに春秋二百四十二年間を三期に區分す第

一期は傳聞の世にして隱桓莊閔僖の五公間をいふ傳聞とは何ぞや高祖曾祖當時の事にして孔子も之を傳聞したるに過ぎざるを以てなり第二期は所聞の世にして文宣成襄四公の間をいふ所聞とは何ぞや祖父當時の事にして孔子も稍々之を聞くことを得たるを以てなり第三期は所見の世にして昭定哀三公の間をいふ所見とは何ぞや孔子の實見に屬せし時代なるを以てなり而して更に第一期所傳聞を以て據亂の時代となし第二期所聞を以て升平の時代となし第三期所見を以て太平の時代となし世界の進運は漸々亂世を去りて治平に赴く者なりとす

春秋は此三期の區別を示すに日月を以てす先づ之を第一期所傳聞の世に見るに大夫卒するに當り其罪の有無を問はず一に其卒去の日を録せず隱公元年公子益師卒及び同八年冬十有二月無駭卒の如き是れなり益師は罪の稱すべき者なきも無駭に在りては然らず彼は實に極を滅したるの罪あり然れども春秋之を待すこと一の如くにして並に其卒去の日を録せず然るに第二期所聞の世に至りては大夫卒するに當り其罪なき者は其卒去の日を録するも若し罪あるときは然らず襄公五年冬十有二月辛未季孫行父卒及び宣公五年九月叔孫得臣卒の如き是れなり季孫行父には其